

寶種に於て已に勤に熾然ならしめき<sup>112</sup>地の精氣衆生の精氣正法の味醜醜の精氣、久しく住し增長せしめんが故に<sup>113</sup>亦我が如きも今世尊の所に於て、教勅を頂受し、己が境界の言説教令の自在を得る處に於て、一切の鬪諍飢饉を休息せしめ、乃至三寶種を斷絶せざら令めんが故に、三種の精氣久しく住して增長せしめんが故に、惡行の衆生を遮障し、行法の衆生を護養せんが故に、衆生をして三惡道を休息せしめ、三善道に趣向せしめんが故に、佛法をして久しく住することを得令めんが爲の故に、勤に護持を作すべし」と<sup>114</sup>佛の言はく<sup>115</sup>「善い哉、善い哉、妙丈夫、汝是の如くなる應し」と<sup>116</sup>爾の時に佛百億の大梵天王に告げて言はく<sup>117</sup>「所有の法を行し法に住し法に順じて惡を厭捨せん者は、今悉く汝等が手中に付嘱す<sup>118</sup>汝等賢首、百億の四天下各々の境界言説教令の自在を得る處に於て所有の衆生、弊惡熾熾にして他を惱害し、慈愍有ること無く、後世の畏を觀ず利利の心及び婆羅門、毘舍首陀の心を觸惱し、乃至畜生の心を觸惱せん<sup>119</sup>是の如く殺生の因縁を作し、乃至邪見の因縁を作し、其の所作に隨うて、非時の風雨あり、乃至地の精氣衆生の精氣正法の精氣をして、損滅の因縁を作さ令めば、汝遮止して善法に住せ令む應し<sup>120</sup>若し衆生有りて、善を得んと欲はん者、法を得んと欲はん者、生死の彼岸に度せんと欲はん者、所有の檀波羅蜜を修行する者、乃至般若波羅蜜を修行する者、所有の法を行じ法に住する衆生、及び行法の爲に事を營む者、彼の諸の衆生、汝等應當に護持し養育すべし<sup>121</sup>若し衆生有りて受持讀誦し、他の爲に演説し、種種に經論を解説せん<sup>122</sup>汝等當に彼の諸の衆生の與に念持方便して堅固力を得しめ所聞不忘智に入りて、諸法の相を信ぜしめ、生死を離れ令め、八聖道を修し三味の根相應せしむべし<sup>123</sup>若し衆生有りて、汝が境界に於て法に住し、奢摩他、毘婆舍那、次第方便して、諸の三昧

三八六

三八七

と相應して、三種の菩提を勤求し修習する者は、汝等應當に遮護し攝受して勤に捨施を作し、乏少せ令むること勿るべし<sup>124</sup>若し衆生有りて、其の飲食衣服臥具を施し、病患の因縁に湯藥を施さん者は、汝等應當に彼の施主をして五利增長せ令むべし<sup>125</sup>何等をか五と爲す<sup>126</sup>一には壽增長、二には財增長、三には樂增長、四には善行增長、五には慧增長なり<sup>127</sup>汝等長夜に利益を得て安樂ならん<sup>128</sup>是の因縁を以て、汝等能く六波羅蜜を滿じ、久しからずして一切種智を成ずることを得ん」と<sup>129</sup>時に娑婆世界の主大梵天王を首と爲し、百億の諸の梵天王と共に、咸く是の言を作さく<sup>130</sup>是の如し是の如し<sup>131</sup>大德婆伽婆、我等各自が境界に於て、弊惡熾熾にして他を惱害し、慈愍の心無く、後世の畏を觀ず、乃至我當に遮障し、彼の施主の與に五事を增長すべし」と<sup>132</sup>佛言はく<sup>133</sup>「善い哉、汝應に是の如くなるべし」と<sup>134</sup>爾の時復一切の菩薩摩訶薩、一切の諸大聲聞、一切の天龍、乃至一切の人非人等有りて、讀じて言さく<sup>135</sup>「善い哉善い哉、大雄猛士、汝等是の如きの法久しく住することを得しめ、諸の衆生をして惡道を離れ、速に善道に趣くことを得令むべし」と。<sup>136</sup>爾の時に世尊重ねて此の義を明さんと欲して、偈を説きて言はく<sup>137</sup>「我月藏に告げて言はく<sup>138</sup>此の賢劫の初に入りて、鳩留佛、梵等に四天下を付嘱したまふ<sup>139</sup>諸惡を遮障するが故に、正法の眼を熾然ならしむ<sup>140</sup>諸の惡事を捨離し、行法の者を護持し、三寶の種を斷たず、三精氣を増長し、諸の惡趣を休息し、諸の善道に向は令む<sup>141</sup>拘那含牟尼、復大梵王、他化樂天、乃至四天王に囑したまふ<sup>142</sup>次後に迦葉佛、復梵天王、化樂等の四天帝釋、護世王過去の諸の天仙に囑したまふ<sup>143</sup>諸の世間の爲の故に、諸の宿曜を安置し、護持養育せ令む<sup>144</sup>濁惡世に至りて、白法盡滅せん時、我獨り無上を覺り、人民を安置し護る<sup>145</sup>今大衆の前に於て、數數我を惱亂せば、應當に説法を捨つべし、

我を置いて護持せしめよ 146 十方の諸の菩薩、一切悉く來集し、天王も亦此の娑婆佛國土に來る 147 我大梵王に問はく、「誰か昔護持せる者ぞ」と 148 帝釋・大梵天、餘の天王を指示す 149 時に於て釋梵王、過を導師に謝して言く 150 「我等所王の處、一切の惡を遮障し、三寶種を熾然ならしめ、三精氣を増長し、諸惡の朋を遮障し、善の朋黨を護持せん」と。已上抄出す

【一〇七】『月藏經』卷の第七、「諸魔得敬信品」第十に言はく、爾の時に復百億の諸魔有り、俱共に同時に座より起ち、合掌して佛に向ひたてまつり、佛足を頂禮して、佛に白して言さく、「世尊、我等亦當に大勇猛を發して、佛之正法を護持養育し、三寶種を熾然ならしめて、久しく世間に住せしめ、地の精氣衆生の精氣法の精氣、皆悉く増長せしむべし 4 若し世尊の聲聞弟子有りて、法に住し法に順じ、三業相應して修行せば、我等皆悉く護持養育して、一切の所須乏しき所無からしめん」と 乃至 5 「此の娑婆界に於て、初め賢劫に入りし時、拘樓孫如來、已に四天を帝釋・梵天王に囑して、護持し養育せしめ、三寶種を熾然ならしめ、三精氣を増長せしめたまひき 6 拘那含牟尼、亦四天下を梵釋諸天王に囑し、護持し養育せしめたまひき 7 迦葉亦是の如し、已に四天下を梵釋護世王に囑し、行法の者を護持せしめたまひき 8 過去の諸の仙衆、乃以諸の天神、星辰諸の宿曜、亦囑して分布せしむ 9 我五濁世に出でて、諸魔怨を降伏し、大集會を作して、佛の正法を顯現すと 乃至 10 「一切の諸天衆、咸く共に佛に白して言さく 11 我等所王の處、皆正法を護持し、三寶種を熾然ならしめ、三精氣を増長せしめ、諸の病疫・飢饉及び鬪諍を息めしめん」と。乃至略出す

【一〇八】「提頭賴吒天王護持品」『月藏經』に云はく、佛言はく、「日天子・月天子、汝我が法に於て護持養育せば、

汝をして長壽にして諸の衰患無からしめん」と 爾の時に復百億の提頭賴吒天王・百億の毘樓勒叉天王・百億の毘樓博叉天王・百億の毘沙門天王有り、彼等同時に及び眷屬と座より起ち、衣服を整理し、合掌敬禮して、是の如きの言を作さく 5 「大德婆伽婆、我等各各己が天下に於て、勤に佛法を護持養育することを作し、三寶種熾然として久しく住し、三種の精氣皆悉く増長せしめん乃至 6 我今亦上首毘沙門天王と、同心に此の閻浮提と北方と諸佛の法を護持せん」と。已上抄出す

【一〇九】『月藏經』卷の第八「忍辱品」第十六に言はく、佛の言はく、是の如し是の如し、汝が言ふ所の如し 4 若し己を愛し苦を厭ひ樂を求むる有らば、應當に諸佛の正法を護持すべし、此従り當に無量の福報を得べし 5 若し衆生有りて、我が爲に出家し、鬚髮を剃除し、袈裟を被服せん、設ひ戒を持たざれども、彼等悉く已に涅槃印の爲に印せ所る、なり 6 若し復出家して戒を持たざる者、非法を以て惱亂を作し、罵辱毀若し、手刀杖を以て打縛斫截し、若し衣鉢を奪ひ、及び種種資生の具を奪ふ者有らば、是の人則ち三世の諸佛の眞實報身を壞するなり、則ち一切天人の眼目を挑るなり 7 是の人諸佛所有の正法三寶種を隱没せんと欲する爲の故に、諸の天人をして利益を得ず、地獄に墮せしむるが故に、三惡道增長し盈滿するが爲の故に」と。已上

【一一〇】又言はく、爾の時に復一切の天龍、乃至一切迦吒富單那、人非人等有り、皆悉く合掌して是の如きの言を作さく 3 「我等、佛の一切の聲聞弟子、乃至若し復禁戒を持たざれども、鬚髮を剃除し袈裟の片を著ん者に於て、師長の想を作し、護持養育し、諸の所須を與へて乏少なること無からしめん 4 若し餘の天龍、乃至迦吒富單那等、其の惱亂を作し、乃至惡心をもて眼を以て之を視れば、我等悉く共に彼の天龍・富單那等の所有

の諸根をして缺減醜陋なら令め、彼をして復我等と共に住し共に食することを得ず、亦復同處に戲笑することを得ざら令め、是の如く擯罰せん」と。已上

【二二】 又言はく、『佛華嚴經』に「占相を離れ、正見を修習し、決定して深く罪福の因縁を信すべし」と。抄出す

【二三】 『首楞嚴經』に言はく、彼等諸魔、彼の諸の鬼神、彼等羣邪、亦徒衆有り、各自自ら「無上道を成ず」と謂はん、我が滅度の後の末法之中に此の魔民多く、此の鬼神多く、此の妖邪多くして、世間に熾盛ならん

善知識と爲りて、諸の衆生をして愛見の坑に落ち、菩提の路を失は令めん、無識を説惑して、恐らくは心を失は令めん、所過之處、其の家耗散し、愛見の魔と成りて、如來の種を失はん」と。已上

【二四】 『灌頂經』に言はく、三十六部の神王、萬億恆沙の鬼神を眷屬と爲して、相を陰し番に代りて、三歸を受くる者を護る、と。已上

【二五】 『地藏十輪經』に言はく、具に正しく歸依して、一切の妄に吉凶を執することを遠離し、終に邪神外道に歸依せざれ、と。

【二六】 又言はく、或は種種に若は少若は多、吉凶之相を執じ、鬼神を祭りて乃至極重大罪惡業近無間罪を生ず、是の如き之人、若し未だ懺悔して是の如きの大罪惡業を除滅せずば、出家し及び具戒を受け令めず、若し出家し或は具戒を受け令めば、師便ち罪を得ん、と。已上

【二七】 『集一切福德三昧經』の中に言はく、餘乘に向はされ、餘天を禮せざれ、と。已上

【二八】 『本願藥師經』に言はく、若し淨信の善男子、善女人等有らん、乃至盡形まで餘天に事へざれ、と。已上

【二九】 又言はく、又世間の邪魔外道、妖孽之師妄に禍福を説くを信じて、便ち恐動を生じ、心自ら正しからず、卜問して禍を覓め、種種の衆生を殺して、神明に解奏し、諸の魑魅を呼びて福祐を請乞し、延年を欲冀して、終に得ること能はず、愚癡迷惑して邪を信じ倒見し、遂に横死せ令む、地獄に入りて、出期有ること無し乃至、八には、横に毒藥・厭禱・呪咀・起屍鬼等の爲に中害せ所る、と。已上抄出す

【三〇】 『菩薩戒經』に言はく、出家の人の法は、國王に向ひて禮拜せず、父母に向ひて禮拜せず、六親に務へず、鬼神を禮せず、と。已上

【三一】 『佛本行集經』第四十二卷、「優婆塞那品」に言はく、闍那頗多譯、爾の時に、彼の三迦葉兄弟、一の外甥螺髻梵志有り、其の梵志を「優婆塞那」と名く乃至、恆に二百五十の螺髻梵志の弟子と共に、仙道を修學す、彼其の舅迦葉三人、諸の弟子と、彼の大沙門の邊に往詣するを聞く、阿舅鬚髮を剃除して袈裟衣を著く、見已りて、舅に向ひて偈を説きて言く、「舅等虚しく火を祀ること百年、亦復空しく彼の苦行を修しき、今日同じく此の法を捨つること、猶蛇の故き皮を脱ぐが如くす」と、爾の時彼の舅迦葉三人、同じく共に偈を以て其の外甥優婆塞那に報へ、是の如きの言を作さく、「我等昔空しく火神を祀り、亦復徒に苦行を修しき、我等今日此の法を捨つること、實に蛇の故き皮を脱ぐが如くす」と。抄出す

【三二】 『起信論』に曰く、或は衆生有りて、善根力無ければ、則ち諸魔外道鬼神の爲に誑惑せ所る、若は座中に於て形を現じて恐怖せしめ、或は端正の男女等の相を現す、當に唯心を念すべし、境界則ち滅して終に惱を爲さず、或は天像菩薩像を現じ、亦如來の像の相好具足せるを作す、若は陀羅尼を説き、若は布施持戒、

【三三】 又言はく、又世間の邪魔外道、妖孽之師妄に禍福を説くを信じて、便ち恐動を生じ、心自ら正しからず、卜問して禍を覓め、種種の衆生を殺して、神明に解奏し、諸の魑魅を呼びて福祐を請乞し、延年を欲冀して、終に得ること能はず、愚癡迷惑して邪を信じ倒見し、遂に横死せ令む、地獄に入りて、出期有ること無し乃至、八には、横に毒藥・厭禱・呪咀・起屍鬼等の爲に中害せ所る、と。已上抄出す

【三四】 『菩薩戒經』に言はく、出家の人の法は、國王に向ひて禮拜せず、父母に向ひて禮拜せず、六親に務へず、鬼神を禮せず、と。已上

【三五】 『佛本行集經』第四十二卷、「優婆塞那品」に言はく、闍那頗多譯、爾の時に、彼の三迦葉兄弟、一の外甥螺髻梵志有り、其の梵志を「優婆塞那」と名く乃至、恆に二百五十の螺髻梵志の弟子と共に、仙道を修學す、彼其の舅迦葉三人、諸の弟子と、彼の大沙門の邊に往詣するを聞く、阿舅鬚髮を剃除して袈裟衣を著く、見已りて、舅に向ひて偈を説きて言く、「舅等虚しく火を祀ること百年、亦復空しく彼の苦行を修しき、今日同じく此の法を捨つること、猶蛇の故き皮を脱ぐが如くす」と、爾の時彼の舅迦葉三人、同じく共に偈を以て其の外甥優婆塞那に報へ、是の如きの言を作さく、「我等昔空しく火神を祀り、亦復徒に苦行を修しき、我等今日此の法を捨つること、實に蛇の故き皮を脱ぐが如くす」と。抄出す

【三六】 『起信論』に曰く、或は衆生有りて、善根力無ければ、則ち諸魔外道鬼神の爲に誑惑せ所る、若は座中に於て形を現じて恐怖せしめ、或は端正の男女等の相を現す、當に唯心を念すべし、境界則ち滅して終に惱を爲さず、或は天像菩薩像を現じ、亦如來の像の相好具足せるを作す、若は陀羅尼を説き、若は布施持戒、

忍辱・精進・禪定・智慧を説き、或は「平等空・無相・無願・無怨・無親・無因・無果・畢竟空寂、是れ眞涅槃なり」と説く<sup>7</sup>。或は人をして宿命・過去之事を知り、亦未來之事を知り、他心智を得、辯才無礙ならしむ<sup>8</sup>。能く衆生をして世間名利之事に貪著せしむ。又人をして數暈り數喜び、性常准無<sup>9</sup>、或は多く慈愛し、多く睡り多く宿し多く病み、其の心懈怠し、或は卒に精進を起し、後に便ち休廢し、不信を生じて多く疑ひ多く慮り、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修し、若は世事に著して種種に牢纏令使む<sup>10</sup>。亦能く人をして諸の三昧の少分の相似を得使む<sup>11</sup>。皆是れ外道の所得にして、眞の三昧に非ず<sup>12</sup>。或は後人をして若は一日若は二日若は三日乃至七日、定中に住して、自然の香美飲食を得令む<sup>13</sup>。身心適悅して、飢えず渴せず、人をして愛著せ使む<sup>14</sup>。或は亦人をして食に分齊無く乍ち多く乍ち少く、顔色變異せ令む<sup>15</sup>。是の義を以ての故に、行者常に智慧觀察して、此の心をして邪網に墮せ令むること勿る應し<sup>16</sup>。當に勤めて正念にして、取らず著せず、則ち能く是の諸の業障を遠離すべし<sup>17</sup>。應に知るべし、外道の所有の三昧は、皆見愛・我慢之心を離れず、世間の名利恭敬に貪著するが故なり、と。已上。

【三】『辯正論』法琳の撰に曰く<sup>2</sup>。十喻九箴篇、李道士の十異九迷に答ふ<sup>3</sup>。外の一異に曰く<sup>4</sup>。太上老君は、神を玄妙玉女に託して、左腋を割きて生る<sup>5</sup>。釋迦牟尼は、胎を摩耶夫人に寄せて、右脇を開きて出づ<sup>6</sup>。内の一喻に曰く<sup>7</sup>。老君は常に逆ひ、牧女に託して左より出づ<sup>8</sup>。世尊は化に順うて、聖母に因りて右より出づ<sup>9</sup>。と。開士の曰く<sup>10</sup>。盧景裕・戴詵・韋處玄等の『集解五千文』及び梁の元帝・周弘政等の『考義類』を案するに云く<sup>11</sup>。太上に四有り、謂く三皇及び堯舜是れなり<sup>12</sup>。と。言ふに、ろは、上古に此の大徳之君有り、萬民の上に

臨めり、故に「太上」と云ふなり<sup>13</sup>。郭莊の云く<sup>14</sup>。時之賢とする所の者を君と爲す、材の世に稱せられざる者を臣と爲す<sup>15</sup>。と。老子は帝に非ず、皇に非ず、四種之限に在らず、何の典據有りてか輒ち「太上」と稱する耶<sup>16</sup>。道家の『玄妙』及び『中台』・『朱籙』・『玉札』等の經、竝に『出塞記』を檢するに、老は是れ李母の生む所<sup>17</sup>と云ひ、玄妙玉女有り<sup>18</sup>と云はす<sup>19</sup>。既に正説に非ず、尤も假謬の談なり<sup>20</sup>。仙人玉籙<sup>21</sup>に云く<sup>22</sup>。仙人は妻無し、玉女は夫無し、女形を受くと雖も、畢竟産せず<sup>23</sup>。若し茲の瑞有らば、誠に嘉す可しと曰ふ<sup>24</sup>。何爲ぞ『史記』にも文無く、『周書』にも載せざる<sup>25</sup>。虚を求めて實を責むるは、信に矯妄者之言のみ<sup>26</sup>。と。『禮』に云く<sup>27</sup>。官を退きて位無き者は左遷す<sup>28</sup>。と。『論語』に云く<sup>29</sup>。左衽は禮に非ず<sup>30</sup>。と。若し左を以て右に勝るとせば、道土行道するに、何ぞ左に旋らずして還りて右に轉する耶<sup>31</sup>。國之詔書に、皆「右の如し」と云ふ、竝に天之常に順ふなり<sup>32</sup>。乃至<sup>33</sup>。外の四異に曰く<sup>34</sup>。老君は文王之日、隆周之宗師爲り<sup>35</sup>。釋迦は莊王之時、闍賓之教主爲り<sup>36</sup>。と。内<sup>37</sup>の四喻に曰く<sup>38</sup>。伯陽は職、小臣に處り、忝なく藏吏に充れり<sup>39</sup>。文王之日に在らず、亦隆周之師に非ず<sup>40</sup>。老君の世に降る、周文之日自り始めて、孔丘之時に訖る<sup>41</sup>。釋迦の下生する、淨飯之家に肇め、我が莊王之世に當れり<sup>42</sup>。と。内<sup>43</sup>の六喻に曰く<sup>44</sup>。老聃は桓王丁卯之歳に生れて、景王壬午之年に終ふ<sup>45</sup>。孔丘之時に訖ると雖も、姬昌之世に出でず<sup>46</sup>。調御は昭王甲寅之年に誕じて、穆王壬申之歳に終ふ<sup>47</sup>。是れ淨飯之胤爲り、本莊王之前に出づ<sup>48</sup>。と。開士の曰く<sup>49</sup>。孔子周に至り、老聃を見て禮を問ふ焉<sup>50</sup>。『史記』に具に顯る<sup>51</sup>。文王之師爲ることは則ち典證無し<sup>52</sup>。周末に出づることは、其の事尋ぬ可し<sup>53</sup>。若し周初に在ることは史文に載せず<sup>54</sup>。乃至<sup>55</sup>。外<sup>56</sup>の七異に曰

く「老君は初め周の代に生れ、晩に流沙に適く、終る所を測らず、方所を知ること莫し」<sup>48</sup>釋迦は西國に生れて、彼の提河に終りぬ、弟子、胸を槌ち、羣胡大に叫ぶ」と<sup>50</sup>内の七喻に曰く「老子は頼郷に生れて槐里に葬る、秦佚之弔に詳なり、責通天之形に在り」<sup>52</sup>瞿曇は彼の王宮に出てて茲の鶴樹に隠る、漢明之世に傳り、秘して蘭臺之書に在り」と<sup>53</sup>開士の曰く「莊子内篇に云く<sup>54</sup>老聃死して秦佚弔ふ焉、三たび號んで出づ<sup>55</sup>弟子怪み問ふ、「夫子之徒に非ざる歟」と<sup>57</sup>秦佚曰く「向に吾入りて見るに、少者之を哭すること其の父を哭するが如く、老者之を哭すること其の子を哭するが如し<sup>59</sup>古は之を「通天之形」と謂ふ<sup>60</sup>始は以爲へらく、「其の人なり」と、而るに今は非なり」と<sup>61</sup>「通」とは隠なり、「天」とは免縛なり、「形」とは身なり<sup>62</sup>言ふこと、ろは、始め老子を以て免縛隱形之仙と爲す、今は則ち非なりとなり<sup>63</sup>嗟其の詔曲にして人之情を取るが故に、死を免れず、我が友に非ず」と乃至<sup>64</sup>内の十喻、外の十異に答ふ<sup>65</sup>外、生より左右異なる一<sup>66</sup>内、生より勝劣有り<sup>67</sup>内喻に曰く<sup>68</sup>「左衽は則ち戎狄の尊ぶ所、右命は中華の尙ぶ所と爲す<sup>69</sup>故に「春秋」に云く<sup>70</sup>「冢駟は命無し、介駟は之れ有り、亦左ならず乎」<sup>71</sup>「史記」に云く<sup>72</sup>「蘭相如は功大にして、位廉頗の右に在り、頗之を耻づ」と<sup>73</sup>又云く<sup>74</sup>「張儀相は秦を右にし魏を左にす、犀首相は韓を右にし魏を左にす」と<sup>75</sup>蓋し不便を云ふなり<sup>76</sup>「禮」に云く<sup>77</sup>「左道亂羣は之を殺す」と<sup>78</sup>豈右は優りて左は劣れるに非ず也<sup>79</sup>皇甫謐が「高士傳」に云く<sup>80</sup>「老子は楚之相人なり、渦水之陰に家し、常樞子に師事す<sup>81</sup>常子疾有るに及んで、李耳往きて疾を問ふ」と焉<sup>82</sup>康の云く<sup>83</sup>「李耳涓子に從ひて九仙之術を學ぶ」と<sup>84</sup>太史公等の「衆書」を檢するに、「老子左腋を割きて生る」と云はず<sup>85</sup>既に正出無し、承信す可からざる事明なり矣<sup>86</sup>驗に知んぬ、戈を揮ひ翰を操るは蓋し文武之

二九五

先、五氣三光は寔に陰陽之首なり<sup>87</sup>是を以て釋門の右に轉ずるは且く人の用を扶く、張陵の左道は信に天の常に逆ふ<sup>88</sup>何となれば、釋迦は無縁之慈を起して、有機之召に應ず、其の迹を語るなり乃至<sup>89</sup>夫れ釋氏は、天上天下介然として其の尊に居す、三界六道卓爾として其の妙を推す乃至<sup>90</sup>外論に曰く「老君は範を作す、唯孝唯忠、世を救ひ人を度し、慈を極め愛を極む<sup>92</sup>是を以て聲教永く傳はりて、百王改めず、玄風長く被りて、萬古差ふこと無し<sup>93</sup>所以に國を治め家を治むるに、常然たる格式なり<sup>94</sup>釋教は義を棄て親を棄て、仁ならず、孝ならず<sup>95</sup>闍王父を殺すに翻りて儻無しと説き、調達兄を射るに罪を得たるを聞くこと無し<sup>96</sup>此を以て凡を導く、更に惡を長ずることを爲す<sup>97</sup>斯を用て世に範とす、何ぞ能く善を生ぜんや<sup>98</sup>此れ逆順之異の十なり」<sup>99</sup>内喻に曰く<sup>100</sup>「義は乃ち道德の卑うする所、禮は忠信之薄きより生ず<sup>101</sup>瓊仁は匹婦と譏り、大孝は不置に存す<sup>102</sup>然るに凶に對して歌吟するは中夏之容に乖き、喪に致んで盆を扣くは、華俗之訓に非ず<sup>103</sup>原壤母死す、棺に騎りて歌ふ、孔子祭を助けて譏らず。子桑死す、子貢弔ふ、四子相視て笑ふ。莊子妻死す、盆を扣きて歌ふ<sup>104</sup>故に之を教ふるに孝を以てするは、天下の人父爲るを敬する所以なり<sup>105</sup>之を教ふるに忠を以てするは、天下の人君爲るを敬するなり<sup>106</sup>化萬國に周きは乃ち明辟之至仁、四海に形はるるは實に聖王之巨孝なり<sup>107</sup>佛經に言く<sup>108</sup>「識體六趣に輪廻す、父母に非ざるは無し<sup>109</sup>生死三界に變易す、孰か怨親を辨へん」と<sup>110</sup>又言く<sup>111</sup>「無明慧眼を覆ひ、生死の中に來往す<sup>112</sup>往來して作す所多し、更に互に父子と爲る<sup>113</sup>怨親數知識と爲り、知識數怨親と爲る」と<sup>114</sup>是を以て沙門俗を捨てて眞に趣き、庶類を天屬に均しうす<sup>115</sup>榮を遺てて道に即き、含氣を己親に等しうす<sup>116</sup>普正之心を行じ、普親之志を等しうす、<sup>117</sup>且道は清虛を尙ぶ、爾恩愛を重んず<sup>118</sup>法は平等を貴ぶ、爾怨親を簡ぶ

119 豈惑へる非ずや 120 勢競うて親を遺るは、文史の明事、齊桓楚穆、此れ其の流なり 121 以て聖を警らんと欲す、豈謬らざる哉 122 爾が道之劣れる十なり乃至 123 一皇化を統へて、『須彌四域經』に云く、「應聲菩薩を伏養と爲す、吉祥菩薩を女媧と爲す」と 淳風之初に居り、三聖言を立て、『空寂所問經』に云く、「迦葉を老子と爲し、儒童を孔子と爲し、光淨を顔回と爲す」と 已澆之末に興る 124 玄虛沖一之旨、黃老其の談を盛にし、詩書禮樂之文、周孔其の教を隆くす 125 謙を明にし質を守るは、乃ち聖に登る之階梯、三畏五常は人天之由漸と爲す 126 蓋し佛理に冥符すれども正辯之極談に非ず 127 猶道を指臂に訪ふに方を應して遠邇を窮むること莫く、津を兎馬に問ふに濟ることを知りて淺深を測らざるがごとし 128 斯に因りて談するに、殷周之世は釋教の行す宜き所に非ず 129 猶炎威耀を赫せば、童子目を正しうして視ること能はず、迅雷奮ひ撃てば、懦夫耳を張りて聴くこと能はざるがごとし 130 是を以て河池涌泛して、昭王神を誕することを懼れ、雲霓色を變じて、穆后聖を亡ふことを欣ぶ 131 『周書異記』に云く、「昭王二十四年四月八日、江河泉悉く皆泛び漲る。穆王五十二年二月十五日、暴風卒に起り、樹木摧折る、天陰く雲黒く、白虹之惟有り。」 132 豈能く葱河を越えて化を稟け、雪嶺を踏えて誠を効さんや 133 『淨名』に云く 134 是れ盲者の過なり、日月の咎に非ず」と 135 適其の鑿竅之辯を窮めんと欲せば、恐くは吾子混沌之性を傷まん 136 爾が知る所に非ず、其の旨の一なり 137 内、像塔を建造する指の二 138 漢明自り已下、齊梁に訖るまで、王公守牧、清信士女、及び比丘比丘尼等、冥に至聖を感じ、目に神光を覩る者、凡そ二百餘人 139 迹を萬山に見、耀を滬濱に浮べ、清臺之下滿月之容を覩、雍門之外相輪之影を觀、南平は應を瑞像に獲、文宣は夢を聖牙に感じ、蕭后一たび鑄て剋成し、宋皇四たび摸して就らざるが如きに至りては、其の例甚だ衆し、具に陳ぶ可からず 140 豈爾之無

三九七

目を以て、彼之有靈を斥はん哉 141 然るに徳として備はらざる無き者、之を謂ひて「涅槃」と爲す 142 道として通ぜざる無き者、之を名けて「菩提」と爲す 143 智として周からざる無き者、之を稱して「佛陀」と爲す 144 此の漢語を以て彼の梵言を譯せば、則ち彼此之佛、昭然として信す可し 145 何を以て之を明すとならば、夫れ佛陀は漢に「大覺」と言ふ、菩提は漢に「大道」と言ふ、涅槃は漢に「無爲」と言ふ 146 而るに吾子、終日菩提之地を踐みて、「大道即ち菩提の異號」なることを知らず 147 形を大覺之境に稟けて、未だ「大覺即ち佛陀之譯名」なることを閑はず 148 故に莊周の云く 149 「且大覺有る者は而る後に其の大夢を知る」と 150 『郭註』に云く 151 覺とは聖人なり、言ふ、ろは患懐に在るは皆夢なり」と 152 註に云く 153 「夫子と子游と未だ言を忘れて神解すること能はず、故に大覺に非ず」と 154 君子の曰く 155 「孔丘之談、茲に亦盡きぬ矣」と 156 涅槃は寂照にして、識として識る可からず、智として知る可からず、則ち言語斷えて、心行滅す、故に言を忘る、なり 157 法身は乃ち三點四德之成する所、蕭然として累無し、故に「解脱」と稱す 158 此れ其の神解して患息むなり 159 夫子聖なりと雖も、遙に以て功を佛に推る 160 何となれば、劉向が古舊二録を按ずるに云く 161 『佛經中夏に流れて、一五十年の後に、老子方に五千文を説く 162 然り而して周と老と、竝に佛經を見る 163 所説の言教往往往驗す可し』と乃至 164 『正法念經』に云はく 165 「人戒を持たざれば、諸天減少し、阿修羅盛に、善龍力無く、惡龍力有り 166 惡龍力有れば、則ち霜雹を降し、非時の暴風疾雨ありて、五穀登らず、疾疫競ひ起り、人民飢饉し、互に相殘害す 167 若し人戒を持つこと多ければ、諸天は威光を増足し、修羅減少し、惡龍力無く、善龍力有り 168 善龍力有れば、風雨時に順ひ、四氣和暢し、甘雨時に降り、百穀稔豊す 169 人民安樂にして、兵戈敢息し、疾疫行は

れず」と乃至170君子の曰く171道士の『大書隱書』『無上眞書』等に云く172「無上大道君は、五十五重無極大羅天の中、玉京之上、七寶玄臺金床玉机に治在し、仙童玉女に侍衛せ所れ、三十二天三界之外に住す」と173「神仙五岳圖」を按ずるに云く174「大道天尊は大玄之都玉光之州金眞之郡天保之縣元明之郷定志之里に治す、災の及ばざる所なり」と175「靈書經」に云く176「大羅は是れ五億五萬五千五百五十五重天上天なり」と177「五岳圖」に云く178「都とは觀なり、太上大道は道中之道なり、神明君最、靜を守りて太玄之都に居る」と179「諸天内音」に云く180「天と諸仙と、樓都之鼓を鳴し、玉京に朝宴して、以て道君を樂ましむ」と181道士上の所の經目を案ずるに、皆云く182「宋人陸修靜の所列に依るに、一千二百二十八卷なり」と183本「雜書諸子」之名無し184而るに道士今列するに、乃ち二千四十卷有り185其の中多く「漢書藝文志」の目を取り、妄に八百八十四卷を註して、道の經論と爲す 乃至186案ずるに、陶朱は即ち是れ范蠡なり187范蠡親り越王勾踐に事へ、君臣悉く吳に囚はれて、尿を管め尿を飲みて、亦以て甚し矣188又復范蠡の子、齊に鬻さ被189父既に變化之術有らば、何を以てか變化して之を免る、こと能はざる190「造立天地記」を案ずるに稱すらく191「老子幽王の皇后の腹の中に託生す」と192即ち是れ幽王之子なり193又身柱史爲り、復是れ幽王之臣なり194「化胡經」に言く195「老子漢に在りては東方朔と爲す」と196若し審に兩らば、幽王犬戎の爲に殺さ所るを知りて、豈君父を愛して神符を與へ君父をして死せざら令めざる可けん耶乃至197陸修靜が「目錄」を指す、既に正本無し、何ぞ謬之甚しきや198然るに修靜目を爲ること、已に是れ大偽なり199今の「玄都錄」復是れ偽中之偽なり矣と。乃至

【二三】又云く『大經』『靈寶經』の中に説かく「道に九十六種有り、唯佛の一道是於正道なり、其餘の九

十五種は皆是れ外道なり」と 朕外道を捨て、以て如來に事ふ 若し公卿有りて能く此の誓に入る者は、各菩提心を發す可し 6 老子周公孔子等、是れ如來の弟子なりと雖も、而も化を爲すこと既に邪なり 7 止是れ世間之善なり、凡を隔て、聖と成すこと能はず 8 公卿百官侯王宗室、宜しく偽を反して眞に就き、邪を捨て、正に入るべし 9 故に經教『成實論』に説きて云く 10 若し外道に事へて心重く、佛法の心輕きは即ち是れ邪見なり」と 11 若し心一等なれば、是れ無記にして善惡に當らず 12 佛に事ふる心強く、老子の心少きは、乃ち是れ清信なり 13 「清信」と言ふは、「清」は是れ表裏俱に淨く、垢穢惑累皆盡く、「信」は是れ正を信じて邪ならず、故に「清信の佛弟子」と言ふ 14 其餘は等しく皆邪見なり、「清信」と稱することを得ず乃至 15 老子之邪風を捨て、法流之眞教に入れ」と。已上抄出す

【二四】光明寺の和尚「善導法事讃」の云く 2 上方の諸佛恆沙の如く、還りて舌相を舒べたまふことは、娑婆の十惡五逆、多く疑謗し、邪を信じ鬼に事へ、神魔を饒かして、妄に想うて恩を求めて「福有らん」と謂へば、災障禍横轉た 彌多く、連年病に床枕に臥し、聾盲、脚折れ、手攀き擲れ、神明に承事して、此の報を得るもの、爲なり 3 如何ぞ捨て、彌陀を念せざらん、と。已上

【二五】天台「智顛の『法界次第』」に云く 2 一には佛に歸依す 3 「經」『涅槃經』に云はく 4 「佛に歸依せん者は終に更へて其餘の諸の外天神に歸依せざれ」と 又云く 6 「佛に歸依せん者は、終に惡趣に墮さず」と 7 二には法に歸依す 8 謂く「大聖の所説、若し教若し理、歸依し修習せよ」 9 三には僧に歸依す 10 謂く「心家を出でたる三乘正行之伴に歸するが故に」 11 「經」に云はく 12 「永く復更へて其餘の諸の外道に歸依せざれ」と。已上

【二六】慈雲大師 聖那文類の云く 然るに祭祀之法は、天竺の章陀、支那の祀典、既に世論を逃れず、眞に誘俗之權方なり、と。已上

【二七】高麗の觀法師 四教儀の云く 餓鬼道、梵語には閻黎多、此の道亦諸趣に偏す 福德有る者は、山林塚廟神と作り、福德無き者は、不淨處に居し、飲食を得ず、常に鞭打を受く 河を填め海を塞ぎ、苦を受くること無量なり 詭誑の心意、下品の五逆十惡を作りて、此の道の身を感じず、と。已上

【二八】神智法師 四教儀集解の釋して云く 餓鬼道は、常に飢うるを「餓」と曰ふ、「鬼」之言は歸なり 尸子に曰く「古は人の死を名けて「歸人」と爲す 又人神を「鬼」と云ひ、地神を「祇」と曰ふ」と乃至 形或は人に似たり、或は獸等の如し 心正直ならざれば、名けて「詭誑」と爲す、と。

【二九】大智律師 五顯靈新記の云く 神は謂く鬼神なり、總て四趣に收む、天修鬼獄なり、と。

【三〇】度律師 戒度義疏扶新論の云く 魔は即ち惡道の所收なり、と。

【三一】止觀の「魔事境」に云く 二に魔の發相を明さば、管屬に通じて皆稱して「魔」と爲す 細しく枝異を尋ねれば、三種を出す 一には隨惕鬼、二には時婿鬼、三には魔羅鬼なり 三種の發相、各各不同なり、と。

【三二】源信「止觀」に依りて云く 魔は煩惱に依りて菩提を妨ぐ、鬼は病惡を起して命根を奪ふ、と。已上

【三三】論語「季路問はく、「鬼神に事へんか」 子の曰はく「事ふること能はず、人焉ぞ能く鬼神に事へんや」と。已上抄出す

竊に以れば 聖道の諸教は行證久しく廢れ 淨土の眞宗は

證道今盛なり 然るに諸寺の釋門、教に昏くして分、眞假の門戸を知らず 洛都の儒林、行に迷うて分、邪正の道路を辨ふること無し 斯を以て、興福寺の學徒、太上天皇後鳥羽院と號す諱尊成に今上土御門院と號す諱爲仁の聖曆、承元丁卯の歲、仲春上旬之候に奏達す 主上臣下 11法に背き義に違し 12忿を成し、怨を結ぶ 13茲に因りて 14眞宗興隆の太祖 源空法師 15并に門徒數輩 16罪科を考へず 17或は僧の儀を改め、姓名を賜うて遠流に處す 18予は其の一なり 19爾れ者已に僧に非ず俗に非ず 20是の故に「禿」の字を以て姓と爲す 21空師并に弟子等、諸方の邊州に坐して、五年の居諸を経たりき 22皇帝佐渡院諱守成の聖代 23建曆辛未の歲、子月中旬第七日 24勅免を蒙りて入洛して已後 25空は洛陽東山の西の麓、鳥部野の北の邊、大谷に居たまふ 26同じき二年壬申 寅月下旬第五日、午時に入滅したまふ 27奇瑞稱計す可からず 28別傳に見えたり 【三五】然るに愚禿釋の鸞、建仁辛酉の曆、雜行を棄て、分、本願に歸す 4元久乙の丑の歲、5恩恕を蒙りて分、「選擇」を書く 6同じき年の初夏中旬第四日 7「選擇本願念佛集」の内題の字并に「南

今盛、然諸寺釋門、昏教分、不知眞假門戸、洛都儒林迷行分、無辨邪正道路、斯以、興福寺學徒、奏達太上天皇號後鳥羽院諱尊成今上號土御門院諱爲仁聖曆、承元丁卯歲、仲春上旬之候、主上臣下、背法違義、成忿結怨、因茲、眞宗興隆、太祖源空法師、并門徒數輩、不考罪科、猥坐死罪、或改僧儀、賜姓名、處遠流、予其一也、爾者已非僧非俗、是故以禿字爲姓、空師并弟子等、坐諸方邊州、經五年居諸、皇帝佐渡院諱守成聖代、建曆辛未歲、子月中旬第七日、蒙勅免、入洛已後、空居洛陽東山西麓、鳥部野北邊、大谷、同二年壬申寅月下旬第五日、午時人滅、奇瑞不可稱計、見別傳、然愚禿釋鸞、建仁辛酉曆、棄雜行、分、歸本願、元久乙丑歲、蒙恩恕、分、書選擇、同年初夏中旬第四日、選擇本願念佛集内題字并南無阿彌陀佛往生之業



無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」と釋禪空の字と空の眞筆を以て之を書か令めたまひき 10 同じき日、空之眞影申し預り、圖畫し奉る 11 同じき二年閏七月下旬第九日 12 眞影の銘は眞筆を以て「南無阿彌陀佛」と、若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不取正覺彼佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生之眞文とを書か令めたまふ 13 又夢の告に依りて「禪空」の字を改めて、同じき日、御筆を以て名之字を書か令めたまひ畢んぬ 14 本師聖人、今年七旬三の御歳なり 15 選擇本願念佛集は 16 禪定博陸月輪殿筆實・法名圓照之教命に依りて選集せ令むる所なり 17 眞宗の簡要念佛の奥義、斯に攝在せり 18 見る者論り易し 19 誠には希有最勝之華文 20 無上甚深之寶典なり 21 年を涉り日を涉り、其の教誨を蒙る之人千萬なりと雖も 22 親と云ひ疎と云ひ、此の見寫を獲る之徒 23 甚だ以て難し 24 爾るに既に製作を書寫し眞影を圖畫す 25 是れ專念正業之徳なり 26 是れ決定往生之徴なり 27 仍りて悲喜之涙を抑へて由來之縁を註す 28 慶しき哉 29 心を弘誓之佛地に樹て 30 念を難思之法海に流す 31 深く如來の矜哀を知りて 32 良に師教の恩厚を仰ぐ 33 慶喜彌

念佛爲本、與釋禪空字、以空眞筆令書之。同日、空之眞影申預、奉圖畫。同二年閏七月下旬第九日、眞影銘以眞筆令書。南無阿彌陀佛、與若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不取正覺彼佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生之眞文。又依夢告改禪空字、同日以御筆令書名之字畢。本師聖人、今年七旬三御歳也。選擇本願念佛集者、依禪定博陸月輪殿筆實、法名圓照之教命所令撰集也。眞宗簡要念佛奧義、攝在于斯。見者易論、誠是希有最勝之華文。無上甚深之寶典也。涉年涉日、蒙其教誨之人雖千萬、云疎云親、獲此見寫之徒、甚以難。爾既書寫製作、圖畫眞影、是專念正業之徳也、是決定往生之徴也。仍抑悲喜之涙、註由來之縁、慶哉。樹心弘誓之佛地、流念難思之法海、深知如來矜

至り 1 至孝彌重し 2 茲に因りて 3 眞宗の詮を鈔し 4 淨土の要を披ふ 11 唯佛恩の深きことを念じて 12 人倫の嘲を恥ぢず 13 若し斯の書を 14 見聞せん者は 15 信順を因と爲し 16 疑謗を縁と爲し 17 信樂を願力に 彰し 18 妙果を安養に顯さん矣。

哀、良仰師教恩厚。慶喜彌重、至孝彌重。因茲鈔眞宗詮、披淨土要。唯念佛恩深、不恥人倫嘲。若見聞斯書者、信順爲因、疑謗爲縁、信樂彰於願力、妙果顯於安養矣。

【二三】「安樂集」に云く、眞言を採集して、往益を助修せしむ。何となれば、前に生れん者は後を導き、後に生れん者は前を訪ふらひ、連續無窮にして、願はくは休止せざら使めんと欲す。無邊の生死海を盡さんが爲の故なり、と。已上。

爾れば、末代の道俗、仰いで信敬す可きなり。知る可し。爾者、末代道俗、可仰信敬也。可知。善不善の心を起すこと有りとも、菩薩皆攝取せん、と。已上。

【二九】「華嚴經」の偈に云ふが如し。若し菩薩種種の行を修行するを見て、善不善の心を起すこと有りとも、菩薩皆攝取せん、と。已上。

顯淨土眞實教行證文類六末

四〇四

淨土文類聚鈔

愚禿釋親鸞作

四〇五

夫無礙難思の光耀は苦を滅し樂を證す 2 萬行圓備の嘉號は障  
 號消除疑を除く 3 末代の教行、専ら此を修す應し 4 濁世の目足、  
 必す斯を勤む可し 5 爾れば最勝の弘誓を受行して穢を捨て淨を忻へ  
 6 如來の教勅を奉持して恩を報じ徳を謝せよ 7 爰に片州の愚禿 8 印  
 度西蕃の論說に歸し 9 華漢・日域の師釋を仰いで 10 眞宗の教行證を  
 敬信す 11 特に知んぬ 12 佛恩窮盡し回ければ明かに淨土文類聚を用ふ  
 るなり矣。

然るに「教」と言ふは 2 則ち「大無量壽經」也 3 斯の經の大意  
 は 4 彌陀、誓を起發して廣く法藏を開きて、凡小を哀んで選びて功  
 徳之寶を施すことを致す 5 釋迦、世に出興して道教を光闡し、羣萌  
 を拯ひ恵むに眞實之利を以てせんと欲してなり 6 誠に是れ 7 如來興  
 世之眞說 8 奇特最勝之妙典 9 一乘究竟之極說 10 十方稱讚之正教也 11

一三 淨土文類聚鈔 一 一 二 二 一 一

夫無礙難思光耀滅苦證樂萬行圓備嘉  
 號消除疑未代教行專應修此濁世  
 目足必可勤斯爾者受行最勝弘誓而  
 捨穢忻淨奉持如來教勅而報恩謝徳  
 爰片州愚禿歸印度西蕃論說仰華漢日  
 域師釋敬信眞宗教行證特知佛恩巨  
 窮盡明用淨土文類聚矣。

然言教者則大無量壽經也斯經大意者  
 彌陀起發於誓廣開法藏致哀凡小選  
 施功德之寶釋迦出興於世光闡道教  
 欲拯羣萌惠以眞實之利誠是如來興  
 世之眞說奇特最勝之妙典一乘究竟之  
 極說十方稱讚之正教也說如來本願

一

如來の本願を説きたまふを經の宗致と爲す 12 即ち佛の名號を以て經の體と爲す也。

【三】「行」と言ふは 2 則ち利他圓滿の「大行」也 3 即ち是れ「諸佛者嗟之願」より出でたり 4 復た「諸佛稱名之願」と名け 5 亦「往相正業之願」と名く可し 6 然るに本願力の廻向に二種の相有り 7 一には往相 8 二には還相なり 9 一に「往相廻向」と言ふは 10 往相に就て大行有り亦淨信有り 11 二に「大行」といふは 12 則ち無礙光如來の名を稱したてまつるなり 13 斯の行は徧く一切の行を攝し極速圓滿せり 14 故に大行と名く 15 是の故に稱名は 16 能く衆生の一切の無明を破し 17 能く衆生の一切の志願を満てたまふ 18 稱名は即ち憶念 19 憶念は即ち念佛 20 念佛は則ち是れ南無阿彌陀佛なり 21 願成就の文 22 願成就の文は 23 十方恆沙の諸佛如來皆共無量壽佛の威神功德不可思議に言はく 24 十方恆沙の諸佛如來皆共無量壽佛の威神功德不可思議に言はく 25 諸有衆生 26 其の名號を聞いて 27 信心歡喜せんこと 28 乃至一念せん 29 至心に廻向せしめたまへり 30 彼の國に生れんと願すれば 31 即ち往生を得 32 不退轉に住せん」と【七】又言はく 33 佛、彌勒に語りたまはく 34 其れ彼の佛の名號を聞くこ

爲經宗致、即以佛名號爲經體也。

言行者、則利他圓滿大行也、即是出於諸佛者嗟之願、復名諸佛稱名之願、亦可名往相正業之願、然本願力廻向有二種相、一者往相、二者還相、一言往相廻向者、就往相有、大行亦有淨信、大行者則稱無礙光如來名、斯行徧攝一切行、極速圓滿、故名大行、是故稱名能破衆生一切無明、能滿衆生一切志願、稱名即憶念、憶念即念佛、念佛則是南無阿彌陀佛、願成就文、經言、十方恆沙諸佛如來皆共讚嘆無量壽佛威神功德不可思議、諸有衆生聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉、又言、佛語彌勒、其有得聞彼佛名號、歡喜踊躍、乃至一念、當知此人爲得大利、則是具足無上功德、已上龍樹菩薩

とを得ること有りて 歡喜し踊躍し 乃至一念せん 當に知るべし、此の人は大利を得と爲す 7 則ち是れ無上の功德を具足するなり

【八】龍樹菩薩「十住毘婆沙論」に云はく 2 若し人疾く不退轉地を得んと欲は 3 應に恭敬の心を以て 4 執持して 5 名號を稱すべし 6 若し人、善根を種て 7 疑へば則ち華開けず 8 信心清淨なれば 9 華開けて即ち佛を見たてまつる」と【九】天親菩薩「淨土論」に云く 2 世尊、我、一心に 3 盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて 4 安樂國に生ぜんと願す 5 我、修多羅眞實功德相に依りて 6 願偈總持を説いて 7 佛と相應せり 8 佛の本願力を觀はすに 9 遇うて空しく過ぐる者無し 10 能く速かに功德の大寶海を満足せ令む」と 已上【一〇】聖言論説、特に用て知んぬ 凡夫廻向の行に非ず 是れ大悲廻向の行なるが故に 「不廻向」と名く 4 誠には是れ 5 選擇攝取之本願 6 無上超世之弘誓 7 一乘眞妙之正法 8 萬善圓修之勝行也 【二】「經」に 2 「乃至」と言ふは 3 上下を兼ねて中を略する之言なり 4 「一念」と言ふは即ち是れ專念 5 專念は即ち是れ一聲 6 一聲は即ち是れ稱名 7 稱名は即ち是れ憶念 8 憶念は即ち是れ正念 9 正念は即ち是れ

十住毘婆沙論云、若人欲疾得不退轉地者、應以恭敬心執持稱名號、若人種善根、疑則華不開、信心清淨者、華開即見佛、天親菩薩淨土論云、世尊、我、一心歸命盡十方無礙光如來、願生安樂國、我依修多羅眞實功德相、說願偈總持、與佛教相應、觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足功德大寶海、已上。聖言論説、特用知、非凡夫廻向行、是大悲廻向行、故名不廻向、誠是選擇攝取之本願、無上超世之弘誓、一乘眞妙之正法、萬善圓修之勝行也、經言、乃至者、兼上下略中之言、言一念者、即是專念、專念即是一聲、一聲即是稱名、稱名即是憶念、憶念即是正念、正念即是正業也、復乃至一念者、是更非言觀想功德、偏數等之一念、就獲得往生、心行時節、延促、言乃至一念也、應知。

正業也 10 復た「乃至一念」といふは 11 是れ更に觀想功德徧數等之一念をいふには非ず 12 往生の心行を獲得する時節の延促に就て乃至一念と言ふ也 13 應に知るべし。

【一】「淨信」と言ふは 2 則ち利他深廣の信心也 3 即ち是れ念佛往生之願より出でたり 4 亦「至心信樂之願」と名く 5 復た「往相信心之願」と名く可きなり 【二】然るに薄地の凡夫底下の羣生 淨信獲巨く極果證し巨き也 3 何を以ての故に 4 往相の廻向に由らざるが故に、疑網に纏縛せらるゝに由るが故に 5 乃し如來の加威力に由るが故に、博く大悲廣慧の力に因るが故に、清淨眞實の信心を獲しむ 6 是の心顛倒せず、是の心虛偽ならず 7 信に知んぬ 8 無上妙果の成じ難きにはあらず 9 眞實の淨信實に得ること難し 10 眞實の淨信を獲れば大慶喜心を得 11 大慶喜心を得といふは 12 「經」に言はく 13 其れ至心に安樂國に生れんと願すること有れば 14 智慧明かに達し、功德殊勝なることを得可し」と要を取る 15 又「經」に言はく 16 是の人 17 亦「廣大勝解の者なり」と説けり 18 已上は即ち是れ大威徳の者なり 【三】誠に是れ 除疑獲徳之神方 極速圓融之眞詮 長生不死之妙術 威徳廣大之淨信也 【四】爾れば 2 若は行若は信 3 一事として阿彌

言淨信者、則利他深廣信心也、即是出於念佛往生之願、亦名至心信樂之願、復可名往相信心之願、然薄地凡夫底下羣生、淨信巨獲、極果巨證也、何以故、不由往相廻向之故、由所纏縛疑網之故、乃由如來加威力之故、博因大悲廣慧力之故、獲清淨眞實信心、是心不顛倒、是心不虛偽、信知無上妙果不難成、眞實淨信實難得、獲眞實淨信得大慶喜心、得大慶喜心、經言其有至心願生安樂國者、可得智慧明達功德殊勝一取要、又經言是人即是大威徳者、亦說廣大勝解者、已上誠是除疑獲徳之神方、極速圓融之眞詮、長生不死之妙術、威徳廣大之淨信也、爾者、若行若信、無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就、非無因他因

有也、應知。

陀如來の清淨願心の廻向成就したまふ所に非ざること有ること無し 4 因無くして、他の因の有るには非ざる也と 5 應に知るべし。 【一】「證」と言ふは 2 則ち利他圓滿の妙果也 3 即ち是れ必至滅度之願より出でたり 4 亦「證大涅槃之願」と名く 5 亦「往相證果之願」と名く可し 6 即ち是れ清淨眞實至極畢竟無生なり 【二】無上涅槃の願成就の文「經」に言はく 3 其れ衆生有りて、彼の國に生れんとする者は 4 皆悉く正定之聚に住す 5 所以は何んとなれば 6 彼の佛國の中には、諸の邪聚(自力の専ら及び不定聚(疑心の有情也)は無ければなり) 【三】又言はく 2 但餘方に因願するが故に 天人之名有り 3 顏貌端正にして超世希有なり 4 容色微妙にして天に非ず人に非ず 5 皆自然虛無之身、無極之體を受けたり 【四】又言はく 2 必ず超絶して去つることを得て、安養國に往生せよ 3 横に五惡趣を截り 4 惡趣自然に閉づ 5 道に昇るに窮極無し 6 往き易くして人無し 7 其の國道遠せず 8 自然之牽く所なり 9 已上 【五】聖言明かに知んぬ 2 煩惱成就の凡夫 3 生死罪濁の羣萌 4 往相の心行を獲れば即ち大乘正定之聚に住す 5 正定聚に住すれば必ず滅度に至る 6 必ず滅度に至れば即ち是

言證者則利他圓滿妙果也、即是出於必至滅度願、亦名證大涅槃之願、亦可名往相證果之願、即是清淨眞實至極畢竟無生無上涅槃願成就文、經言其有衆生、生彼國者、皆悉住於正定之聚、所以者何、彼佛國中無諸邪聚及不定聚、又言、但因願餘方、故有天人之名、顏貌端正、超世希有、容色微妙、非天人、非人、皆受自然虛無之身、無極之體、又言、必得超絶去、往生安養國、横截五惡趣、惡趣自然閉、昇道無窮極、易往而無人、其國不逆違、自然之所牽、已上聖言明知、煩惱成就凡夫、生死罪濁羣萌、獲往相心行、即往大乘正定之聚、住正定聚、必至滅度、必至滅度、即是常樂、常樂即是大涅槃、大涅槃即是利他教化地果、是身即是無爲法

常樂 7 常樂は即ち是れ大涅槃 8 大涅槃は即ち是れ利他教化地の果なり 9 是の身即ち是れ無爲法身 10 無爲法身は即ち是れ畢竟平等身 11 畢竟平等身は即ち是れ寂滅 12 寂滅は即ち是れ實相 13 實相は即ち是れ法性 14 法性は即ち是れ眞如 15 眞如は即ち是れ一如也 【三】爾れば若は因若は果 一事として阿彌陀如來の清淨願心之廻向成就したまふ所に非ざること有ること無し 因淨なるが故に果も亦淨也と應に知るべし。 【三】二に「還相廻向」と言ふは 2 則ち利他教化地の益也 3 即ち是れ「必至補處之願」より出でたり 4 亦「一生補處之願」と名く 5 亦「還相廻向之願」と名く可し 【三】願成就の文 【經】に言はく 彼の國の菩薩 4 皆當に一生補處を究竟すべし 5 其の本願 6 衆生の爲の故に 7 弘誓の功德を以て自ら莊嚴し 8 普く一切衆生を度脱せんと欲せんをば除かん」と。已上 【三】聖言、明かに知んぬ大慈大悲の弘誓 廣大難思の利益 4 乃し煩惱の調林に入りて諸有を開導し 5 普賢之德に達して羣生を悲引す 【三】爾れば 2 若は往若は還 3 一事として、如來清淨願心之廻向成就したまふ所に非ざること有ること無き也と 4 應に知るべし 【三】是を以て 淨土の緣熟し

身、無爲法身、即ち畢竟平等身、畢竟平等身、即ち寂滅、寂滅、即ち實相、實相、即ち法性、法性、即ち眞如、眞如、即ち一如也、爾者若因若果、無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就、因淨故、果亦淨也、應知、二言還相廻向者、則利他教化地益也、即出於必至補處之願、亦名一生補處之願、亦可名還相廻向之願、願成就文、經言、彼國菩薩皆當究竟一生補處、除其本願爲衆生故、以弘誓功德、而自莊嚴、普欲度脱一切衆生、已上聖言、明知大慈大悲、弘誓、廣大難思、利益、乃入煩惱調林、開導諸有、則達普賢之德、悲引羣生、爾者若往若還、無有一事非如來清淨願心之所廻向成就也、應知、是以淨土緣熟、調達闍王、與逆害、濁世機、釋迦、章提、選安養、情思、彼靜念、此、達多闍世、博施、仁慈、彌陀、釋迦、深顯、素懷、依之、論主、宣布

て、調達闍王をして逆害を興せしめ 3 濁世の機憫みて、釋迦 章提をして安養を選ばしめたまへり 4 情ら彼を思ひ靜かに此を念ふに 5 達多闍世、博く仁慈を施し 6 彌陀、釋迦、深く素懷を顯せり 7 之に依りて 8 論主 9 廣大無礙の淨信を宣布し 10 普偏く雜染堪忍の羣生を開化す 11 宗師 12 往還大悲の廻向を顯示して 13 慇懃に他利他の深義を弘宣せり 14 聖・權の化益 15 偏に一切凡愚を利せんが爲に 16 廣大の心行 17 唯逆惡闍提を引かんを欲してなり。

廣大無礙淨信、普偏開化雜染堪忍羣生、宗師顯示往還大悲廻向、慇懃弘宣他利他深義、聖權化益偏爲利一切凡愚、廣大心行唯欲引逆惡闍提。

【二】今庶くは 2 道俗等 3 大悲の願船には清淨の信心を順風と爲し 4 無明の闇夜には功德の寶珠を大炬と爲す 5 心昏く識、寡きものは、敬うて斯の道を勉めよ 6 惡重く障多きものは、深く斯の信を崇めよ 7 噫、弘誓の強緣は多生にも値ひ難く 8 眞實の淨信は億劫にも獲回し 9 遇ま信心を獲ば、遠く宿緣を慶べ 10 若し也此の廻疑網に覆蔽せらるれば 11 更りて必ず曠劫多生を還 歷せん 12 攝取不捨之眞理 13 超捷易往之教勅 14 聞思して遲慮すること莫れ 【三】慶ばしい哉 2 愚禿仰いで惟れば 4 心を弘誓の佛地に樹て 5 情を難思の法海に流す 6 聞く所を嘆じ 7 獲る所を慶び 8 眞言を採集し 9 師釋を鈔出して 10 専ら無上尊を念じ 11 特に廣大の恩を報す 【三】茲に因りて 2 覺慧菩薩

今庶道俗等、大悲願船清淨信心而爲順風、無明闇夜、功德寶珠而爲大炬、心昏識寡、敬勉斯道、惡重障多、深崇斯信、噫弘誓強緣多生難值、眞實淨信億劫難獲、遇獲信心、速慶宿緣、若也此廻覆疑網、更必遲歷曠劫多生、攝取不捨之眞理、超捷易往之教勅、聞思莫遲慮、慶哉、愚禿仰惟樹心、弘誓佛地、流情難思法海、嘆所聞慶所獲、採集眞言、鈔出師釋、專念無上尊、特報廣大恩、因茲披闍、覺慧菩薩註論、一言、夫菩薩歸佛、如孝子之歸

薩の「註論」を披閱するに、言はく、4 夫れ菩薩の佛に歸す、孝子の父母に歸し、6 忠臣之君后に歸して、7 動靜己に非ず、8 出沒必ず由あるが如し、9 恩を知りて徳を報ず、10 理宜しく先づ啓すべし、要を取る

11 佛恩の深重なることを信知して、12 念佛正信偈」を作りて曰はく、  
西方不可思議尊、  
法藏菩薩因位の中に、  
無上大悲の願を建立したまふ、  
菩提の妙果、上願に酬いたり、  
壽命延長に能く量ること莫し、  
智慧圓滿にして巨海の如し、  
廣大莊嚴等しく具足せり、  
十方諸佛の國に超逾せり、  
能く無明大夜の闇を破したまふ、  
名聲十方に聞えざる靡し、  
佛法藏を集めて凡愚に施す、  
已に能く無明の闇を破す、雖も、  
常に清淨信心の天に覆へり、  
24 常に清淨信心の天に覆へり、

25 警へば日月星宿の、  
26 煙霞雲霧等に覆はると雖も、  
27 其の雲霧の下明かにして闇無き如し、  
28 信知するに日月の光益に超えたり、  
29 必す無上淨信の曉に至れば、  
30 三有生死之雲晴る、  
31 清淨無礙の光耀朗かにして、  
32 一如法界の眞身顯はる、  
33 信を發して稱名すれば光攝護したまふ、  
34 亦現生に無量の徳を獲しむ、  
35 無邊難思光不斷にして、  
36 更に時處諸縁を隔つること無し、  
37 諸佛の護念眞に疑莫し、  
38 十方同しく稱讚し悦可す、  
39 惑染逆惡齊しく皆生じ、  
40 謗法闍提廻すれば皆往く、  
41 當來之世に經道滅せん、  
42 特此の經を留めて住すること百歳せん、  
43 如何が斯の大願を疑惑せん、  
44 唯信釋迦如實の言を信ぜよ、  
45 印度西天之論家、  
46 中夏日域之高僧、  
47 大聖世雄の正意を開き、  
48 如來の本誓機に應ずることを明す、  
49 釋迦如來楞伽山にして、  
50 衆の爲に告命したまふ、南天竺に  
51 龍樹菩薩興出世、悉能摧破有無見、  
52 悉く能く有無の見を摧破せん、  
53 大乘無上の法を宣説し、  
54 歡喜地を證して安樂に生ぜん、  
55 十住毘婆沙論」を造りて、  
56 難行の峻路特に悲憐せしむ、

父母忠臣之歸君后、動靜非己、出沒必由、知恩報徳、理宜先啓、取要信知、佛恩深重、作念佛正信偈、曰

西方不可思議尊、法藏菩薩因位中、超發殊勝本弘誓、建立無上大悲願、思惟攝取經五劫、菩提妙果酬上願、滿足本誓歷十劫、壽命延長莫能量、慈悲深遠如虛空、智慧圓滿如巨海、清淨微妙無邊利、廣大莊嚴等具足、種種功德悉成滿、超逾十方諸佛國、普放難思無礙光、能破無明大夜闇、智光明朗開慧眼、名聲靡不聞十方、如來功德唯佛知、集佛法藏施凡愚、彌陀佛日普照耀、已能難破無明闇、貪愛瞋嫌之雲霧、常覆清淨信心天、

25 警へば日月星宿の、  
26 煙霞雲霧等に覆はると雖も、  
27 其の雲霧の下明かにして闇無き如し、  
28 信知するに日月の光益に超えたり、  
29 必す無上淨信の曉に至れば、  
30 三有生死之雲晴る、  
31 清淨無礙の光耀朗かにして、  
32 一如法界の眞身顯はる、  
33 信を發して稱名すれば光攝護したまふ、  
34 亦現生に無量の徳を獲しむ、  
35 無邊難思光不斷にして、  
36 更に時處諸縁を隔つること無し、  
37 諸佛の護念眞に疑莫し、  
38 十方同しく稱讚し悦可す、  
39 惑染逆惡齊しく皆生じ、  
40 謗法闍提廻すれば皆往く、  
41 當來之世に經道滅せん、  
42 特此の經を留めて住すること百歳せん、  
43 如何が斯の大願を疑惑せん、  
44 唯信釋迦如實の言を信ぜよ、  
45 印度西天之論家、  
46 中夏日域之高僧、  
47 大聖世雄の正意を開き、  
48 如來の本誓機に應ずることを明す、  
49 釋迦如來楞伽山にして、  
50 衆の爲に告命したまふ、南天竺に  
51 龍樹菩薩興出世、悉能摧破有無見、  
52 悉く能く有無の見を摧破せん、  
53 大乘無上の法を宣説し、  
54 歡喜地を證して安樂に生ぜん、  
55 十住毘婆沙論」を造りて、  
56 難行の峻路特に悲憐せしむ、

- 57 易往の大道廣く開示す。
- 58 應に恭敬の心を以て執持して、
- 59 名號を稱して疾く不退を得べし、
- 60 信心清淨なる即ち佛を見えり。
- 61 天親菩薩の論を作して説かく、
- 62 修多羅に依りて眞實を顯はす、
- 63 横超の本弘誓を光闡し、
- 64 不可思議の願を演暢す。
- 65 本願力の廻向に由るが故に、
- 66 具縛を度せんが爲に一心を彰はす。
- 67 功德の大寶海に歸入すれば、
- 68 必ず大會衆の數に入ることを獲、
- 69 蓮華藏世界に至ることを得、
- 70 即ち寂滅平等身を證せしむ、
- 71 煩惱の林に遊びて神通を現じ、
- 72 生死の菌に入りて應化を示す、
- 73 曇鸞大師をば梁の蕭王、
- 74 常に鸞の方に向ひて菩薩と禮す。
- 75 三藏流支淨教を授けしかば、
- 76 仙經を焚燒して樂邦に歸す。
- 77 天親菩薩の論を註解して、
- 78 如來の本願、稱名に顯はす。
- 79 往還の廻向は本誓に由る。
- 80 煩惱成就の凡夫人、
- 81 信心開發すれば即ち忍を獲、
- 82 生死即ち涅槃なりと證知す、
- 83 必ず無量光明土に到りて、
- 84 諸有の衆生皆普く化す、
- 85 道綽聖道の證し難きことを決て、
- 86 唯淨土の通入す可きことを明せり。
- 87 萬善は自力に勤修を勵す、
- 88 圓滿の德號、專稱を勸む。

易往大道廣開示 應以恭敬心執持  
 稱名號疾得不退 信心清淨即見佛  
 天親菩薩作論說 依修多羅顯眞實  
 光闡横超本弘誓 演暢不可思議願  
 由本願力廻向故 爲度具縛彰一心  
 歸入功德大寶海 必獲入大會衆數  
 得至蓮華藏世界 即證寂滅平等身  
 遊煩惱林現神通 入生死菌示應化  
 曇鸞大師梁蕭王 常向鸞方菩薩禮  
 三藏流支淨教授 焚燒仙經歸樂邦  
 天親菩薩論註解 如來本願顯稱名  
 往還廻向由本誓 煩惱成就凡夫人  
 信心開發即獲忍 證知生死即涅槃  
 必到無量光明土 諸有衆生皆普化  
 道綽決聖道難證 唯明淨土可通入  
 萬善自力勤修勵 圓滿德號勸專稱

- 89 三不三信の誨懲勸にして、
- 90 像末法滅同じく悲引す。
- 91 一生惡を造れども弘誓に遇へば、
- 92 安養界に至りて妙果を證す。
- 93 善導獨佛の正意に明かにして、
- 94 深く本願に籍りて眞宗を興したまふ。
- 95 定散と逆惡とを矜哀して、
- 96 光明名號、因縁を示す。
- 97 涅槃門に入りて眞心に値へば、
- 98 必ず信喜悟の忍を獲、
- 99 難思議往生を得る人、
- 100 即ち法性之常樂を證す。
- 101 源信廣く一代の教を開きて、
- 102 偏に安養に歸して一切を勸む、
- 103 諸經論に依りて教行を撰びたまふ。
- 104 誠にはれ濁世の目足爲り。
- 105 得失を專雜に決判して、
- 106 念佛の眞實門に廻入せしむ。
- 107 唯淺深を執心に定めて、
- 108 報化二土正しく辨立せり。
- 109 源空 諸の聖典を曉了して、
- 110 善惡の凡夫人を憐愍せしむ。
- 111 眞宗の教證、片州に興し、
- 112 選擇の本願、濁世に施す。
- 113 生死流轉の家に還來すること、
- 114 決するに疑情を以て所止と爲し、
- 115 速かに寂靜無爲の樂に入ることは、
- 116 必ず信心を以て能人と爲す。
- 117 論說師釋共に同心に、
- 118 無邊の極濁惡を拯濟す。
- 119 道俗時衆皆悉く共に、
- 120 唯斯の高僧の説を信す可し。

三不三信誨懲勸 像末法滅同悲引  
 一生造惡遇弘誓 至安養界證妙果  
 善導獨佛正意 深籍本願興眞宗  
 矜哀定散與逆惡 光明名號示因縁  
 入涅槃門值眞心 必獲於信喜悟忍  
 得難思議往生人 即證法性之常樂  
 源信廣開一代教 偏歸安養勸一切  
 依諸經論撰教行 誠是爲濁世目足  
 決判得失於專雜 廻入念佛眞實門  
 唯定淺深於執心 報化二土正辨立  
 源空曉了諸聖典 憐愍善惡凡夫人  
 眞宗教證興片州 選擇本願施濁世  
 還來生死流轉家 決以疑情爲所止  
 速入寂靜無爲樂 必以信心爲能入  
 論說師釋共同心 拯濟無邊極濁惡  
 道俗時衆皆悉共 唯可信斯高僧説

六十行一百二十句、偈頌已に畢りぬ。

問ふ 念佛往生の願に已に三心を發す 論主、何を以ての故に「一心」と言ふや 答ふ 愚鈍の衆生覺知し易からんが爲の故に 論主、三を合して一と爲したまふ歟 三三心と言ふは 一には至心 二には信樂 三には欲生なり 三私に字訓を以て論意を闡ふに 三を合して一とす應し 其の意何となれば 一には至心 二「至」といふは眞なり誠なり 三「心」といふは種なり實なり 二には信樂 三「信」といふは眞なり實なり誠なり滿なり極なり成なり用なり重なり審なり驗なり 樂といふは欲なり願なり慶なり喜なり樂なり 三には欲生 三欲といふは願なり樂なり覺なり知なり 二「生」といふは成なり興也 三爾れば 四至心は即ち是れ 五誠種眞實之心なり、故に疑心有ること無し 六信樂は即ち是れ 七眞實誠滿之心 極成用重之心 八欲願審驗之心 九慶喜樂之心なり 十故に疑心有ること無し 二「欲生」は即ち是れ 三願樂之心 四覺知成興之心なり 五故に三心皆共に眞實にして疑心無し 六疑心無きが故に三心即ち一心なり 七字訓斯の如し 八之を思擇す可し 九復た「三心」と言ふは 二一には

六十行一百二十句偈頌已畢。

問念佛往生願已發三心論主何以故言一心答愚鈍衆生覺知爲易故論主合三爲一歟言三心者一者至心二者信樂三者欲生私以字訓闡論意合三應一其意何者一者至心至者眞誠心者種實二者信樂信者眞實誠滿極成用重審驗樂者欲願慶喜樂三者欲生欲者願樂覺知生者成興也爾者至心即是誠種眞實之心故無有疑心信樂即是眞實誠滿之心極成用重之心欲願審驗之心慶喜樂之心故無有疑心欲生即是願樂之心覺知成興之心故三心皆共眞實而無疑心無疑心故三心即一心字訓如斯可思擇之復言三心者一者至心斯心即是如來至德圓修滿足眞實之心阿彌陀如來以眞實功德廻施一切即以名號爲至心體然十方

「至心」斯の心即ち是れ 如來の至德圓修滿足眞實之心なり 阿彌陀如來 眞實の功德を以て一切に廻施したまへり 即ち名號を以て至心の體と爲せり 然るに 十方衆生穢惡汙染にして清淨の心無し 虛假雜毒にして眞實の心無し 是を以て 如來因中に 菩薩の行を行じたまひし時 三業の所修 乃至一念一刹那も 清淨眞實の心に非ざること有ること無し 如來清淨の眞心をもつて 諸有の衆生に廻向したまへり 經に言はく 欲覺・瞋覺・害覺を生ぜず 欲想・瞋想・害想を起さず 色・聲・香・味・觸・法に著せず 忍力成就して衆苦を計せず 少欲知足にして染患・癡無し 三昧・常寂にして智慧無礙なり 虛偽・諂曲之心有ること無し 和顏・愛語にして意を先にして承問す 勇猛・精進にして志願・倦むこと無し 専ら・清白之法を求めて以て羣生を惠利しき 三寶を恭敬し師長に奉事す 大莊嚴を以て衆行を具足して 諸の衆生をして功德成就せ令めたまへり」と抄出 聖言、明かに知んぬ 今斯の心は是れ 如來の清淨廣大の至心なり 是を眞實心と名く 至心は即ち是れ大悲心なり 故に疑心有ること無し 言「二」には「信樂」 即ち是れ 眞實心を以て信樂の體

衆生穢惡汙染無清淨心虛假雜毒無眞實心是以如來因中行菩薩行時三業所修乃至一念一刹那無有非清淨眞實心如來以清淨真心廻向諸有衆生經言不生欲覺瞋覺害覺不起欲想瞋想害想不著色聲香味觸法忍力成就不計衆苦少欲知足無染患癡三昧常寂智慧無礙無有虛偽諂曲之心和顏愛語先意承問勇猛精進志願無倦專求清白之法以惠利羣生恭敬三寶奉事師長以大莊嚴具足衆行令諸衆生功德成就抄出聖言明知今斯心是如來清淨廣大至心是名眞實心至心即是大悲心故無有疑心二者信樂即是以眞實心爲信樂體然具縛羣萌穢濁凡愚無清淨信心無眞實信心是故眞實功德難值清淨信樂難巨獲得依之闕釋意愛心常起能汚善心瞋嫌之心能燒法財苦勵



と爲す<sup>4</sup> 然るに具縛の羣萌穢濁の凡愚<sup>5</sup> 清淨の信心無く眞實の信心無し<sup>6</sup> 是の故に<sup>7</sup> 眞實の功德値ひ難く、清淨の信樂獲得し難<sup>8</sup> 之に依りて<sup>9</sup> 釋の意を窺ふに<sup>10</sup> 愛心常に起りて能く善心を汙し<sup>11</sup> 瞋嫌之心能く法財を燒く<sup>12</sup> 身心を苦勵して<sup>13</sup> 日夜十二時に急走急作して頭燃を灸ふが如くすれども<sup>14</sup> 衆て雜毒之善と名く<sup>15</sup> 亦虛假之行と名く<sup>16</sup> 眞實の業と名けざる也<sup>17</sup> 此の雜毒之善を以て彼の淨土に廻向すること<sup>18</sup> 此れ必ず不可也<sup>19</sup> 何を以ての故に<sup>20</sup> 正しく彼の如來<sup>21</sup> 菩薩の行を行じたまひし時<sup>22</sup> 乃至一念一刹那も<sup>23</sup> 三業の所修<sup>24</sup> 皆是れ眞實心の中に作したまひしに由るが故に<sup>25</sup> 疑蓋雜はること無し<sup>26</sup> 如來、清淨眞實の信樂を以て<sup>27</sup> 諸有の衆生に廻向したまへり<sup>28</sup> 本願成就の文<sup>29</sup> 經に言はく<sup>30</sup> 諸有衆生<sup>31</sup> 其の名號を聞きて<sup>32</sup> 信心歡喜せん<sup>33</sup> 抄出<sup>34</sup> 聖言<sup>35</sup> 明かに知んぬ<sup>36</sup> 今斯の心は即ち是れ<sup>37</sup> 本願圓滿清淨眞實の信樂なり<sup>38</sup> 是を信心と名く<sup>39</sup> 信心即ち是れ大悲心なり<sup>40</sup> 故に疑蓋有ること無し<sup>41</sup> 三には「欲生」<sup>42</sup> 即ち清淨眞實の信心を以て欲生の體と爲す<sup>43</sup> 然るに<sup>44</sup> 流轉輪廻の凡夫<sup>45</sup> 曠劫多生の羣生<sup>46</sup> 清淨廻向の心無く<sup>47</sup> 亦眞實廻向の心無し<sup>48</sup> 是を以て

身心日夜十二時急走急作如<sup>1</sup> 灸頭燃<sup>2</sup> 衆名雜毒之善、亦名虛假之行、不名眞實業也<sup>3</sup> 以此雜毒之善廻<sup>4</sup> 向彼淨土<sup>5</sup> 此必不可也<sup>6</sup> 何以故<sup>7</sup> 正由<sup>8</sup> 彼如來行<sup>9</sup> 菩薩行時、乃至一念一刹那、三業所修皆是眞實心中作<sup>10</sup> 故疑蓋無雜<sup>11</sup> 如來以清淨眞實信樂廻向<sup>12</sup> 諸有衆生<sup>13</sup> 本願成就文<sup>14</sup> 經言<sup>15</sup> 諸有衆生聞<sup>16</sup> 其名號<sup>17</sup> 信心歡喜抄出<sup>18</sup> 聖言<sup>19</sup> 明知<sup>20</sup> 今斯心<sup>21</sup> 即是本願圓滿清淨眞實信樂<sup>22</sup> 是名信心<sup>23</sup> 信心即是大悲心<sup>24</sup> 故無<sup>25</sup> 疑蓋<sup>26</sup> 二者欲生<sup>27</sup> 即以清淨眞實信心<sup>28</sup> 爲欲生體<sup>29</sup> 然流轉輪廻<sup>30</sup> 凡夫曠劫多生羣生<sup>31</sup> 無清淨廻向心<sup>32</sup> 亦無眞實廻向心<sup>33</sup> 是<sup>34</sup> 以如來因中行菩薩行時<sup>35</sup> 三業所修<sup>36</sup> 乃至一念一刹那<sup>37</sup> 無有非廻向爲首得成就<sup>38</sup> 大悲心<sup>39</sup> 故如來以清淨眞實欲生心<sup>40</sup> 廻向<sup>41</sup> 諸有衆生<sup>42</sup> 本願成就文<sup>43</sup> 經言<sup>44</sup> 至心廻向<sup>45</sup> 願生<sup>46</sup> 彼國<sup>47</sup> 即得往生<sup>48</sup> 住不退轉<sup>49</sup> 取要<sup>50</sup> 聖

如來因中<sup>9</sup> 到菩薩の行を行じたまひし時<sup>10</sup> 三業の所修<sup>11</sup> 乃至一念一刹那も<sup>12</sup> 廻向を首と爲して、大悲心を成就することを得たまふに非ざること有ること無し<sup>13</sup> 故に<sup>14</sup> 如來、清淨眞實の欲生心を以て<sup>15</sup> 諸有の衆生に廻向したまへり<sup>16</sup> 本願成就の文<sup>17</sup> 經に言はく<sup>18</sup> 至心に廻向したまへり<sup>19</sup> 彼の國に生ぜん<sup>20</sup> と願すれば<sup>21</sup> 即ち往生を得<sup>22</sup> 不退轉に住せん<sup>23</sup> 要を取る<sup>24</sup> 聖言、明かに知んぬ<sup>25</sup> 今斯の心は是れ<sup>26</sup> 如來の大悲<sup>27</sup> 諸有の衆生を招喚したまふ之の教勅なり<sup>28</sup> 即ち大悲之欲生心を以て<sup>29</sup> 是を「廻向」と名く<sup>30</sup> 三心皆是れ大悲廻向心なるが故に<sup>31</sup> 清淨眞實にして<sup>32</sup> 疑蓋雜はること無し<sup>33</sup> 故に一心也<sup>34</sup> 三に依つて師釋を披きたるに<sup>35</sup> 云はく<sup>36</sup> 西の岸の上に人有りて喚ばうて言はく<sup>37</sup> 汝、一心正念にして直ちに來れ<sup>38</sup> 我能く汝を護らん<sup>39</sup> 衆て水火之難に墮せんことを畏れざれ<sup>40</sup> 又言はく<sup>41</sup> 中間の白道は<sup>42</sup> 即ち貪・瞋・煩惱の中に<sup>43</sup> 能く清淨願往生の心を生ずるに喩ふる也<sup>44</sup> 仰いで釋迦の發遣を蒙り<sup>45</sup> 又彌陀の招喚したまふに籍りて<sup>46</sup> 水火の二河を顧みず<sup>47</sup> 彼の願力之道に乗ず<sup>48</sup> 略出す<sup>49</sup> 是に知んぬ<sup>50</sup> 能生清淨願心は是れ<sup>51</sup> 凡夫自力の心に非ず<sup>52</sup> 大悲廻向の心なるが故

言明知<sup>1</sup> 今斯心<sup>2</sup> 是如來大悲招喚<sup>3</sup> 諸有衆生<sup>4</sup> 之教勅<sup>5</sup> 即以<sup>6</sup> 大悲之欲生心<sup>7</sup> 是名廻向<sup>8</sup> 三心皆是<sup>9</sup> 大悲廻向心<sup>10</sup> 故、清淨眞實疑蓋無雜<sup>11</sup> 故一心也<sup>12</sup> 依之披師釋<sup>13</sup> 云<sup>14</sup> 西岸上有<sup>15</sup> 人喚言<sup>16</sup> 汝一心正念直來<sup>17</sup> 我能護汝<sup>18</sup> 衆不畏墮<sup>19</sup> 於水火之難<sup>20</sup> 又言<sup>21</sup> 中間白道者<sup>22</sup> 即喻<sup>23</sup> 貪瞋煩惱中能生<sup>24</sup> 清淨願往生心也<sup>25</sup> 仰蒙<sup>26</sup> 釋迦發遣<sup>27</sup> 又籍<sup>28</sup> 彌陀招喚<sup>29</sup> 不顧<sup>30</sup> 水火二河<sup>31</sup> 乘<sup>32</sup> 彼願力之道<sup>33</sup> 略出<sup>34</sup> 是知能生<sup>35</sup> 清淨願心<sup>36</sup> 是非<sup>37</sup> 凡夫自力心<sup>38</sup> 大悲廻向心<sup>39</sup> 故言<sup>40</sup> 清淨願心<sup>41</sup> 爾者<sup>42</sup> 一心正念者<sup>43</sup> 正念<sup>44</sup> 即是稱名<sup>45</sup> 稱名<sup>46</sup> 即是念佛<sup>47</sup> 一心<sup>48</sup> 即是深心<sup>49</sup> 深心<sup>50</sup> 即是堅固深信<sup>51</sup> 堅固深信<sup>52</sup> 即是真心<sup>53</sup> 真心<sup>54</sup> 即是金剛心<sup>55</sup> 金剛心<sup>56</sup> 即是無上心<sup>57</sup> 無上心<sup>58</sup> 即是淳一相續心<sup>59</sup> 淳一相續心<sup>60</sup> 即是<sup>61</sup> 大慶喜心<sup>62</sup> 獲<sup>63</sup> 大慶喜心<sup>64</sup> 是心違<sup>65</sup> 三不<sup>66</sup> 是心順<sup>67</sup> 三信<sup>68</sup> 是心<sup>69</sup> 即是大菩提心<sup>70</sup> 大菩提心<sup>71</sup> 即是眞實信心<sup>72</sup> 眞實信心<sup>73</sup> 即是願作佛心<sup>74</sup>

に 19 清淨願心と言へり 20 爾れば「一心正念」といふは 21 正念は即ち是れ 稱名 22 稱名は即ち是れ念佛なり 23 一心は即ち是れ深心 24 深心は即ち是れ堅固の深心 25 堅固の深心は即ち是れ真心 26 真心は即ち金剛心 27 金剛心は即ち是れ無上心 28 無上心は即ち是れ淳一相續心 29 淳一相續心は即ち是れ大慶喜心なり 30 大慶喜心を獲れば、是の心三不に違し 31 是の心三信に順ず 32 是の心即ち是れ大菩提心 33 大菩提心は即ち是れ眞實の信心 34 眞實の信心は即ち是れ願作佛心 35 願作佛心は即ち是れ度衆生心 36 度衆生心は即ち是れ衆生を攝取して安樂淨土に生ぜしむる心なり 37 是の心即ち是れ畢竟平等心 38 是の心即ち是れ大悲心 39 是の心作佛す 40 是の心是れ佛なり 41 是を「如實修行相應」と名くる也と 42 應に知るべし 43 「三心即ち一心」之義答へ竟んぬ。

又問ふ 2 「大經」の三心と 3 「觀經」の三心と 4 一異云何ぞ 5 答ふ 兩經の三心即ち是れ一也 7 何を以てか知ることを得る 8 宗師の釋に云はく 9 「至誠心の中に云はく 10 至」といふは眞なり、「誠」といふは實なり 11 人に就き行に就きて信を立つる中に云はく 12 「一心に専ら彌陀の名號を念ずる 13 是を「正定之業」と名く 14 又云はく 15 「深心即ち是れ眞實信心なり」 16 廻向發願心の中に云はく 17 此の心深信せること由し金剛の若し」と 18 明かに知んぬ 19 一心は是れ信心なり 20 專念は即ち正業なり 21 一心之中に至誠廻向之二心を攝在せり 22 向の問の中に答へ竟んぬ。

願作佛心即ち是度衆生心、度衆生心即ち是攝取衆生、生安樂淨土、心是心即ち是畢竟平等心、是心即ち是大悲心、是心作佛、是心是佛、是名如實修行相應也、應知三心即一心之義答竟。

又問、大經三心與觀經三心、一異云何。答、兩經三心即是一也、何以得知、宗師釋云、至誠心中云、至者眞、誠者實、就人就行立信中云、一心專念彌陀名號、是名正定之業。又云、深心即眞實信心、廻向發願心中云、此心深信由若金剛、明知一心是信心、專念即正業、一心之中攝在至誠廻向之二心、向問中答竟。

心なり 20 專念は即ち正業なり 21 一心之中に至誠廻向之二心を攝在せり 22 向の問の中に答へ竟んぬ。

又問ふ 2 已前二經の三心と 3 小經の執持と 4 一異云何ぞ 5 答ふ 6 「經」に言はく 7 「名號を執持す」と 8 「執」は心堅牢にして移らず 9 「持」は不散不失に名く 10 故に不亂と曰へり 11 執持は即ち一心 12 一心は即ち信心なり 13 然れば則ち 14 執持名號之眞説 15 一心不亂之眞説 16 必ず之に歸す可し 17 特に之を仰ぐ可し 18 論家宗師 19 淨土眞宗を開きて 20 濁世の邪偽を導かんとなり 21 三經の大綱、隱顯有りと雖も 22 一心を能入と爲す 23 故に「經」の始に「如是」と稱す 24 論主建に「一心」と言へり 25 即ち是れ如是之義を彰はすなり 26 今、宗師の解を披きたるに 27 云はく 28 「如意」と言ふは二種有り 29 一には衆生の意の如し 30 彼の心念に隨ひて皆應に之を度すべし 31 二には彌陀之意の如し 32 五眼圓かに照し、六通自在にして 33 機の度す可き者を觀はして 34 一念之中に 35 前無く後無く 36 身心等しく趣き 37 三輪開悟して 38 各益したまふこと同じからざる也 39 又言はく 40 敬うて一切往生の知識等に白さく 41 大きに須らく慚愧すべし 42 釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり 43 種種の方便をもて 44 我等が無上の信心を發起せしめたま

又問、已前二經三心與小經執持二異云何。答、經言執持名號、執者心堅牢而不移、持者名不散不失、故曰不亂。執持即一心、一心即信心。然則執持名號之眞説、一心不亂之誠言、必可歸之、特可仰之。論家宗師、開淨土眞宗、導濁世邪偽、三經大綱、雖有隱顯、一心爲能入。故經始稱如是、論主建言、一心、即是彰如是之義。今披宗師解云、言如意者有二種。一者如衆生意、隨彼心念、皆應度之。二者如彌陀之意、五眼圓照、六通自在、觀機可度者、一念之中、無前無後、身心等趣、三輪開悟、各益不同也。又言、敬、白、一切往生知識等、大須慚愧、釋迦如來實是慈悲父母、種種方便、發起我等無上信心、已上、明知、緣二尊、大悲、獲一心佛因、當知、斯人希有人、最勝人也、然流轉愚

ふ已上 45 明かに知んぬ 46 一尊の大悲に縁りて 47 一心の佛因を獲たり  
 48 當に知るべし 49 斯の人は、希有人なり 50 最勝人也 51 然るに流轉の  
 愚夫・輪廻の羣生 52 信心起ること無し、真心起ること無し 53 是を以て  
 『可經』に言はく 54 若し斯の經を聞きて 55 信樂受持すること 56 難き  
 が中に之れ難し 57 此に過ぎて難きは無し 58 亦一切世間極難信法  
 と説きたまへり 59 誠に知んぬ 60 大聖世尊 61 世に出興したまふ大事の  
 因縁 62 悲願の眞利を顯はして 如來の直説と爲したまへり 63 凡夫の即  
 生を示すを大悲の宗致と爲したまへりとなり 64 茲に因りて 65 諸佛の  
 教意を闡ふに 66 三世の諸の如來出世の正しき本意 67 唯、阿彌陀の不  
 可思議の願を説かんとなり 68 常没の凡夫人 69 願力の廻向に縁りて 70 眞實の功德を聞き 71 無上の信心を獲れば  
 72 即ち大慶喜を得 73 不退轉地を獲るなり 74 煩惱を斷ぜ令めすして 75 速かに大涅槃を證すと成り矣。

夫、輪廻、羣生、信心無起、真心無起、是以  
 經言、若聞、斯經、信樂受持、難中之難、無  
 過此難、亦説、一切世間極難信法、誠知、  
 大聖世尊、出興於世、大事、因縁、顯悲願、眞  
 利、爲、如來直説、示凡夫、即生、爲、大悲  
 宗致、因、茲、闡諸佛、教意、三世諸、如來、出世  
 正本意、唯説、阿彌陀、不可思議、願、常没、凡  
 夫人、緣、願力、廻向、聞、眞實、功德、獲、無上  
 信心、即得、大慶喜、獲、不退轉地、不令、斷  
 煩惱、速證、大涅槃、矣。

淨土文類聚鈔

愚禿鈔上

愚禿親鸞作

【一】賢者の信を聞きて 愚禿が心を顯はす。  
 賢者の信は 4 内は賢にして外は愚也。  
 愚禿が心は 6 内は愚にして外は賢也。  
 聖道・淨土の教に就いて二教有り、  
 一には大乘教、二には小乗教なり。  
 【二】大乘教に就いて二教有り、  
 一には漸教、二には頓教。  
 【三】頓教に就いて復二教・二超有り、  
 【四】二教とは  
 一には難行聖道之實教なり 謂はゆる佛心眞言法華華嚴  
 等之教也  
 二には易行淨土本願眞實之教 大無量壽經等也

聞賢者信 顯愚禿心  
 賢者信 内賢外愚也  
 愚禿心 内愚外賢也  
 就聖道淨土教有二教  
 一大乘教 二小乗教  
 就大乘教有二教  
 一頓教 二漸教  
 就頓教復有二教二超  
 二教者  
 一難行聖道之實教、所謂佛心眞言  
 法華華嚴等之教也  
 二易行淨土本願眞實之教、大無量  
 壽經等也

【六】二超とは

- 2 一には堅超
- 3 即身是佛・即身成佛等之證果也
- 4 二には横超
- 5 選擇本願・眞實報土・即得往生也

【七】漸教に就いて 復二教二出有り、

【八】二教とは

- 2 一には難行道・聖道・權教
- 3 法相等
- 4 歷劫修行之教也
- 5 二には易行道・淨土要門
- 6 無量壽佛觀經之意
- 7 定散三福・九品之教也

【九】二出とは

- 2 一には堅出
- 3 聖道・歷劫修行之證也
- 4 二には横出
- 5 淨土・胎宮邊地懈慢之往生也

【一〇】小乗教に就いて二教有り

- 2 一には緣覺教
- 3 一に麟喻獨覺
- 2 二に部行獨覺
- 5 二には聲聞教
- 6 初果・預流向・第二果・一來向・第三果・不還向・第四果・阿羅漢向・八輩也

【一一】唯阿彌陀如來選擇本願を除いて已外、大小・權實・顯密の諸教

- 一 二超者
  - 一 堅超 即身是佛即身成佛等之證果也
  - 二 横超 選擇本願眞實報土即得往生也
- 就漸教復有二教二出
  - 一 二教者
    - 一 難行道聖道權教法相等歷劫修行之教也
    - 二 易行道淨土要門無量壽佛觀經之意
  - 定散三福九品之教也
  - 二出者
    - 一 堅出 聖道歷劫修行之證也
    - 二 横出 淨土胎宮邊地懈慢之往生也
- 就小乗教有二教
  - 一 緣覺教 一麟喻獨覺 二部行獨覺
  - 二 聲聞教 初果・預流向・第二果・一來向・第三果・不還向・第四果・阿羅漢向・八輩也
- 唯除阿彌陀如來選擇本願已外、大小權實顯密諸教

皆是難行道・聖道門なり 又易行道・淨土門之教 是を淨土廻向發願自力方便の假門と曰ふ也 應に知るべし

【一二】大經に 選擇に三種あり

- 3 法藏菩薩
- 4 選擇本願
- 5 選擇淨土
- 6 選擇攝生
- 7 選擇證果
- 8 世饒王佛
- 9 選擇本願
- 10 選擇淨土
- 11 選擇讚嘆
- 12 選擇證成
- 13 釋迦如來
- 14 選擇彌勒付屬

【一三】觀經に 選擇に二種あり

- 3 釋迦如來
- 4 選擇功德
- 5 選擇攝取
- 6 選擇讚嘆
- 7 選擇護念
- 8 選擇阿難付屬
- 9 章提夫人
- 10 選擇淨土
- 11 選擇淨土機

【一四】小經に 勸信に二證成に二護念に二讚嘆に二難

- 實顯密諸教、皆是難行道聖道門。又易行道淨土門之教、是曰淨土廻向發願自力方便假門也。應に知るべし。
- 大經 選擇三種
  - 一 法藏菩薩 選擇本願 選擇淨土 選擇攝生
  - 二 世饒王佛 選擇本願 選擇淨土 選擇讚嘆
  - 三 釋迦如來 選擇彌勒付屬
- 觀經 選擇二種
  - 一 釋迦如來 選擇功德 選擇攝取 選擇讚嘆
  - 二 阿難付屬 選擇護念 選擇阿難付屬
- 章提夫人 選擇淨土 選擇淨土機
- 小經 勸信に二證成に二護念に二讚嘆に二難

易に二あり

【二五】勸信に二とは

2 一には 釋迦の勸信 3 釋迦に二あり

4 二には 諸佛の勸信 5 諸佛に二あり

【二六】證成に二とは

2 一には 功德證成 3 二には 往生證成なり

【二七】護念に二とは

2 一には 執持護念 3 釋迦の護念なり

4 二には 發願護念 5 諸佛の護念なり

【二八】讚嘆に二とは

2 一には 釋迦讚嘆に二あり 3 二には 諸佛讚嘆に二あり

【二九】難易に二とは

2 一には 難は疑情なり 3 二には 易は信心なり

【三〇】執持に三あり 已・今・當

【三一】發願に三あり 已・今・當

【三二】法事讚に三往生有り

易二

勸信二者

一 釋迦勸信 釋迦二

二 諸佛勸信 諸佛二

證成二者

一 功德證成 二 往生證成

護念二者

一 執持護念 釋迦護念

二 發願護念 諸佛護念

讚嘆二者

一 釋迦讚嘆 二 諸佛讚嘆

難易二者

一 難疑情 二 易信心

執持三 已今當

發願三 已今當

法事讚有三往生

2 一には 難思議往生は『大經』の宗なり

3 二には 雙樹林下往生は『觀經』の宗なり

4 三には 難思往生は『彌陀經』の宗なり

【三三】『大經』に言はく 2 本願を證成したまふに三身まします

3 法身の證成 4 『經』に言はく 5 空中にして讚じて言はく 6 決定して

必ず無上正覺を成じたまふべし」と文

7 報身の證成 8 十方如來なり

9 化身の證成 10 世饒王佛なり

【三四】佛土に就いて二種有り

2 一には 佛 3 二には 土なり

【三五】佛に就いて四種有り

2 一には 法身 3 二には 報身

4 三には 應身 5 四には 化身なり

【三六】法身に就いて二種有り

2 一には 法性法身 3 二には 方便法身なり

【三七】報身に就いて三種有り

一 難思議往生 大經宗

二 雙樹林下往生 觀經宗

三 難思往生 彌陀經宗

大經言 證成本願三身

法身證成 經言、空中讚言、決定必

成無上正覺ニ文

報身證成 十方如來

化身證成 世饒王佛

就佛土有二種

一者佛 二者土

就佛有四種

一 法身 二 報身

三 應身 四 化身

就法身有二種

一 法性法身 二 方便法身

就報身有三種

一 報身 二 應身 三 化身

【一】には彌陀 二には釋迦 三には十方

【二】應化に就いて三種有り

一には彌陀 二には釋迦 三には十方

【三】土に就いて四種有り

一には法身の土 二には報身の土

三には應身の土 四には化身の土なり

【四】報土に就いて三種有り

一には彌陀 二には釋迦 三には十方なり

【五】彌陀の化土に就いて二種有り

一には疑城胎宮 二には懈慢邊地

【六】本願一乘は 頓極頓速圓融圓滿之教なれば 絶對不二之教

一實真如之道也 應に知るべし 專が中之專なり 頓が中之頓なり

真の中の真なり 圓の中の圓なり 一乘一實は大誓願海なり 第一希有之行也

【七】金剛の眞心は 無礙の信海なりと 應に知るべし

【八】疏に云く 我菩薩藏頓教一乘海に依る」といへり

一彌陀 二釋迦 三十方

就應化有二三種

一彌陀 二釋迦 三十方

就土有四種

一法身土 二報身土

三應身土 四化身土

就報土有三種

一彌陀 二釋迦 三十方

就彌陀化土有二種

一疑城胎宮 二懈慢邊地

本願一乘頓極頓速圓融圓滿之教者絶對不二之教一實真如之道也應知專中之專頓中之頓真中之真圓中之圓一乘一實大誓願海第一希有之行也

金剛眞心無礙信海應知

疏云我依菩薩藏頓教一乘海

【九】讀に云く 瓔珞經の中には漸教を説く 萬劫功を修して不退を證す 觀經 彌陀經等の説は即ち是れ頓教善提藏なり

【十】圓頓とは 圓は圓融圓滿に名く 頓は頓極頓速に名く

【十一】二教對

本願一乘海は 頓極頓速圓融圓滿之教也 應に知るべし

淨土の要門は 定散二善方便假門三福九品之教也 應に知るべし

【十二】難易對 横堅對 頓漸對 超涉對 眞假對 順逆對

【十三】純雜對 邪正對 勝劣對 親疎對 大小對 多少對

【十四】重輕對 通別對 經迂對 捷遲對 廣狹對

【十五】近遠對 了不了對 大利小利對 無上有上對

【十六】不迴迴向對 自說不說對 有願無願對 有誓無誓對

【十七】選不選對 讀不讀對 證不證對 護不護對

【十八】因明直辨對 理盡非理盡對 無間有間對 相續不相續對

【十九】退不退對 斷不斷對 因行果德對 法滅不滅對 自力他力對 攝取不攝對 入定聚不入對 思不思議對

讀云瓔珞經中説漸教萬劫修功證不退觀經彌陀經等説即是頓教善提藏

圓頓者圓名圓融圓滿頓名頓極頓速二教對

本願一乘海頓極頓速圓融圓滿之教也應知

淨土要門定散二善方便假門三福九品之教也應知

難易對 横堅對 頓漸對 超涉對

眞假對 順逆對 純雜對 邪正對

勝劣對 親疎對 大小對 多少對

重輕對 通別對 經迂對 捷遲對

廣狹對 近遠對 了不了對 大利小利對

無上有上對 不迴迴向對 自說不說對

有願無願對 有誓無誓對 選不選對

讀不讀對 證不證對 護不護對

因明直辨對 理盡非理盡對 無間有間對

相續不相續對 退不退對 斷不斷對

因行果德對 法滅不滅對 自力他力對

攝取不攝對 入定聚不入對 思不思議對 報化二

【四〇】報化二土對 9 已上四十二對、教法に就く、應に知るべし。

【三一】眞實淨信心は内因なり 2 攝取不捨は外緣なり。

3 本願を信受するは、前念命終なり 4 即ち正聚之數に入る。文

5 即得往生は、後念即生なり 6 即時必定に入る。文 7 又必定の菩薩と

名くる也。文

8 他力全剛心也と、應に知るべし。

9 便ち彌勒菩薩に同じ 10 自力金剛心也と、應に知るべし 11 『大經』には次

如彌勒と言へり。文

【三九】二機對

2 一乘圓滿の機は、他力なり。

3 漸教廻心の機は、自力なり。

4 【一】信疑對 【二】賢愚對 【三】善惡對 【四】正邪對 【五】是非對 【六】實虛對

【七】眞僞對 【八】淨穢對 【九】好醜對 【一〇】妙麤對 【一一】利鈍對 【一二】奢促

對 【一三】希常對 【一四】強弱對 【一五】上々下々對 【一六】勝劣對 【一七】直入

廻心對 【一八】明闇對 5 已上十八對、二機に就くと、應に知るべし。

【四〇】又二種の機に就いて 復二種の性有り。

土對 已上四十二對、就教法、應知

眞實淨信心 内因 攝取不捨 外緣

信受本願 前念命終即入正定聚之數 文

即得往生後念即生 即時入必定 文

又名必定菩薩也 文

他力金剛心也 應知

便同彌勒菩薩 自力金剛心也 應知

大經言次知彌勒 文

二機對

一乘圓滿機 他力

漸教廻心機 自力

信疑對 賢愚對 善惡對 正邪對

是非對 實虛對 眞僞對 淨穢對

好醜對 妙麤對 利鈍對 奢促對

希常對 強弱對 上々下々對

勝劣對 直入廻心對 明闇對

已上十八對、就二機、應知

又就二種機、復有二種性

一機者

一善機 一惡機

二性者

一善性 一惡性

又復就善機有二種 又有傍正

一定機 二散機 疏云一切衆生機有

二種 一者定 二者散 文

又有傍正者

一菩薩大小 二緣覺

二聲聞辟支等 淨土之傍機也

四天 五人等 淨土之正機也

又復就善性有五種

一善性 二正性

三實性 四是性 五眞性

又復就惡機有七種

一十惡 二四重 三破見

一機とは

4 一には善機 5 二には惡機なり。

6 二性とは

7 一には善性 8 二には惡性なり。

【四一】又復善機に就いて二種有り 2 又傍正有り。

3 一には定機 4 二には散機なり 5 『疏』に「一切衆生の機に二種有り

6 一には定 7 二には散」と云へり。文

【四二】又傍正有りとは

2 一には菩薩 大小 3 二には緣覺

4 三には聲聞・辟支等 淨土之傍機也

5 四には天 6 五には人等なり 淨土之正機也

【四三】又復善性に就いて五種有り

2 一には善性 3 二には正性

4 三には實性 5 四には是性 6 五には眞性なり。

【四四】又復惡機に就いて七種有り。

2 一には十惡 3 二には四重 4 三には破見

四には破戒 五には五逆 七六には謗法  
七には闍提なり。

【四五】又復惡性に就いて五種有り

一には惡性 二には邪性 三には虛性  
四には非性 五には偽性なり。

【四六】光明寺の和尚の曰はく

道俗時衆等 各無上の心を發せ 生死甚だ厭ひ難く 佛法復忻ひ難し 共に金剛の志を發して 横に四流を超越せよ 彌陀界に觀入して 歸依し合掌し禮したてまつる 正しく金剛心を受けて 相應一念の後 果涅槃を得ん者、といへり。文

【四七】淨土論に曰はく

世尊我一心に 盡十方無礙光如來に歸命したてまつりて 安樂國に生ぜんと願す 我修多羅眞實功德相に依りて 願偈捨持を説く 佛教と相應せり、と。文

【四八】佛說無量壽經に言はく 2 康僧鎧三藏の譯

我が滅度之後を以て、復疑惑を生ずることを得ること無かれ

四破戒 五五逆 六謗法  
七闍提

又復就惡性有五種

一惡性 二邪性 三虛性  
四非性 五偽性

光明寺和尚曰

道俗時衆等 各發無上心 生死甚難厭 佛法復難忻 共發金剛志 横超斷四流 觀入彌陀界 歸依合掌禮 正受金剛心 相應一念後 果得涅槃者 文

淨土論曰

世尊我一心歸命盡十方無礙光如來 願生安樂國 我依修多羅 眞實功德相 說願偈捨持 與佛教相應 文

佛說無量壽經言 康僧鎧三藏譯

無得以此我滅度之後復生疑惑當來

當來之世に經道滅盡せん、我慈悲を以て哀愍して、特に此の經を留めて止住すること百歳せん 其れ衆生有りて斯の經に値ふ者、意の所願に隨ひてま皆得度す可しと 佛彌勒に語りたまはく 7 如來の興世値ひ難く見たてまつり難し 8 諸佛の經道得難く聞き難し 9 菩薩の勝法諸波羅蜜聞くことを得ること亦難し 10 善知識に遇ひ法を聞き能く行すること此れ亦難しと爲す 11 若し斯の經を聞いて信樂受持すること、難の中之難此の難に過ぎたるは無けん 12 是の故に我が法是の如く作し是の如く説きはの如く教ふ 13 應當に信順して法の如く修行すべし」と。文

【四九】無量壽如來會に言はく 2 菩提流支三藏の譯

如來の勝智は虛空に徧し 4 所説の義言は唯佛の悟なり 5 是の故に博く諸智士を聞きて 6 應に我が教如實の言を信すべし」と。文

【五〇】無量清淨平等覺經に言はく 2 帛延三藏の譯

速疾に超えて便ち 4 安樂國之世界に到る可し 5 無量光明土に至りて 6 無數の佛に供養したてまつる」と。文

之世經道滅盡我以慈悲哀愍特留此經止住百歳其有衆生值斯經者隨意所願皆可得度佛語彌勒如來興世難值難見諸佛經道難得難聞菩薩勝法諸波羅蜜得聞亦難遇善知識聞法能行此亦爲難若聞斯經信樂受持難中之難無過此難是故我法如是作如是説如是教應當信順如法修行 文

無量壽如來會言 菩提流支三藏譯

如來勝智徧虛空 所説義言唯佛悟是故博聞諸智士 應信我教如實言 文

無量清淨平等覺經言 帛延三藏譯

速疾超便可到 安樂國之世界 至無量光明土 供養於無數佛 文



【五二】諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經に言はく 2 支謙三

藏の譯

3 我般泥洹して去後經道留止せんこと千歳せん 4 千歳の後經道斷絶せん 5 我皆慈哀して特に是の經法を留めて止住すること百歳せん 6 百歳の中に竟らん 7 乃し休止し斷絶せん 8 心の所願に在りて皆道を得可しと。畧出す

【五三】元照律師阿彌陀經義疏に云く 2 大智律師也

3 勢至章に云く 4 十方の如來衆生を憐念したまふ 5 母の子を憶ふが如しと。 6 大論に曰く 7 譬へば魚母の若し子を念はざれば、子即ち壞爛する等の如し 8 阿耨多羅此には無上と翻す 9 三藐は正等と云ふ 10 三菩提は正覺と云ふ 11 即ち佛果の號なり 12 薄地の凡夫、業惑に纏縛せられて五道に流轉せること百千萬劫なり 13 忽ちに淨土を聞いて志願して生を求む 14 一日名を稱すれば即ち彼の國に超ゆ 15 諸佛護念して直ちに菩提に趣かしむ 16 謂ふ可し、萬劫にも逢ひ難し、千生に一たび誓に遇へり 17 今日より未來を終盡すとも在處にして讚揚し多方にして勸誘せん

諸佛阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經言 支謙三藏譯

我般泥洹去後、經道留止千歳、千歳後經道斷絶、我皆慈哀特留是經法止住百歳、百歳中竟、乃休止斷絶、在心所願、皆可得道。畧出

元照律師阿彌陀經義疏云 大智律師也

勢至章云、十方如來憐念衆生、如母憶子。大論曰、譬如魚母若不念子、子即壞爛等。阿耨多羅此翻無上。三藐云、正等。三菩提云、正覺。即佛果號。薄地凡夫業惑纏縛流轉五道百千萬劫、忽聞淨土志願求生、一日稱名即超彼國。諸佛護念直趣菩提、可謂萬劫難逢。千生一遇誓從今日終盡未來在處讚揚多方勸誘。所感身土所化機緣與

阿彌陀等無有異。此心罔極、唯佛證知是故下三勸信。信我語者謂信教也。如不信我十方諸佛豈虛妄乎畧出

建長七年乙卯八月廿七日書之

愚禿親鸞 八十三歳

18 所感の身土所化の機緣阿彌陀と等しく異有ること無けん 19 此の心極罔し、唯佛證知したまへ 20 是の故に下に三たび信を勸む 21 我が語を信する者、教を信すと謂ふ也 22 我が十方諸佛を信ぜざるが如しと、豈虛妄なるをや。畧出す

愚禿親鸞 八十三歳

建長七年乙卯八月廿七日之を書す

# 愚禿鈔下

愚禿親鸞作

五三 賢者の信を聞きて

2 愚禿が心を顯はす  
3 賢者の信は  
4 内は賢にして外は愚也  
5 愚禿の心は  
6 内は愚にして外は賢也

五四 唐朝の光明寺の和尚の觀經義に云く

先づ上品上生の位の中に就いて乃至一には「佛告阿難」より已下即ち雙べて二意を標す 4一には告命を明す 5一には其の位を辨定することを明す 此れ即ち大乘の上善を修學する凡夫人也 7三には若有衆生より下即便往生に至る已來は正しく總じて有生之類を擧ぐることを明す 8即ち其の四あり 一には能信之人を明し 10二には往生を求願することを明し 11三には發心の多少を明し 12四には得生之益を明す 13四に何等爲三より下必生彼國に至る已來は正しく三心を辨定して以て正因と爲すことを明す 14即

聞賢者信 顯愚禿心

賢者信 内賢外愚也

愚禿心 内愚外賢也

唐朝光明寺和尚觀經義云

先就上品上生位中乃至一從佛告阿難已下即雙標二意一明告命二明辨定其位此即修學大乘上善凡夫人也三從若有衆生下至即便往生已來正明總舉有生之類即有其四一明能信之人二明求願往生三明發心多少四明得生之益四從何等爲三下至必生彼國已來正明辨定三心以爲正因即有

ち二有り 15一には世尊機に隨ひて益を顯はすこと意密にして知り難し、佛自ら問うて自ら徴したまふに非ざれば解を得るに由無きことを明す 16二には如來還つて自ら前の三心之數を答へたまふことを明す 17「經」に云く 18「一者至誠心」 19至とは眞なり、誠とは實なり 20一切衆生身口意業に修する所の解行必ず眞實心の中に作したまへるを須ひんことを明さんと欲ふ 21外に賢善精進之相を現することを得ざれば 22内に虚假を壞けばなり 23貪瞋邪偽奸詐百端にして惡性侵め難し 24事蛇蝎に同じ 25三業を起すと雖も名けて雜毒之善と爲す 26亦虚假之行と名く 27眞實の業と名けざる也 28若し此の如き安心起行を作す者は 29縱使身心を苦勵して日夜十二時急に走め急に作して頭燃を灸ふが如くする者を衆て雜毒之善と名く 30此の雜毒之行を廻して彼の佛の淨土に求生せんと欲する者は此れ必ず不可也 31何を以ての故に 32正しく彼の阿彌陀佛因中に菩薩の行を行じたまひし時乃至一念一刹那も三業の所修皆是れ眞實心の中に作したまひしに由りてなり 33凡そ施したまふ所趣求を爲す 34亦皆眞實なり 35又眞實に二種有り 36一には自利眞實、二には利他眞實なり」と文

二一明世尊隨機顯益意密難知非佛自問自徵無由得解二明如來還自答前三心之數經云一者至誠心至者眞誠者實欲明一切衆生身口意業所修解行必須眞實心中作不得外現賢善精進之相内壞虚假貪瞋邪偽奸詐百端惡性難侵事同蛇蝎雖起三業名爲雜毒之善亦名虚假之行不名眞實業也若作如此安心起行者縱使苦勵身心日夜十二時急走急作如灸頭燃者衆名雜毒之善欲廻此雜毒之行求生彼佛淨土者此必不可也何以故正由彼阿彌陀佛因中行菩薩行時乃至一念一刹那三業所修皆是眞實心中作凡所施爲趣求亦皆眞實又眞實有二種一者自利眞實二者利他眞實文

【丑】利他眞實に就いて亦二種有り。

- 2 一には、凡そ施したまふ所趣求を爲す、亦皆眞實なり
- 3 二には、不善の三業必ず眞實心の中に捨てたまひしを須ひよ
- 4 又若し善の三業を起さば必ず眞實心の中に作したまひしを須ひ
- よ、内外明闇を簡ばず眞實を須ふるが故に至誠心と名く、と。文

【丑】自利眞實と言ふは復た二種有り。

- 2 一には眞實心の中に自他の諸惡及び穢國等を制捨して 行住坐臥に一切菩薩の諸惡を制捨するに同じく我も亦是の如くせんしと想へと也。
- 4 二には眞實心の中に自他凡聖等の善を勤修すべしと 眞實心の中に口業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を讚嘆すべし 又眞實心の中の口業に三界六道等の自他の依正二報苦惡之事を毀厭す 亦一切衆生三業所爲の善を讚嘆す 若し善業に非ざる者は敬うて之を遠かれ 亦隨喜せざれと也 又眞實心の中の身業に合掌し禮敬して四事等をもて彼の阿彌陀佛及び依正二報を供養したてまつれ 又眞實心の中の身業に此の生死三界等の自他の依正二報を輕慢し

厭捨すべし 又眞實心の中の意業に彼の阿彌陀佛及び依正二報を思想し觀察し憶念して目の前に現せるが如くすべし 又眞實心の中の意業に此の生死三界等の自他の依正二報を輕賤し厭捨すべしとなり。文

【五七】一には至誠心といふは 至とは眞なり 誠とは實なり 即ち眞實也。

【五八】眞實に二種有り。

- 2 一には自利眞實なり、
- 3 難行道 4 聖道門 5 豎超 6 即身成佛 7 即身成佛 8 自力也
- 9 豎出 10 自力の中の漸教歴劫修行也。
- 11 二には利他眞實なり、
- 12 易行道 13 淨土門 14 横超 15 如來の誓願他力也
- 16 横出 17 他力の中の自力なり、定散諸行也。

【五九】自利眞實に就て復二種有り。

- 2 一には厭離眞實、
- 3 聖道門 4 難行道 5 豎出 6 自力

就利他眞實亦有二種

- 一者凡所施爲趣求、亦皆眞實、二者不善三業、必須眞實心中捨、又若起善三業者、必須眞實心中作、不簡内外明闇、須眞實故名至誠心。文

言自利眞實者復有二種、一者眞實心中制捨自他諸惡及穢國等行住坐臥想同一切菩薩制捨諸惡、我亦如是也、二者眞實心中勤修自他凡聖等善、眞實心中口業讚嘆彼阿彌陀佛及依正二報、又眞實心中口業毀厭三界六道等自他依正二報苦惡之事、亦讚嘆一切衆生三業所爲善、若非善業者敬而遠之、亦不隨喜也、又眞實心中身業合掌禮敬四事等供養彼阿彌陀佛及依正二報、又眞實心中身業輕慢厭捨此生死三界等自他依正二報。

報、又眞實心中意業思想觀察憶念彼阿彌陀佛及依正二報、如現目前、又眞實心中意業輕賤厭捨、此生死三界等自他依正二報。文

一者至誠心者至者眞誠者實、即眞實也。眞實有二種、

- 一者自利眞實、
- 難行道 聖道門
- 豎超 即身成佛 自力也
- 豎出 自力の中の漸教 歴劫修行也
- 二者利他眞實、
- 易行道 淨土門
- 横超 如來誓願 他力也
- 横出 他力の中の自力、定散諸行也

就自利眞實復有二種、

- 一者厭離眞實
- 聖道門 難行道 豎出 自力

7 堅出とは難行道之教なり 8 厭離を以て本と爲す 9 自力之心なるが故也

- 10 一二には忻求真實
- 11 淨土門
- 12 易行道
- 13 横出
- 14 他力
- 15 横出とは易行道之教なり 16 忻求を以て本と爲す 17 何を以ての故に 18 願力に由りて生死を厭捨せ令むるが故也

【六〇】又横出の眞實に就いて復三種有り。

- 1 一には口業に忻求真實
- 2 二には口業に厭離眞實なり
- 3 口業に厭離眞實なり
- 4 一二には身業に忻求真實
- 5 身業に厭離眞實なり
- 6 三には意業に忻求真實
- 7 意業に厭離眞實なり

【六一】宗師の釋文を按ずるに 一者眞實心中已下より 自他凡聖等の善に至るまでは厭離を先と爲し忻求を後と爲す 則ち是れ難行自力道堅出之義也 眞實心中口業已下より 自他依正二報に至る

堅出者難行道之教、以厭離爲本、自力之心故也。

- 一者忻求真實
- 淨土門
- 易行道
- 横出
- 他力
- 横出者易行道之教、以忻求爲本、何以故、由願力、令厭捨生死之故也。

又就横出眞實復有三種

- 一者口業忻求真實
- 口業厭離眞實
- 二者身業忻求真實
- 身業厭離眞實
- 三者意業忻求真實
- 意業厭離眞實

按宗師釋文從一者眞實心中已下至自他凡聖等善者、厭離爲先忻求爲後、則是難行道自力堅出之義也。從眞實心

までは則ち是れ易行道他力横出之義也

【六一】二には深心 2 深心と言ふは即ち是れ深信之心也

3 亦二種有り。

- 4 一には 5 決定して 6 自身は 7 現に是罪惡生死の凡夫 8 曠劫より已來常に没し常に流轉して 9 出離之縁有る事無しと 10 深信す。
- 11 二には 12 決定して 13 彼の阿彌陀佛四十八願をもて衆生を攝受したまふこと 14 疑無く慮無く彼の願力に乗ずれば 15 定んで往生を得と 16 深信すと。文

17 今斯の深信は他力至極之金剛心 18 一乘無上之眞實信海也

【六二】文の意を按ずるに 2 深信に就いて七深信有り 3 六決定有り

【六三】七深信とは、

- 2 第一の深信は 3 決定して自身を深信する 4 即ち是れ自利の信心也
- 5 第二の深信は 6 決定して乘彼願力を深信する 7 即ち是れ利他の信海也
- 8 第三には 9 決定して『觀經』を深信す。

中口業已下、至自他依正二報者、則是易行道他力横出之義也。一者深心、言深心者、即是深信之心也。亦有二種、一者決定深信、自身現是罪惡生死、凡夫、曠劫已來、常沒常流轉、無有出離之縁。二者決定深信、彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生、無疑無慮、乘彼願力、定得往生。文

今斯深信者、他力至極之金剛心、一乘無上之眞實信海也。

按文意、就深信有七深信、有六決定、七深信者、第一深信、決定深信自身、即是自利信心也。

第二深信、決定深信乘彼願力、即是利他信海也、第三決定深信觀經。

10 第四には 11 決定して『彌陀經』を深信す、

12 第五には 13 唯佛語を信じ 14 決定して行に依る、

15 第六には 16 此の經に依りて深信す、

17 第七には 18 又深心の深信は決定して自心に建立せよと。

【六五】六決定とは 2 已上次での如し 3 應に知るべし。

【六六】第五の唯信佛語に就いて 2 三遣 3 三隨順 4 三是名有り。

【六七】三遣とは

2 一には佛の捨て遣めたまふ者を即ち捨つ、

3 二には佛の行ぜ遣めたまふ者を即ち行す、

4 三には佛の去ら遣めたまふ處をば即ち去るとなり。

【六八】三隨順とは

2 一には是を佛教に隨順すと名く、

3 二には佛意に隨順す、

4 三には是を佛願に隨順すと名くと。

【六九】三是名とは

2 一には是を眞の佛弟子と名く、

第四決定深信彌陀經、

第五唯信佛語決定依行、

第六依此經深信、

第七又深心深信者決定建立自心、

六決定者 已上如次應知。

就第五唯信佛語有二遣三隨順三是名

三遣者

一佛遣捨者即捨、

二佛遣行者即行、

三佛遣去處即去、

三隨順者

一 是名隨順佛教、

二 隨順佛意、

三 是名隨順佛願、

三是名者

一 是名眞佛弟子、

上の「是を名く」と此と合して三是名也。

【七〇】第六に此の經に依りて深信するに就いて 2 六即 3 三印 4 三無 5

6 六正 7 二了有り。

【七一】六即とは

2 一には若し佛意に稱へば即ち印可して如是如是と言ふ

3 二には若し佛意に可はざれば即ち汝等が所説是の義不如是と

言ふ、

4 三には印せざる者は即ち無記無利無益之語に同じと

5 四には佛の印可したまふは即ち佛之正教に隨順するなり

6 五には若し佛の所有の言説は即ち是れ正教なり

7 六には若し佛の所説は即ち是れ了教なり

【七二】三印とは

2 一には即印可 3 二には不印

4 三には佛印可 5 三印は上の六即の文中に有り。

【七三】三無とは

2 一には無記 3 二には無利

上は名與此合して三是名也。

就第六依此經深信有六即三印三無

六正二了。

六即者

一若稱佛意即印可言如是如是、

二若不可佛意者即言汝等所説是

義不如是、

三不印者即同無記無利無益之語、

四佛印可者即隨順佛之正教、

五若佛所有言説即是正教、

六若佛所説即是了教、

三印者

一即印可 二不印

三佛印可。三印者有上六即文中、

三無者

一無記 二無利

【七五】二了とは  
1 一には若し佛の所説は即ち是れ了教なり、  
2 二には菩薩等の説は盡く不了教と名くる也、應に知るべし。  
3 三には又深心深信に就いて、決定して自心を建立するに、  
4 二別  
5 三異、一問答有り。

【七四】二別とは  
1 一には別解  
2 二には別行

【七三】三異とは  
1 一には異學  
2 二には異見  
3 三には異執

【七二】四別とは  
1 一には處別  
2 二には時別  
3 三には對機別  
4 四には利益別なり。

【七一】四信とは  
1 一には往生の信心、  
2 二には清淨の信心、  
3 三には上上の信心、  
4 四には畢竟して一念疑退之心を起さざる也、  
5 報佛・化佛の疑難也。

【七〇】五實とは  
1 一には眞實決了の義、  
2 二には實知  
3 三には實解  
4 四には實見  
5 五には實證なり。

【六九】報化二佛の疑難に就いて、  
1 彌陀經を引ききて信を勸むるに、  
2 二專

【六八】報化二佛の疑難に就いて、  
1 彌陀經を引ききて信を勸むるに、  
2 二專

三無益、三無者有六即文中、  
六正者  
一正教  
二正義  
三正行  
四正解  
五正業  
六正智

二了者  
一若佛所説即是了教、  
二菩薩等説盡名不了教也、應に知るべし。  
三又深心深信者、決定建立自心、  
有、二別、三異、一問答、

二別者  
一別解  
二別行

三異者  
一異學  
二異見  
三異執

一問答中有四別四信、

四別者  
一處別  
二時別  
三對機別  
四利益別

四信者  
一往生信心、  
二清淨信心、  
三上上信心、  
四畢竟不起一念疑退之心也、  
報佛・化佛疑難也。

就上上信心有、五實、二異、  
五實者  
一眞實決了義、  
二實知  
三實解  
四實見  
五實證

二異者  
一異見  
二異解

就報化二佛疑難、引彌陀經勸信、有二

四同 二所化 六惡 二同 三所有り。

【八四】二專とは

一には專念 二には專修 三種也。

【八五】四同とは

一には同讚 二には同勸  
三には同證 四には同體。

【八六】二所化とは

一には一佛の所化は即ち是れ一切佛の化なり。  
二には一切佛の所化は即ち是れ一佛の化なり。

【八七】六惡とは

一には惡時 二には惡世界  
三には惡衆生 四には惡見  
五には惡煩惱 六には惡邪無信盛時也。

【八八】二同とは

一には十方佛等同心。  
二には同時に各舌相を出すなり。

專・四同・二所化・六惡・二同・三所

二專者

一專念 二專修 三種也。

四同者

一同讚 二同勸  
三同證 四同體。

二所化者

一佛所化即一切佛化  
一切佛所化即一佛化。

六惡者

一惡時 二惡世界  
三惡衆生 四惡見  
五惡煩惱 六惡邪無信盛時也。

二同者

一十方佛等同心。  
二同時各出舌相。

【八九】三所とは

一には所說 二には所讚  
三には所證なり。

【九〇】一佛の所說は即ち一切佛同じく其の事を證誠したまふ也。此を人に就て信を立つと名くる也。應に知るべし。

【九一】次に就いて信を立つとは 然るに行に二種有り。

一には正行 二には雜行なり。

【九二】正行に就いて 五正行・六一心・六專修有り。

【九三】五正行とは

一には一心に專讚誦 二には一心に專觀察  
三には一心に專禮佛 四には一心に專稱佛名  
五には一心に專讚嘆供養なり。

【九四】又此の正の中に就いて復二種有り。

一には一心に彌陀の名號を專念する是を正定之業と名く、  
二には若し禮誦等に依るは即ち名けて助業と爲すと。  
【九五】六一心とは 次での如く一心也。

三所者

一所說 二所讚  
三所證。

一佛の所說即一切佛同證誠其事也。此名

就人立信也。應レ知。

次に就いて信者然行有二種

一者正行 二者雜行

就正行有五正行・六一心・六專修

五正行者

一 一心專讚誦 二 一心專觀察  
三 一心專禮佛 四 一心專稱佛名  
五 一心專讚嘆供養

又就此正中復有二種

一者一心專念彌陀名號是名正定之業  
二者若依禮誦等即名爲助業。  
六一心者如次一心也。

【九六】六專修とは 2 次での如く專修也。

【九七】又復た正雜二行に就いて 復た二行有り、  
3 一には定行 4 二には散行也。

【九八】又復た正雜に就いて 復た二種有り、  
3 一には念佛 4 二には觀佛なり。

【九九】又念佛に就いて 復た二種有り、  
3 一には彌陀念佛 4 二には諸佛念佛、  
5 法身・報身・應身・化身。

【一〇〇】又復た彌陀念佛に就いて 二種有り、  
3 一には正行定心念佛、  
4 二には正行散心念佛なり、  
5 彌陀定散の念佛是を淨土の眞門と曰ふ 7 亦一向專修と名くる也 8 應に知るべし。

【一〇一】又復た諸佛念佛に就いて 二種有り、  
3 一には雜行定心念佛、  
4 二には雜行散心念佛。

諸佛定散の念佛是れ雜の中の專行也と 應に知るべし。

【一〇二】又復た觀佛に就いて 復た二種有り、  
3 一には正之觀佛 4 二には雜之觀佛なり。

【一〇三】又復た正の觀佛に就いて 復た二種有り、  
3 一には眞觀 4 二には假觀なり。

- 【一〇四】又復た眞假に就いて 二十三の觀想有り、
- 3 日想 4 水想 5 地想 6 寶樹想 7 寶池 8 寶樓 9 華座
  - 10 像想 11 眞觀 12 觀音 13 勢至 14 普觀 15 雜觀

【一〇五】又復た正の散行に就いて 四種有り、  
3 讀誦 4 禮拜 5 讚嘆 6 供養。

【一〇六】上來 定散の六種兼行するが故に「雜修」と曰ふ 是を「助業」と名く 名けて「方便假門」と爲す 亦「淨土の要門」と名くる也 應に知るべし、と。

【一〇七】又復た雜の觀佛に就いて 二種有り 3 又眞假有り、  
4 一には無想雜念 5 二には立想住心なり。

【一〇八】又復た雜の散行に就いて 三福有り、

六專修者 如次專修也。

又復就正雜二行復有二行、  
一者定行 二者散行也。

又復就正雜復有二種、  
一念佛 二觀佛。

又就念佛復有二種、  
一彌陀念佛 二諸佛念佛、  
法身報身應身化身。

又復就彌陀念佛有二種、  
一正行定心念佛、  
二正行散心念佛。

彌陀定散念佛是曰淨土眞門、  
亦名一向專修也 應に知る。

又復就諸佛念佛有二種、  
一雜行定心念佛、  
二雜行散心念佛。

諸佛定散念佛是雜中之專行也 應に知る。

又復就觀佛復有二種、  
一正之觀佛 二雜之觀佛。

又復就正觀佛復有二種、  
一眞觀 二假觀。

- 又復就眞假有二十三觀想、
- 日想 水想 地想 寶樹想 寶池
  - 寶樓 華座 像想 眞觀 觀音
  - 勢至 普觀 雜觀

又復就正散行有四種、  
讀誦 禮拜 讚嘆 供養

上來定散六種兼行故曰雜修、是名助業、  
名爲方便假門、亦名淨土要門也 應に知る。

又復就雜觀佛有二種、又有眞假、  
一無想雜念 二立相住心、  
一孝養父母、奉事師長、慈心不殺、修



一には孝養父母奉事師長慈心不殺修十善業なり、

二には受持三歸具足衆戒不犯威儀なり、

三には發菩提心深信因果讀誦大乘勸進行者なり、と。

【一〇九】上來一切定散諸善悉く雜行と名く六種の正に對して應に六種の雜有るべし、

「雜行」之言は人天菩薩等の解行雜するが故に雜と曰ふ也、

元より來淨土の業因に非ず是を「發願の行」と名く、

亦「廻心の行」と名く、故に「淨土の雜行」と名く、是を「淨土の方便假門」と名く、

亦「淨土の要門」と名くる也、凡そ聖道淨土正雜定散皆是れ廻心之行也、

應に知るべし、

【一一〇】三には廻向發願心、廻向發願心と言ふは二種有り、

一には過去今生自他所作の善根、皆眞實の深信心の中に廻向して彼の國に生ぜん願するなり、

二には廻向發願して生ずる者は、必ず決定して眞實心の中に廻向せしめたまへる願を須ひて得生の想を作すなり、と。

【一一一】廻向發願生者に就いて、信心有り、信心心とは、

十善業、

二受持三歸具足衆戒不犯威儀、

三發菩提心深信因果讀誦大乘勸進行者、

上來一切定散諸善悉く雜行、對六種正應有六種雜、雜行之言、人天菩薩等解行雜故曰雜也、

自元來非淨土業因、是名發願行、亦名廻心行、故名淨土雜行、是名淨土方便假門、亦名淨土要門、也、

凡そ聖道淨土正雜定散、皆是廻心之行也、應に知るべし、

三者廻向發願心言、廻向發願心二者有二種、

一過去今生自他所作善根、皆眞實深信心中廻向願生彼國、

二廻向發願生者、必須決定眞實心中廻向願作得生想、

就廻向發願生者有、信心、信心心とは、

得生の想を作す、此の心深信すること由し金剛の若しとなり

【一一二】此の深信に就て、一譬喩、二異、三別、四問答、五廻向有り、

【一一三】一譬喩とは、此の心深信すること由し金剛の若し、と、

【一一四】二異とは、一には異見、二には異學、

【一一五】三別とは、一には別解、二には別行、

【一一六】四問答に就いて、七惡、六譬、二門、四有緣、二所求、二所愛、二欲學、二必有り、

【一一七】七惡とは、一には十惡、二には五逆、三には四重、四には破戒、五には破見、六には謗法、七には闍提なり、

【一一八】六譬とは、一には明能破闇、二には空能含有、

得生の想を作す、此の心深信すること由し金剛の若しとなり

【一一二】此の深信に就て、一譬喩、二異、三別、四問答、五廻向有り、

【一一三】一譬喩とは、此の心深信すること由し金剛の若し、と、

【一一四】二異とは、一には異見、二には異學、

【一一五】三別とは、一には別解、二には別行、

【一一六】四問答に就いて、七惡、六譬、二門、四有緣、二所求、二所愛、二欲學、二必有り、

【一一七】七惡とは、一には十惡、二には五逆、三には四重、四には破戒、五には破見、六には謗法、七には闍提なり、

【一一八】六譬とは、一には明能破闇、二には空能含有、

三には地能載養 四には水能生潤  
五には火能成壤 六には二河なり水の河・火の河。

【二九】二門とは

出愚禿門 二には隨出一門即出一煩惱門也、  
人智慧海 三には隨入二門即入一解脫智慧門也。

【三〇】四有緣とは

一には、汝何を以て乃し將に有緣之要行に非ざるをもて我を障惑する、と。  
二には、然るに我が所愛は即ち是れ我が有緣之行なり、即ち汝が所求に非ず、と。  
三には、汝が所愛は即ち是れ汝が有緣之行なり、亦我が所求に非ず。是の故に各所樂に隨うて其の行を修すれば必ず疾く解脫を得る也。  
四には、若し行を學ばんと欲は、必ず有緣之法に藉れ、少しき功勞を用ふるに多く益を得。文

【三一】二所求とは 上の文の如し。

【三二】二所愛とは 上の文の如し

【三三】一欲學とは

一には、行者當に知るべし、若し解を學ばんと欲は、凡よりに聖に至り乃至佛果まで一切礙無く皆學ぶ事を得んと也、  
二には、若し行を學ばんと欲は、必ず有緣之法に藉れと也乃至

【三四】一必とは 上の文の如し

【三五】此の深信の中に就いて 二廻向といふは

一には、常に此の想を作し常に此の解を作す 故に「廻向發願心」と名く、  
利他他力廻向 二には又「廻向」と言ふは彼の國に生れ已りて還つて大悲を起して生死に廻入して衆生を教化するを亦「廻向」と名くる也、  
【三六】二河の中に就いて 一の譬喩を説いて信心を守護し以て外邪見之難を防がんと。  
此の道東の岸より西の岸に至るまで亦長さ百歩。文

【三七】百歩とは

人壽百歲に譬ふる也。

三地能載養 四水能生潤  
五火能成壤 六二河水河火河。

二門者

一隨出一門即出一煩惱門也、  
二隨入二門即入一解脫智慧門也  
四有緣者  
一汝何以乃將非有緣之要行、障惑於我、  
二然我之所愛即是我有緣之行、即非汝所求、  
三汝之所愛即是汝有緣之行、亦非我所求、是故各隨所樂而修其行者、必疾得解脫也、  
四若欲學行者、必藉有緣之法、少用功勞多得益。文

一 二所求者 如上文。

二 二所愛者 如上文。

一 一欲學者

一 行者當知若欲學解從凡至聖乃至佛果一切無礙皆得學也、  
二 若欲學行者必藉有緣之法乃至

一 一必者 如上文。

就此深信中二廻向者

一 常作此想常作此解、故名廻向發願心、  
二 又言廻向者、生彼國已還起大悲、廻入生死教化衆生、亦名廻向也  
就二河中、説一譬喩、守護信心、以防外邪異見之難、  
此道從東岸至西岸亦長さ百歩。文

百歩者、  
譬人壽百歲也。

【二六】羣賊惡獸とは

羣賊とは別解・別行・意見・異執・惡見・邪心・定散・自力之心也  
惡獸とは六根・六塵・五陰・四大也

【二九】常に惡友に隨ふとは

惡友とは善友に對す 雜毒虛假之人也

【三〇】無人空過の澤と言ふは

惡友也 眞の善知識に値はざる也 眞の言は假に對し偽に對す  
善知識とは惡知識に對する也

眞善知識 7 正善知識 8 實善知識 9 是善知識 10 善善知識 11 善性人也

12 惡知識とは 13 假善知識 14 偽善知識 15 邪善知識 16 虛善知識 17 非善知識 18 惡善知識 19 惡性人也

【三一】白道四五寸と言ふは

白道とは白の言は黑に對す 道の言は路に對す 白とは則ち是れ六度萬行定散也 斯れ則ち自力小善の路也 黒とは則ち是れ六趣四生二十五有十二類生の黑惡道也

羣賊惡獸者

羣賊者別解別行異見異執惡見邪心定散自力之心也

惡獸者六根六塵五陰四大也

常隨惡友者

惡友者對善友雜毒虛假之人也

言無人空過澤者

惡友也 不値眞善知識也 眞言對假對偽善知識者對惡知識也

眞善知識 正善知識 實善知識

是善知識 善善知識 善性人也

惡知識者 假善知識 偽善知識

邪善知識 虛善知識 非善知識

惡善知識 惡性人也

言白道四五寸者

白道者白言對黑道言對路。白者則是六度萬行定散也 斯則自力小善路也 黒者則是六趣四生二十五有十二類生黑惡道也

四五寸とは 四の言は四大の毒蛇に譬ふる也 五の言は五陰の惡獸に喩ふる也

【二二】能生清淨願往生心と言ふは

無上の信心・金剛の眞心を發起する也 斯は如來廻向之信樂也

【二三】或は行くこと一分二分と言ふは

年歳時節に喩ふる也

【二四】惡見人等と言ふは

憍慢懈怠邪見疑心之人也

【二五】又「西の岸の上に人有りて喚んで言く「汝一心正念にして直に來れ我能く護らん」と言ふは

2 「西の岸の上に人有りて喚んで言く」とは阿彌陀如來の誓願也

3 「汝」の言は行者也 斯れ則ち必定の菩薩と名く 龍樹大士の「十住毘婆沙論」に曰く「即時入必定」となり 曇鸞菩薩の「論」には「入正定聚之數」と曰へり 善導和尚は「希有人也 最勝人妙好人也 好人也 上上人也 眞の佛弟子也」と言へり。

8 「一心」の言は眞實の信心也

四五寸者、四言譬四大毒蛇也、五言喩五陰惡獸也

言能生清淨願往生心者

發起無上信心金剛眞心也、斯如來廻向之信樂也

言或行一分二分者

喩年歳時節也

言惡見人等者

憍慢懈怠邪見疑心之人也

言又西岸上有入喚言、汝一心正念直來、我能護者、西岸上有入喚言者、阿彌陀如來誓願也、汝言行者也、斯則名必定菩薩、龍樹大士十住毘婆沙論曰、即時入必定、曇鸞菩薩論曰、入正定聚之數、善導和尚言、希有人也、最勝人也、妙好人也、好人也、上上人也、眞佛弟子也、一心言眞實信心

9 「正念」の言は選擇攝取の本願也 10 又第一希有の行也 11 金剛不壞の心也。

12 「直」の言は廻に對し迂に對する也 13 又「直」の言は方便假門を捨て、如來の大願他力に歸せんとなり 14 諸佛出世之直説を顯はさ使めんと欲して也。

15 「來」の言は去に對し往に對する也 16 又報土に還來せ令めんと欲して也。

17 「我」の言は盡十方無礙光如來也 18 不可思議光佛也。

19 「能」の言は不堪に對する也 20 疑心之人也。

21 「護」の言は阿彌陀佛果成之正意を顯はす也 22 亦攝取不捨を形はす之貌也 23 則ち是れ現生護念也。

24 「念道」の言は他力白道を念ぜよと也。

25 「慶樂」とは「慶」の言は印可之言なり 26 獲得之言也 27 「樂」の言は悦喜之言也 28 歡喜踊躍也。

【二六】「仰いで釋迦發遣して捐へて西方に向はしめたまへることを蒙る」といふは願也。

也。正念言選擇攝取本願也、又第一希有行也、金剛不壞心也、直言對迴對迂也。又直言捨方便假門歸如來大願他力、欲使顯諸佛出世之直説也、來言對去對往也、又欲令還來報土也、我言盡十方無礙光如來也、不可思議光佛也、能言對不堪也、疑心之人也、護言顯阿彌陀佛果成之正意也、亦形攝取不捨之貌也、則是現生護念也、念道言念他力白道也、慶樂者慶言印可之言也、獲得之言也、樂言悅喜之言也、歡喜踊躍也。仰蒙釋迦發遣捐向西方者願也、又籍彌陀悲心招喚者信也、今信願二尊之意不願水火二河、念々無遺乘彼願力之道。

就至誠心 難易對 彼此對 去來對

毒藥對 内外對

難易對

難者三業修善不真實之心也

易者如來願力廻向之心也

彼此對

彼者淨邦也 此者穢國也

去來對

去者釋迦佛也 來者彌陀也

毒藥對

毒者善惡雜心也 藥者純一專心也

内外對

内外道外佛教 内聖道外淨土

内疑情外信心 内惡性外善性

内邪外正 内虛外實 内非外是

内假外真 内難外專 内愚外賢

内遠外近 内迂外直 内遠外隨

内逆外順 内輕外重 内淺外深

又「彌陀の悲心招喚したまふに籍る」といふは信也。

今二尊之意に信願して水火の二河を願みす念々に遺る、こ

と無く彼の願力之道に乗ぜよとなり。

【二五】至誠心に就いて 難易對 彼此對 去來對 毒藥對 内外對

難とは三業修善不真實之心也

易とは如來願力廻向之心也

【二六】彼此對

彼とは淨邦也 此とは穢國也

【二七】去來對

去とは釋迦佛也 來とは彌陀也

【二八】毒藥對

毒とは善惡雜心也 藥とは純一專心也

【二九】内外對

内外道外佛教 内聖道外淨土 内疑情外信心 内惡性外善性

内邪外正 内虛外實 内非外是 内假外真 内難外專 内愚外賢

賢 12 内假外真 13 内退外進 14 内疎外親 15 内遠外近 16 内迂外直 17 内違  
 外隨 18 内逆外順 19 内輕外重 20 内淺外深 21 内苦外樂 22 内毒外藥 23 内  
 怯弱外強剛 24 内懈怠外勇猛 25 内間斷外無間 26 内自力外他力

凡そ心に就いて 二種の三心有り、

一には自利の三心 二には利他の三信なり。

【一】又二種の往生有り、

一には即往生 二には便往生。

【二】竊に『觀經』の三心往生を按ずれば 是れ則ち諸機自力各別  
 之三心也 『大經』の三信に歸せんが爲也 諸機を勸誘して三信に  
 通入せしめんと欲ふ也。

三信とは斯れ則ち金剛の眞心不可思議の信心海也

亦即往生とは斯れ則ち難思議往生眞の報土也

便往生とは即ち是れ諸機各別の業因果成の土なり 胎宮邊地懈  
 慢界雙樹林下往生なり 亦難思議往生也と

10 應に知るべし。

建長七歲乙卯八月廿七日書之

愚禿親鸞 八十三歲

内苦外樂 内毒外藥 内怯弱外強剛  
 内懈怠外勇猛 内間斷外無間  
 内自力外他力  
 凡就心有二種三心、  
 一者自利三心 二者利他三信  
 又有二種往生、  
 一者即往生 二者便往生  
 竊按觀經三心往生者、是則諸機自力各  
 別之三心也、爲歸大經三信也、勸誘諸  
 機欲使通入三信也、三信者斯則金剛  
 眞心不可思議信心海也、亦即往生者斯  
 則難思議往生眞報土也、便往生者、即是  
 諸機各別業因果成土、胎宮邊地懈慢界  
 雙樹林下往生、亦難思議往生也、應知。

建長七歲乙卯八月廿七日書之

愚禿親鸞 八十三歲

入出二門偈頌

愚禿親鸞作

- 1 世親菩薩は大乗
- 2 一心に盡十方の
- 3 無礙の光明は大慈悲なり、
- 4 彼の世界を觀すれば邊際無し、
- 5 五には佛法不思議。
- 6 二種の不思議力有り、
- 7 一には業力、謂はく法藏
- 8 二には正覺 阿彌陀
- 9 女人根缺二乗の種は、
- 10 如來淨華の諸の聖衆は、
- 11 諸機は本則ち三三の品なれども
- 12 同一に念佛して別道無ければなり、
- 13 猶し溜灑の一味なるが如き也。
- 14 修多羅眞實功德に依つて、
- 15 不可思議光如來に歸命したまへり。
- 16 斯の光明は即ち諸佛の智なり。
- 17 究竟廣大にして虚空の如し。
- 18 此の中の佛土不思議に
- 19 斯れ安樂之至徳を示す。
- 20 大願業力の成就する所。
- 21 法王の善力に攝持せられたり。
- 22 安樂淨利には永く生ぜず。
- 23 法藏正覺の華より化生す。
- 24 今は一二之殊異無し。

世親菩薩依大乗 修多羅眞實功德  
 一心歸命盡十方 不可思議光如來  
 無礙光明大慈悲 斯光明即諸佛智  
 觀彼世界無邊際 究竟廣大如虚空  
 五者佛法不思議 此中佛土不思議  
 有二種不思議力 斯示安樂之至徳  
 一者業力謂法藏 大願業力所成就  
 二者正覺阿彌陀 法王善力所攝持  
 女人根缺二乗種 安樂淨利永不生  
 如來淨華諸聖衆 法藏正覺華化生  
 諸機本則三三品 今無一二之殊異  
 同一念佛無別道 猶如溜灑一味也

- 25 彼の如來の本願力を觀するに
- 27 一心專念なれば速かに
- 29 菩薩五種の門に入出して、
- 31 不可思議兆載劫に、
- 33 何等をか名けて五念門と爲す。
- 35 云何が禮拜する、身業に禮したまひき。
- 37 諸の羣生を善巧方便して、
- 39 即ち是を入の第一門と名く、
- 41 云何が讚嘆する、口業に讚したまひき。
- 43 如來の光明智相に依りて、
- 45 則ち斯れ無礙光如來の
- 47 是を名けて入の第二門と爲す、
- 49 云何が作願する、心に常に願したまひき。
- 51 蓮華藏世界に入ることを得て、
- 53 是を名けて入の第三門と爲す、
- 55 云何が觀察する、智慧を以て觀したまひき。
- 26 凡愚遇うて空しく過ぐる者無し。
- 28 眞實功德の大寶海を満足せしむ。
- 30 自利利他の行成就したまへり。
- 32 漸次に五種の門を成就したまへり。
- 34 禮と讚と作願と觀察と廻となり。
- 36 阿彌陀佛正遍知、
- 38 安樂國に生ずる意を爲したまひき故に。
- 40 亦是を名けて近門に入ると爲す。
- 42 名義に隨順して佛名を稱せしむ。
- 44 實の如く修し相應せんと欲が故に。
- 46 攝取選擇の本願なるが故なり。
- 48 即ち大會衆の數に入ると獲るなり。
- 50 一心專念にして彼に生ぜん願すれば、
- 52 實の如く奢摩他を修せんと欲するなり。
- 54 亦是を名けて宅門に入ると爲す。
- 56 正念に彼を觀じて、實の如く、

觀彼如來本願力、凡愚遇無空過者、  
 一心專念速滿足、眞實功德大寶海、  
 菩薩入出五種門、自利利他行成就、  
 不可思議兆載劫、漸次成就五種門、  
 何等名爲五念門、禮讚作願觀察廻、  
 云何禮拜身業禮、阿彌陀佛正遍知、  
 善巧方便諸羣生、爲生安樂國意故、  
 即是名爲入第一門、亦是名爲入近門、  
 云何讚嘆口業讚、隨順名義稱佛名、  
 依如來光明智相、欲如實修相應故、  
 則斯無礙光如來、攝取選擇本願故、  
 是名爲入第二門、即獲入大會衆數、  
 云何作願心常願、一心專念願生彼、  
 得入蓮華藏世界、欲如實修奢摩他、  
 是名爲入第三門、亦是名爲入宅門、  
 云何觀察智慧觀、正念觀彼欲如實、

- 57 毗婆舍那を修行せんと欲す故に、
- 59 種種無量の法味樂を受用せしむ。
- 61 亦是を名けて屋門に入ると爲す。
- 63 四種は入の功德を成就したまふ。
- 65 第五は出の功德を成就したまふ。
- 67 云何が廻向する、心に作願したまひき。
- 69 廻向を首と爲て、大悲心を
- 71 彼の土に生じ已りて速に疾く、
- 73 巧方便力成就し已りて、
- 75 應化身を示し神通に遊び、
- 77 即ち是を出の第五門と名く。
- 79 本願力の廻向を以ての故に、
- 81 無礙光佛、因地の時、
- 83 菩薩已に智慧心を成じ、
- 85 妙樂勝眞心を成就して、
- 87 自利と利他との功德を成す。
- 58 彼の所に到る事を得れば、則ち、
- 60 即ち是を入の第四門と名く、
- 62 菩薩の修行成就といふは、
- 64 自利の行成就す、應に知るべし。
- 66 菩薩の出第五門といふは、
- 68 苦惱の一切衆を捨てずして、
- 70 成就することを得たまひき故に、功德を施したまふ。
- 72 奢摩他毗婆舍那を得、
- 74 生死の藪、煩惱の林に入りて、
- 76 教化地に至りて羣生を利す。
- 78 蘭林遊戯地門に入るなり。
- 80 利他の行成就すと、應に知るべし。
- 82 斯の弘誓を發し、此の願を建てたまふ。
- 84 方便心無障心を成じ、
- 86 速かに無上道を成就することを得、
- 88 則ち是を名けて入出門と爲す。

修行毗婆舍那故、得到彼所則受用、  
 種種無量法味樂、即是名爲入第四門、  
 亦是名爲入屋門、菩薩修行成就者、  
 四種成就入功德、自利行成就應知、  
 第五成就出功德、菩薩出第五門者、  
 云何廻向心作願、不捨苦惱一切衆、  
 廻向爲首得成就、大悲心故施功德、  
 生彼土已速疾得、奢摩他毗婆舍那、  
 巧方便力成就已、入生死藪煩惱林、  
 示應化身遊神通、至教化地利羣生、  
 即是名出第五門、入蘭林遊戯地門、  
 以本願力廻向故、利他行成就應知、  
 無礙光佛因地時、發斯弘誓建此願、  
 菩薩已成智慧心、成方便心無障心、  
 成就妙樂勝眞心、速得成就無上道、  
 成自利利他功德、則是名爲入出門、

- 89 婆藪槃頭菩薩の論、
- 91 願力成就を五念と名く。
- 93 衆生よりして言へば、他利と言ふべし。
- 95 如實修行相應とは、
- 97 斯の信心を以て一心と名く。
- 99 煩惱を斷ぜずして涅槃を得しむ。
- 101 淤泥華とは、經に説きて言ふ、
- 103 卑濕の淤泥に蓮華を生ず、
- 105 佛正覺華を生ずるに喩ふ。
- 107 不可思議力を示す、即ち是の
- 109 道綽和尚、解釋して曰く、
- 111 行を起し道を修せんに、一切の衆、
- 113 此に在りて、心を起し行を立つる者は、
- 115 當今は末法、是れ五濁なり、
- 117 今の時に、惡を起し衆罪を造る、
- 119 本弘誓願に名を稱せ令むるは、
- 90 本師曇鸞和尚釋したまへり。
- 92 佛よりして言へば、宜しく利他と言ふべし、
- 94 當に知るべし、今將に佛力を談ぜんとする。
- 96 名義と光明とに隨順するなり。
- 98 煩惱成就の凡夫人、
- 100 則ち斯れ安樂自然の徳なり。
- 102 高原の陸地には蓮を生ぜず、
- 104 此は凡夫、煩惱の泥中に在りて、
- 106 斯れ如來の本弘誓
- 108 入出二門を他力と名く。
- 110 月藏經に言はく、我が末法に、
- 112 未だ一人も獲得する者有らじ、と。
- 114 則ち此れ聖道、自力と名く。
- 116 唯淨土の有りて通入す可し、と。
- 118 恆常なること暴風駛雨の如し。
- 120 是れ穢濁惡の衆生の爲なり。

婆藪槃頭菩薩論 本師曇鸞和尚釋  
 願力成就名五念 佛而言宜言利他  
 衆生而言言他利 當知今將談佛力  
 如實修行相應者 隨順名義與光明  
 以斯信心名一心 煩惱成就凡夫人  
 不斷煩惱得涅槃 則斯安樂自然徳  
 淤泥華者經說言 高原陸地不生蓮  
 卑濕淤泥生蓮華 此喻凡夫在煩惱  
 泥中生佛正覺華 斯示如來本弘誓  
 不可思議力即是 入出二門名他力  
 道綽和尚解釋曰 月藏經言我末法  
 起行修道一切衆 未有二人獲得者  
 在此起心立行者 則此聖道名自力  
 當今末法是五濁 唯有淨土可通入  
 今時起惡造衆罪 恆常如暴風駛雨  
 本弘誓願令稱名 是爲穢濁惡衆生

- 121 是を以て諸佛、淨土を勸たまへり。
- 123 三信相應すれば是れ一心なり。
- 125 若し生ぜずば、是の處無けん。
- 127 生死即ち是れ大涅槃なり、
- 129 善導和尚義解して曰く、
- 131 即ち是を名けて一乘海と爲す、
- 133 即ち是れ圓教の中の圓教なり、
- 135 眞宗に遇ひ回し、信を得るこ難し、
- 137 釋迦諸佛は是れ眞實
- 139 善巧方便を以て我等が
- 141 煩惱を具足せる凡夫人、
- 143 斯の人は即ち凡數の攝に非ず、
- 145 斯の信は最勝希有人、
- 147 安樂土に到れば必ず自然に、
- 122 縱令一生、惡業を造れども、
- 124 一心は淳心なれば如實と名く。
- 126 必ず安樂國に往生するこを得れば、
- 128 則ち易行道なり、他力と名く。
- 130 念佛成佛是れ眞宗なり。
- 132 即ち是を亦菩提藏と名く。
- 134 則ち是れ頓教の中の頓教なり。
- 136 難の中の難、此に過きたるは無し。
- 138 慈悲の父母なり、種種の
- 140 無上の眞實信を發起せ令めたまふ。
- 142 佛の願力に由りて信を獲得す。
- 144 是れ人中の分陀利華なり。
- 146 斯の信は妙好上人なり。
- 148 即ち法性之常樂を證せしむ。

是以諸佛勸淨土 縱令一生造惡業  
 三信相應是一心 一心淳心名如實  
 若不生者無是處 必得往生安樂國  
 生死即是大涅槃 則易行道名他力  
 善導和尚義解曰 念佛成佛是眞宗  
 即是名爲一乘海 即是亦名菩提藏  
 即是圓教中圓教 即是頓教中頓教  
 眞宗回遇難得信 難中之難無過此  
 釋迦諸佛是眞實 慈悲父母以種種  
 善巧方便令發起 我等無上眞實信  
 具足煩惱凡夫人 由佛願力獲得信  
 斯人即非凡數攝 是人中分陀利華  
 斯信最勝希有人 斯信妙好上人  
 到安樂土必自然 即證法性之常樂

入出二門偈頌 七十四行

四六四

淨土三經往生文類

四六五

【一】「大經往生」といふは、<sup>2</sup>如來選擇の本願、不可思議の願海、これを「他力」と申すなり、<sup>3</sup>これ即ち念佛往生の願因によりて、必至滅度の願果をうるなり、<sup>4</sup>現生に正定聚の位に住して、必ず眞實報土に至る、<sup>5</sup>これは阿彌陀如來の往相廻向の眞因なるが故に、無上涅槃の悟を開く、<sup>6</sup>これを「大經」の宗致とす、<sup>7</sup>この故に「大經往生」と申す、<sup>8</sup>また「難思議往生」と申すなり、【二】この如來の往相廻向につきて眞實の行業あり、<sup>2</sup>即ち諸佛稱名の悲願に顯れたり、【三】稱名の悲願は、「大無量壽經」に言はく、「設我得佛、十方世界無量諸佛、不下悉咨嗟稱我名者、不取正覺。」文、<sup>5</sup>【四】稱名信樂悲願成就文、<sup>2</sup>「經」言はく、「十方恆沙諸佛如來、皆共讚嘆無量壽佛威神功德不可思議、諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼國、即得往生、住不退轉、唯除下五逆、誹謗正法。」文、<sup>10</sup>【五】また眞實信心あり、<sup>2</sup>即ち念佛往生の悲願に顯れたり、【六】信樂の悲願は、「大經」に言はく、「設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲下生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。」文、<sup>10</sup>【七】同本異譯の「無量壽如來會」に言はく、「若我證得無上覺、時餘佛刹中諸有情類、聞我名已、所有善根、心心廻向、願生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除下造無間惡業、誹謗正法。」文、



法及諸聖人<sup>上</sup>」文

【八】また眞實證果あり 2 即ち必至滅度の悲願に顯れたり【九】證果の悲願 2 『大經』に言はく 3 『設我得佛 4

國中入天 5 不下住 2 定聚 1 必至滅度者 6 不取正覺<sup>上</sup>』文 6 若不決定成<sup>二</sup>等正覺<sup>一</sup> 證中大涅槃者

【一〇】同本異譯の『無量壽如來會』に言はく 2 『若我成佛 國中有情 4 若不決定成<sup>二</sup>等正覺<sup>一</sup> 證中大涅槃者 5 不取正覺<sup>上</sup>』文

【二】『無量壽如來會』に言はく 2 『他方佛國所有衆生 3 聞無量壽如來名號<sup>一</sup> 能發<sup>二</sup>一念淨信<sup>一</sup> 歡喜愛樂 5

所有善根迴向願<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>無量壽國<sup>一</sup>者 6 隨願<sup>一</sup>皆生得<sup>二</sup>不退轉<sup>一</sup>乃至無上正等菩提<sup>一</sup> 除<sup>下</sup>五無間誹謗正法<sup>一</sup> 及謗聖者<sup>上</sup>』

【三】必至滅度證大涅槃願成就文 2 『大經』に言はく 3 『其有二衆生<sup>一</sup> 4 生<sup>二</sup>彼國<sup>一</sup>者 5 皆悉住<sup>レ</sup>於正定之

聚<sup>一</sup> 所以者何<sup>レ</sup>彼佛國中無諸邪聚及不定聚<sup>一</sup>』文 6 『又『如來會』に言はく 2 『彼國衆生 若當生者 皆悉究<sup>二</sup>究竟<sup>一</sup>無上菩提<sup>一</sup> 到<sup>二</sup>涅槃處<sup>一</sup> 何以故 5 若

邪定聚及不定聚 不能<sup>レ</sup>了知 建<sup>二</sup>立<sup>一</sup>彼因<sup>一</sup>故』<sup>上</sup>抄要 7 『又『如來會』に言はく 2 『彼國衆生 若當生者 皆悉究<sup>二</sup>究竟<sup>一</sup>無上菩提<sup>一</sup> 到<sup>二</sup>涅槃處<sup>一</sup> 何以故 5 若

【二四】この眞實の稱名と、眞實の信樂をえたる人は、即ち正定聚の位に住せしめんと誓ひ給へるなり 2 この正

定聚に住するを「等正覺を成る」とも言へるなり 3 『等正覺』と申すは、即ち補處の彌勒菩薩と同じ位と成る

と説き給へり 4 しかれば『大經』には「次如彌勒」と言へり【二五】『淨土論』に曰く 2 『莊嚴妙聲功德成就者 偈

言此聲 悟深遠 微妙聞十方 故 此云何不思議 5 『經』言 若人但聞<sup>二</sup>彼國土清淨安樂<sup>一</sup> 剋念願<sup>レ</sup>生

亦得<sup>二</sup>往生<sup>一</sup> 即入<sup>二</sup>正定聚<sup>一</sup> 7 此是國土名字爲<sup>二</sup>佛事<sup>一</sup> 安可<sup>二</sup>思議<sup>一</sup> 8 乃至莊嚴眷屬功德成就者 偈言<sup>二</sup>如來淨華

衆正覺華化生<sup>一</sup> 故 10 此云何不思議 11 凡是雜生世界若胎若卵若濕若化眷屬若干苦樂萬品 12 以<sup>二</sup>雜業<sup>一</sup>

故 13 彼安樂國土 莫非下<sup>二</sup>是阿彌陀如來正覺淨華之所化生<sup>一</sup> 14 同一念佛無<sup>二</sup>別道<sup>一</sup> 故 15 遠通夫四海之内

皆爲<sup>二</sup>兄弟<sup>一</sup>也 16 眷屬無量 焉可<sup>二</sup>思議<sup>一</sup> 2 『又言 願<sup>二</sup>往生<sup>一</sup>者 本則<sup>二</sup>三三之品<sup>一</sup> 今無<sup>二</sup>二二之

殊<sup>一</sup> 亦如<sup>二</sup>三三之品<sup>一</sup> 食陵反<sup>一</sup> 味<sup>一</sup> 5 焉可<sup>二</sup>思議<sup>一</sup> 2 『又言 願<sup>二</sup>往生<sup>一</sup>者 本則<sup>二</sup>三三之品<sup>一</sup> 今無<sup>二</sup>二二之

界相勝過<sup>二</sup>三界道<sup>一</sup> 故 此云何不思議 有<sup>二</sup>凡夫人煩惱成就<sup>一</sup> 亦得<sup>レ</sup>生<sup>二</sup>淨土<sup>一</sup> 6 三界繫業畢竟不<sup>レ</sup>牽 7 則

是不斷<sup>二</sup>煩惱<sup>一</sup> 得<sup>二</sup>涅槃<sup>一</sup> 焉可<sup>二</sup>思議<sup>一</sup> 』 已上抄要 8 『又言 願<sup>二</sup>往生<sup>一</sup>者 本則<sup>二</sup>三三之品<sup>一</sup> 今無<sup>二</sup>二二之

【二六】この阿彌陀如來の往相廻向の選擇 本願をみたてまつるなり 2 これを「難思議往生」と申す 3 これを心得

【三】しかれば『無量壽經優婆塞舍願生偈』に曰く云何廻向不捨一切苦惱衆生心常作願廻向爲首得成成就大悲心一故これは『大無量壽經』の宗致とし給へりこれを『難思議往生』と申すなり。

【四】『觀經往生』といふは修諸功德の願により至心發願の誓にいりて萬善諸行の自善を廻向して淨土を祈慕せしむるなりしかれば『無量壽佛觀經』には定善散善三福九品の諸善或は自力の稱名念佛を説きて九品往生を勸めたまへりこれは他力の中に自力を宗教としたまへりこの故に『觀經往生』と申すはこれみな方便化土の往生なりこれを『雙樹林下往生』と申すなり。

【五】至心發願の願『大經』に言はく設我得二佛十方衆生發善提心修諸功德至心發願欲生我國臨壽終時假令不與大眾圍繞現其人前者不取正覺

【六】又『悲華經』大施品言はく願我成阿耨多羅三藐三菩提已其餘無量無邊阿僧祇諸佛世界所有衆生若發阿耨多羅三藐三菩提心修諸善根欲生我界者臨終之時我當下與大眾圍繞現其人前者見我即於我前得一心歡喜以見我故離諸障礙即便捨身來生我界

【七】至心發願の願成就文『大經』に言はく佛告阿難十方世界諸天人民其有下至心願下生彼國上凡有三輩其上輩者捨家棄欲而作沙門發善提心一向專念無量壽佛修諸功德十一願生彼國十二此等衆生臨壽終時無量壽佛與諸大眾一現其人前者乃至阿難其有二衆生欲下於今世一見無量壽佛應發無上菩提之心修二行功德願生彼國一佛語阿難難一五其中輩者

十方世界諸天人民其有下至心願下生彼國一雖不能行作沙門一大修功德上當發無上菩提之心一向專念無量壽佛二十多少修善奉持齋戒起立塔像飯食沙門懸燈燃香散華燒香以此廻向願生彼國二十其人臨終乃至具如真佛與諸大眾一現其人前者乃至佛告阿難其下輩者二十十方世界諸天人民其有下至心願下生彼國一假使不能行作諸功德上當發無上菩提之心一向專念無量壽佛願生彼國一若聞深法歡喜信樂不生疑惑乃至一念念於彼佛一以至誠心願生彼國一此人臨終夢見二彼佛亦得往生一功德智慧次如二中輩者一也』已上略抄

【七】『大經』に言はく設我得二佛國中菩薩乃至少功德者不能知見其道場樹無量光色高四百萬里上者不取正覺』文

【八】道場樹の願成就の文『經』に言はく又無量壽佛其道場樹高四百萬里其本周圍五十由旬枝葉四布二十萬里一切衆寶自然合成以二月光摩尼持海輪寶衆寶之王而莊嚴之周匝椽間垂二寶瓔珞百千萬色種種異變無量光炎照耀無極一珍妙寶網羅覆其上乃至一切皆得甚深法忍一住不退轉一三至成佛道一六根清徹無諸惱患』已上略出

【九】首楞嚴院の『要集』に引三感禪師釋一いはく問菩薩處胎經第一一說西方去此閻浮提十二億那由他有二懈慢界乃至發意衆生欲生阿彌陀佛國一者深著懈慢國土不能三前進生阿彌陀佛國一億千萬衆時有二一人能生阿彌陀佛國二云云以此經二準難可得二生一答羣疑論引二善導和尚前文一而

釋三此難<sup>11</sup>又自助<sup>12</sup>成云<sup>13</sup>此經下文言<sup>14</sup>何以故<sup>15</sup>皆由懈慢<sup>16</sup>執心不牢固<sup>17</sup>是知<sup>18</sup>難修<sup>19</sup>之者爲下執心不牢之人<sup>20</sup>故生<sup>21</sup>懈慢<sup>22</sup>國<sup>23</sup>也<sup>24</sup>若不<sup>25</sup>難修<sup>26</sup>專行<sup>27</sup>此業<sup>28</sup>此即執心牢固<sup>29</sup>定生<sup>30</sup>二極樂國<sup>31</sup>乃至<sup>32</sup>又報淨土<sup>33</sup>生者極少<sup>34</sup>淨土中生者不<sup>35</sup>少<sup>36</sup>故經別說<sup>37</sup>實不相違<sup>38</sup>也<sup>39</sup>已上略出

【三〇】是等の文の意にて、「雙樹林下往生」と申すことを、よく心得たまふべし。

【三一】「彌陀經往生」といふは、植諸徳本の誓願によりて不果遂者の眞門にいり、善本徳本の名號を選びて萬善諸行の少善をさしおく、然りと雖も、定散自力の行人は、不可思議の佛智を疑惑して信受せず、如來の尊號を己が善根として、自ら淨土に廻向して果遂の誓をたのむ、不可思議の名號を稱念しながら、不可生不可説不可思議の大悲の誓願を疑ふ、その罪ふかく重くして、七寶の牢獄にいましめられて、いのち五百歳の間、自在なること能はず三寶をみたてまつらず、仕へたてまつることなしと、如來は説き給へり、然れども如來の尊號を稱念する故に、胎宮にとゞまる、徳號によるが故に、「難思往生」と申すなり、不可思議の誓願疑惑する罪によりて「難思議往生」とは申さずと知るべきなり。

【三二】植諸徳本の願文、「大經」に言はく、「設我得佛、十方衆生、聞我名號、係念我國、植諸徳本、乃至一心廻向、欲生我國、不<sup>1</sup>果遂<sup>2</sup>者、不<sup>3</sup>取<sup>4</sup>正覺<sup>5</sup>。」文

【三三】同本異譯「無量壽如來會」に言はく、「若我成佛、無量國中所有衆生、聞説我名、以己善根、廻向極樂、若不<sup>1</sup>生<sup>2</sup>者、不<sup>3</sup>取<sup>4</sup>菩提<sup>5</sup>。」文

【三四】願成就の文、「經」に言はく、「其胎生者、所處宮殿、或百由旬、或五百由旬、各於其中、受二

諸快樂、如<sup>1</sup>切利天上<sup>2</sup>、亦皆自然<sup>3</sup>、爾時慈氏菩薩白佛言、世尊、何因何緣、彼國人民、胎生化生、佛告慈氏、若有衆生、以<sup>4</sup>疑惑心<sup>5</sup>修<sup>6</sup>諸功德<sup>7</sup>、願<sup>8</sup>生<sup>9</sup>彼國<sup>10</sup>、不<sup>11</sup>下<sup>12</sup>佛智<sup>13</sup>、不<sup>14</sup>思議智<sup>15</sup>、不<sup>16</sup>稱智<sup>17</sup>、大乘廣智<sup>18</sup>、無等無倫最上勝智<sup>19</sup>、於<sup>20</sup>此諸智<sup>21</sup>、疑惑不信<sup>22</sup>、猶信<sup>23</sup>罪福<sup>24</sup>、修<sup>25</sup>習善本<sup>26</sup>、願<sup>27</sup>生<sup>28</sup>其國<sup>29</sup>、此諸衆生<sup>30</sup>、生<sup>31</sup>彼宮殿<sup>32</sup>、壽<sup>33</sup>五百歲<sup>34</sup>、常不見<sup>35</sup>佛<sup>36</sup>、不<sup>37</sup>聞<sup>38</sup>經法<sup>39</sup>、不見<sup>40</sup>菩薩聲聞聖衆<sup>41</sup>、是故彼國土謂之胎生<sup>42</sup>、乃至<sup>43</sup>彌勒當<sup>44</sup>知<sup>45</sup>、彼化生者<sup>46</sup>、智慧勝<sup>47</sup>故<sup>48</sup>、其胎生者<sup>49</sup>皆無<sup>50</sup>智慧<sup>51</sup>、乃至<sup>52</sup>佛告彌勒<sup>53</sup>、<sup>54</sup>譬如<sup>55</sup>轉輪聖王<sup>56</sup>、有<sup>57</sup>二七寶牢獄<sup>58</sup>、種種莊嚴<sup>59</sup>、張<sup>60</sup>設牀帳<sup>61</sup>、懸<sup>62</sup>諸繡幡<sup>63</sup>、若<sup>64</sup>諸小王子<sup>65</sup>、得罪<sup>66</sup>於王<sup>67</sup>、輒<sup>68</sup>內<sup>69</sup>二彼獄中<sup>70</sup>、繫<sup>71</sup>以<sup>72</sup>金鎖<sup>73</sup>、乃至<sup>74</sup>佛告彌勒<sup>75</sup>、此諸衆生、亦復如是<sup>76</sup>、以<sup>77</sup>疑惑佛智<sup>78</sup>故<sup>79</sup>、生<sup>80</sup>彼胎宮<sup>81</sup>、乃至<sup>82</sup>若此衆生<sup>83</sup>、識<sup>84</sup>其本罪<sup>85</sup>、深自悔責<sup>86</sup>、求<sup>87</sup>離<sup>88</sup>二彼處<sup>89</sup>、乃至<sup>90</sup>彌勒當<sup>91</sup>知<sup>92</sup>、其有<sup>93</sup>二菩薩<sup>94</sup>、生<sup>95</sup>二疑惑<sup>96</sup>者<sup>97</sup>、爲<sup>98</sup>失<sup>99</sup>二大利<sup>100</sup>、略抄

【三五】又「無量壽如來會」に言はく、「佛告彌勒、若有衆生、隨<sup>1</sup>於<sup>2</sup>疑悔<sup>3</sup>、積<sup>4</sup>集善根<sup>5</sup>、希<sup>6</sup>下<sup>7</sup>求<sup>8</sup>佛智<sup>9</sup>、普<sup>10</sup>徧<sup>11</sup>智<sup>12</sup>、不<sup>13</sup>思議<sup>14</sup>智<sup>15</sup>、無<sup>16</sup>等<sup>17</sup>智<sup>18</sup>、威<sup>19</sup>徳<sup>20</sup>智<sup>21</sup>、廣<sup>22</sup>大<sup>23</sup>智<sup>24</sup>、於<sup>25</sup>自<sup>26</sup>善<sup>27</sup>根<sup>28</sup>、不<sup>29</sup>能<sup>30</sup>生<sup>31</sup>信<sup>32</sup>、以<sup>33</sup>此<sup>34</sup>因<sup>35</sup>緣<sup>36</sup>、於<sup>37</sup>二<sup>38</sup>百<sup>39</sup>歲<sup>40</sup>、住<sup>41</sup>二<sup>42</sup>宮<sup>43</sup>、殿<sup>44</sup>中<sup>45</sup>、乃至<sup>46</sup>阿<sup>47</sup>逸<sup>48</sup>多<sup>49</sup>、汝<sup>50</sup>觀<sup>51</sup>二<sup>52</sup>殊<sup>53</sup>勝<sup>54</sup>智<sup>55</sup>者<sup>56</sup>、彼<sup>57</sup>因<sup>58</sup>廣<sup>59</sup>慧<sup>60</sup>力<sup>61</sup>、故<sup>62</sup>受<sup>63</sup>二<sup>64</sup>彼<sup>65</sup>化<sup>66</sup>生<sup>67</sup>、於<sup>68</sup>蓮<sup>69</sup>華<sup>70</sup>中<sup>71</sup>、結<sup>72</sup>跏<sup>73</sup>趺<sup>74</sup>座<sup>75</sup>、汝<sup>76</sup>觀<sup>77</sup>二<sup>78</sup>下<sup>79</sup>劣<sup>80</sup>之<sup>81</sup>輩<sup>82</sup>、乃至<sup>83</sup>不<sup>84</sup>能<sup>85</sup>修<sup>86</sup>二<sup>87</sup>習<sup>88</sup>諸<sup>89</sup>功<sup>90</sup>徳<sup>91</sup>、故<sup>92</sup>無<sup>93</sup>因<sup>94</sup>奉<sup>95</sup>事<sup>96</sup>無<sup>97</sup>量<sup>98</sup>壽<sup>99</sup>佛<sup>100</sup>、是<sup>101</sup>諸<sup>102</sup>人<sup>103</sup>等<sup>104</sup>、皆<sup>105</sup>爲<sup>106</sup>下<sup>107</sup>昔<sup>108</sup>緣<sup>109</sup>二<sup>110</sup>疑<sup>111</sup>悔<sup>112</sup>、所<sup>113</sup>申<sup>114</sup>致<sup>115</sup>上<sup>116</sup>、乃至<sup>117</sup>佛<sup>118</sup>告<sup>119</sup>彌<sup>120</sup>勒<sup>121</sup>、<sup>122</sup>如<sup>123</sup>是<sup>124</sup>、若<sup>125</sup>有<sup>126</sup>下<sup>127</sup>隨<sup>128</sup>於<sup>129</sup>疑<sup>130</sup>悔<sup>131</sup>、二<sup>132</sup>種<sup>133</sup>諸<sup>134</sup>善<sup>135</sup>根<sup>136</sup>、希<sup>137</sup>求<sup>138</sup>佛<sup>139</sup>智<sup>140</sup>、乃<sup>141</sup>至<sup>142</sup>廣<sup>143</sup>大<sup>144</sup>智<sup>145</sup>、於<sup>146</sup>二<sup>147</sup>自<sup>148</sup>善<sup>149</sup>根<sup>150</sup>、不<sup>151</sup>能<sup>152</sup>生<sup>153</sup>信<sup>154</sup>、由<sup>155</sup>下<sup>156</sup>聞<sup>157</sup>二<sup>158</sup>佛<sup>159</sup>名<sup>160</sup>、起<sup>161</sup>中<sup>162</sup>信<sup>163</sup>、心<sup>164</sup>上<sup>165</sup>故<sup>166</sup>、雖<sup>167</sup>生<sup>168</sup>二<sup>169</sup>彼<sup>170</sup>國<sup>171</sup>、於<sup>172</sup>蓮<sup>173</sup>華<sup>174</sup>中<sup>175</sup>、不<sup>176</sup>得<sup>177</sup>出<sup>178</sup>現<sup>179</sup>、<sup>180</sup>彼<sup>181</sup>等<sup>182</sup>衆<sup>183</sup>生<sup>184</sup>、處<sup>185</sup>二<sup>186</sup>華<sup>187</sup>胎<sup>188</sup>中<sup>189</sup>、猶<sup>190</sup>下<sup>191</sup>如<sup>192</sup>園<sup>193</sup>苑<sup>194</sup>宮<sup>195</sup>殿<sup>196</sup>之<sup>197</sup>想<sup>198</sup>上<sup>199</sup>、乃<sup>200</sup>至<sup>201</sup>略<sup>202</sup>出

【云】光明寺の釋に云く 2「含レ華 未レ出 3或 生二邊 界一 4或 墮二宮 胎一」已上  
 【云】懷興師云 2「由レ疑ニ 佛智ニ 雖レ生ニ 彼 國一 而在二邊地一 不被二聖化事一 3若 胎生宜ニ之 重 捨一」已上  
 【云】是等の眞文にて、難思往生」と申すことを、よくよく心得させ給ふべし。

康元二年三月二日書寫之

愚禿親鸞八十五歳

### 淨土三經往生文類

### 尊號眞像銘文

【一】「大無量壽經言」といふは四十八願を説きたまへる經なり 2「設我得佛」といふはもしわれ佛になりたらんときといふ御ことばなり 3「十方衆生」といふは十方のよろづの衆生といふなり 4「至心信樂」といふは「至心」は眞實とまをすなり、「眞實」とまをすは如來の御誓の眞實なるを「至心」とまをすなり 5煩惱具足の衆生はもとより眞實の心なし、清淨の心なし、濁惡邪見の故なり 6「信樂」といふは如來の本願眞實にましますを一心なく深く信じて疑はざれば信樂と申すなり 7この至心信樂は即ち十方衆生をしてわが眞實なる誓願を信樂すべしと勸めたまへる御誓の至心信樂なり、凡夫自力のこゝろにはあらず 8「欲生我國」といふは他力の至心信樂をもて安樂淨土に生れんと思へとなり 9「乃至十念」と申すは如來の誓の名號を稱へんことを勸めたまふに遍數の定まりなき程をあらはし、時節を定めざることを衆生に知らせんと思召して、「乃至」の言を「十念」の名にそへて誓ひたまへるなり 10如來より御誓を賜はりぬるには尋常の時節をとりて臨終の稱念を待つべからず、ただ如來の至心信樂を深くたのむべし 11この眞實信心を得ん時攝取不捨の心光に入りぬれば正定聚の位に定まると見えたり 12「若不生者不取正覺」といふは「若不生者」はもしむまればといふ言なり 13「不取正覺」は佛に成らじと誓ひたまへる御のりなり 14この本願のやうは「唯信鈔」によく見えたり 15「唯信」と申すは即ちこの眞實信樂を一向にとるこゝろを申すなり 16「唯除五逆誹謗正法」といふは「唯除」はたゞのぞくといふ語な

り、五逆の罪人を嫌ひ謗法の重き咎を知らせんとなり<sup>17</sup>この二つの罪の重きことを示して十方一切の衆生皆漏れず往生すべしと知らせんとなり【三】其佛本願力といふは彌陀の本願力と申すなり<sup>2</sup>聞名欲往生といふは「聞」といふは如來の誓の御名を信ずと申すなり<sup>3</sup>欲往生といふは安樂淨刹に生まれんとおもへとなり<sup>4</sup>「皆悉到彼國」といふは御誓の御名を信じて生れんと欲ふ人はみな漏れずかの淨土にいたると申す御ことなり<sup>5</sup>「自致不退轉」といふは「自」はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからひに非ずしからしめて不退の位に到らしむとなり、自然といふことばなり<sup>7</sup>「致」といふはいたるといふむねとすといふ<sup>8</sup>如來の本願の御名を信する人は自然に不退の位にいたらしむるを旨とすと思へとなり<sup>9</sup>「不退」といふは佛に必ず成るべき身と定まる位なり<sup>10</sup>是れ即ち正定聚の位に到るを旨とすと説きたまへるみのりなり【三】必得超絶去、往生安養國」といふは<sup>2</sup>「必」はかならずといふ、かならずといふは自然といふこと、ろなり<sup>3</sup>「得」はえたりといふ<sup>4</sup>「超」はこえてといふ<sup>5</sup>「絶」はたちはなるといふ<sup>6</sup>「去」はすつといふゆくといふさるといふ<sup>7</sup>娑婆世界をたちすて流轉生死をこえはなれて安養淨土に往生を得べしとなり<sup>8</sup>「安養」といふは安樂淨土なり<sup>9</sup>「横截」五惡趣・惡趣自然閉」といふは<sup>10</sup>「横」はよこさまといふ<sup>11</sup>よこさまといふは如來の願力を信する故に、行者のはからひに非ず、五惡趣を自然にたちすて四生をはなる、を「横」といふ<sup>12</sup>「他力」と申すなり<sup>13</sup>これを「横超」といふなり<sup>14</sup>「横」は堅に對することばなり、「超」は迂に對することばなり<sup>15</sup>「堅」と「迂」とは自力聖道のこゝろなり<sup>16</sup>「横」と「超」は即ち他力眞宗の本意なり<sup>17</sup>「截」といふはきるといふ、五惡趣のきづなをよこさまにきるなり<sup>18</sup>「惡趣自然閉」といふは願力に歸命すれば五道生死を閉づる故に自然閉といふなり<sup>19</sup>「閉」は

四七四

四七五

とづといふ、本願の業因にひかれて自然に安樂に生る、なり<sup>20</sup>昇道無窮極」といふは<sup>21</sup>「昇」はのほるといふ、のほるといふは無上涅槃にいたる、これを昇といふなり<sup>22</sup>「道」は大涅槃道なり<sup>23</sup>「無窮極」といふはきはまりなしとなり<sup>24</sup>「易往而無人」といふは<sup>25</sup>「易往」はゆきやすしとなり、本願力に乗すれば本願の實報土に生る、こと疑なければ往き易きなり<sup>26</sup>「無人」といふはひとなしといふ、ひとなしといふは眞實信心の人はありがたき故に實報土に生る、人稀なり<sup>27</sup>然れば源信和尚は「報土に生る、人は多からず、化土に生る、人は少からず」とのたまへり<sup>28</sup>「其國不逆違・自然之所牽」といふは<sup>29</sup>「其國」はそのくにといふ<sup>30</sup>「不逆違」はさかさまならずといふたがはずとなり<sup>31</sup>「逆」はさかさまといふ、「違」はたがふといふなり<sup>32</sup>眞實信を得たる人は大願業力の故に自然に淨土の業因たがはずして彼の業力にひかる、故に往き易く無上大涅槃にのほるにきはまりなしとのたまへるなり<sup>33</sup>然れば「自然之所牽」と申すなり<sup>34</sup>他力の至心信樂の業因の自然にひくなりとなり。

【四】「娑敷盤豆菩薩論曰」といふは<sup>2</sup>「娑敷盤豆」は天然の語なり、震旦には天親菩薩と申す、また今は世親菩薩と申す<sup>3</sup>「論曰」は世親菩薩彌陀の本願を釋したまへる御言を「論」といふなり<sup>4</sup>「曰」はこゝろをあらはす語なり<sup>5</sup>この論をば「淨土論」といふ、また「往生論」といふなり<sup>6</sup>「世尊我一心」といふは<sup>7</sup>「世尊」は釋迦如來なり<sup>8</sup>「我」といふは世親菩薩のわが身とのたまへるなり<sup>9</sup>「一心」といふは教主世尊のみことを一心なく疑なしとなり<sup>10</sup>即ち是れまことの信心なり<sup>11</sup>「歸命盡十方無礙光如來」と申すは<sup>12</sup>「歸命」は南無なり、歸命と申すは如來の勅命に順ひたてまつるなり<sup>13</sup>「盡十方無礙光如來」と申すは即ち阿彌陀如來なり<sup>14</sup>この如來は光明なり<sup>15</sup>「盡十方」といふは盡はつくすといふこと、くといふ、十方世界を盡して悉くみちたまへるなり<sup>16</sup>「無

三

礙」といふはさはることなしとなり、衆生の煩惱惡業に礙へられざるなり<sup>17</sup>「光如來」と申すは阿彌陀佛なり  
 18この如來は即ち「不可思議光佛」と申す<sup>19</sup>この如來は智慧の相なり、十方微塵刹土にみちたまへりと知るべ  
 しとなり<sup>20</sup>「願生安樂國」といふは世親菩薩彼の無礙光佛の願行を信じて安樂國に生まれんとねがひたまへ  
 るなり<sup>21</sup>「我依修多羅眞實功德相」といふは<sup>22</sup>「我」は天親論主のわれとなりのたまへる御語なり<sup>23</sup>「依」はよる  
 といふ、修多羅によるとなり<sup>24</sup>「修多羅」は天竺の語、佛の經典を申すなり<sup>25</sup>佛教に大乘あり、また小乘あり  
 皆修多羅と申す<sup>26</sup>今修多羅と申すは大乘なり、小乘には非ず<sup>27</sup>今の三部の經典は大乘修多羅なり<sup>28</sup>この三部大  
 乘に依るとなり<sup>29</sup>「眞實功德相」といふは誓願の尊號なり<sup>30</sup>「說願偈總持」といふは<sup>31</sup>本願のこゝろをあらはす  
 語を「偈」といふなり<sup>32</sup>「總持」といふは智慧なり、無礙光の智を總持と申すなり<sup>33</sup>「與佛教相應」といふはこ  
 の論のこゝろは釋尊の教勅彌陀の誓願に相かなへりとなり<sup>34</sup>「觀彼世界相勝過三界道」といふは<sup>35</sup>彼の安樂世  
 界をみそなはずに邊際なきこと虚空の如し、廣く大きなこと虚空の如しとなり<sup>36</sup>「觀佛本願力遇無空過者」  
 といふは<sup>37</sup>如來の本願力をみそなはずに願力を信する人はむなくこゝ、にとまらずとなり<sup>38</sup>「能令速滿足功  
 徳大寶海」といふは<sup>39</sup>「能」はよしといふ<sup>40</sup>「令」はせしむといふ<sup>41</sup>「速」はすみやかにとしといふ<sup>42</sup>よく本願  
 力を信樂する人はすみやかにとく功德の大寶海を信者のその身に満足せしむるなり<sup>43</sup>如來の功德の際なく廣く  
 大きなことを大海の水のみちみてるが如しとたとへたてまつれるなり。  
 【三】光明寺善導和尚の銘にいはいはく「智榮」と申すは震旦の聖人なり<sup>3</sup>善導の別徳をほめたまうて曰く、善導  
 は阿彌陀佛の化身なりとのたまへり<sup>4</sup>「稱佛六字」といふは南無阿彌陀佛の六字をとふなり<sup>5</sup>「即嘆佛」

四七六

といふはすなはち南無阿彌陀佛を稱ふるはほめたてまつる語になるとなり<sup>6</sup>また「即懺悔」といふは南無阿彌  
 陀佛を稱ふるはすなはち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになると申すなり<sup>7</sup>「即發願廻向」といふは南無阿  
 彌陀佛を稱ふるはすなはち安樂淨土に往生せんと欲ふになるとなり<sup>8</sup>「一切善根莊嚴淨土」といふは、阿彌陀  
 の三字に一切善根ををさめたまへる故に、名號を稱ふれば淨土を莊嚴するになると知るべしとなり<sup>9</sup>智榮禪師  
 善導をほめたまへるなり。

四七七

【四】日本源空聖人の銘にいはいはく「四明山權律師劉官讀」<sup>1</sup>「普勸道俗念彌陀佛」といふは<sup>4</sup>「普勸」はあまねくす  
 すむとなり<sup>5</sup>「道俗」は道に一人あり俗に一人あり<sup>6</sup>道の一人は<sup>1</sup>には僧二人には比丘尼なり<sup>7</sup>俗に一人は<sup>1</sup>に  
 は佛の御法を信じ行する男なり、二人には佛の御法を信じ行する女なり<sup>8</sup>「念彌陀佛」と申すは尊號を稱念する  
 なり<sup>9</sup>「能念皆見化佛菩薩」と申すは<sup>10</sup>「能念」はよく尊號を念すといふ、よく念すといふは深く信するなり<sup>11</sup>  
 「皆見」といふは化佛菩薩を見んと欲ふ人はみな見たまつるとなり<sup>12</sup>「化佛菩薩」と申すは彌陀の化佛觀音勢  
 至等の聖衆なり<sup>13</sup>「明知稱名」と申すは、あきらかにしりぬ、佛の名をとふれば往生すといふことを要術と  
 いふ<sup>14</sup>往生の要には如來の名を稱ふるに過ぎたることなしとなり<sup>15</sup>「宜哉源空」と申すは「宜哉」はよしといふな  
 り、「源空」は聖人の御名なり<sup>16</sup>「慕道化物」といふは「慕道」は無上道をねがひしたふといふなり<sup>17</sup>「化物」と  
 いふは衆生を利益すと申すなり<sup>18</sup>「信珠在心」といふは金剛の信心をめでたきたまに譬へたまふ<sup>19</sup>信心のたま  
 をこゝろに得たる人は生死の間に惑はざる故に心照迷境といふなり<sup>20</sup>「心照迷境」といふは信心のたまをもて  
 愚癡のやみを拂ひ明かにてらすとなり<sup>21</sup>「疑雲永晴」といふは「疑雲」は願力をうたがふ心くもに譬へたるな

り 22「永晴」といふは疑ふ心の雲をながくはらしぬれば安樂淨土へ必ず生るなり 23無礙光佛の攝取不捨の心光をもて信心を得たる人を常に照らしたまふ故に佛光圓頂といへり 24「佛光圓頂」といふは佛心のひかり明かに信心の人のいたゞきを常に照らしたまふとほめたまへるなり。

【七】善導和尚のたまはく 2「言南無者」といふは、「南無」は即ち歸命と申すことなり 3「歸命」は即ち釋迦彌陀の二尊の勅命に順ひ召にかなふと申す語なり 4この故に「即ち歸命」とのたまへり 5「亦是發願廻向之義」といふは二尊の召に順うて安樂淨土に生れんと願ふ心なりとのたまへるなり 6「言阿彌陀佛者」といふは「即ち其行」とのたまへり 7「即其行」はこれすなはち法藏菩薩の選擇の本願なり 8安樂淨土の正定の業因なりとのたまへる意なり 9「以斯義故」といふはこの義をもての故にといへる意なり 10「必得往生」といふはかならず往生をえしむといふなり 11「必」はかならずといふ、かならずといふは自然のこゝろを顯はす、自然ははじめてはからはすとなり。

【八】又曰く 2「言攝生増上縁者」といふは 3「攝生」は十方衆生を誓願にをさめとりたまふと申す意なり 4「如無量壽經四十八願申説」といふは、如來の本願を説きたまへる御言なりと知るべしとなり 5「若我成佛」と申すは法藏菩薩誓ひたまはくもしわれ佛になりたらん時となり 6「十方衆生」といふは十方のよろづの衆生なり、即ち我等なり 7「願生我國」といふは安樂淨土に生まれんとねがへとなり 8「稱我名字」といふはわれ佛にならんにわがなをとなへられんとなり 9「下至十聲」といふは名字をとなへられんこと下とこゝろせんものとなり 10「下至」といふは十聲に餘れるもの一念二念間名のものを往生に漏さず嫌はぬことをあらはし示すとなり

四七九

11「乘我願力」といふは 12「乘」はのるべしといふ、また智なり 13智といふは願力にのせたまふと知るなり、願力にのせて安樂淨土に生れしむるとなり 14「若不生者不取正覺」といふは誓を信じたるものもし本願の實報土に生まれずば佛に成らじと誓ひたまへる御法なり 15「此即願往生行人」といふはこれすなはち往生をねがふひとといふなり 16「命欲終時」といふはいのちをばらんとせんときといふ 17「願力攝得往生」といふは大願業力攝取して往生をえしむといへる意なり 18既に尋常のとき信樂を得たる人なり、臨終の時始めて信心決定して攝取にあづかるものにあらず 19日頃彼の心光に攝護せられ參らせたる金剛心を得たる人なれば、正定聚に住する故に 20臨終の時にあらず、像て尋常の時よりつねに攝護して捨てたまはざれば「攝得往生」と申すなり 21この故に「攝生増上縁」となづくるなり 22又まことに尋常の時より信なからん人は、日頃の稱念の功によりて、最後臨終の時始めて善知識の勸にあうて信心を得ん時、願力攝して往生を得るものもあるべしとなり 23臨終の來迎を待つものは斯の如くなるべしと。

【九】又曰く 2「言護念増上縁者」といふはまことの信心を得たる人をこの世にて常にまもりたまふと申すことなり 3「但有專念阿彌陀佛衆生」といふは一向に一心なく彌陀佛を念じたてまつると申すなり 4「彼佛心光常照是人」といふは「彼」はかのといふ 5「佛心光」は無礙光佛の御こゝろと申すなり 6「常照」はつねにてらすと申す 7「つね」といふは時をきらす日をへだてず處をわかすまことの信心ある人をばつねにてらしたまふとなり 8「てらす」といふは彼の佛心光に攝め取りたまふとなり 9「佛心光」は即ち阿彌陀佛の御心に攝めたまふとしるべし 10「是人」は信心を得たるひとなり 11「常にまもりたまふ」と申すは天魔波旬に破られず惡鬼惡神に亂ら

れず、攝護不捨したまふ故なり 12「攝護不捨」といふはをさめまもりてすてすとなり 13「總不論照攝餘雜業行者」といふは「總」はすべてといふみなどいふ、總て雜行雜修の人をば皆照さず攝め護りたまはずとなり 15「照し護りたまはず」と申すは攝取不捨の利益にあづからずとなり 16「本願の行者に非ざる故なり」と知るべし 17然れば「攝護不捨」と釋したまはず 18「現生護念増上縁」といふはこの世にて護りたまふと申すみことなり 19「増上縁」はすぐれたる強縁なりとなり。

【一〇】首楞嚴院源信和尚ののたまはく 2「我亦在彼攝取之中」といふはわれまたかの攝取のなかにありとのたまへるなり 3「煩惱障眼」といふは我等煩惱にまなこさへらるとなり 4「雖不能見」といふは煩惱のまなこにて佛をみたてまつることあたはずといへどもといふなり 5「大悲無倦」といふは大慈大悲の御惠ものうきことましまさずと申すなり 6「常照我身」といふは「常」はつねにといふ「照」は無礙の光明信心の人をつねにてらしたまふとなり 7「つねにてらす」といふはつねにまもりたまふとなり 8「我身」はわがみを大慈大悲心のうきことなくつねにまもりたまふと思へとなり 9「攝取不捨」のこゝろをあらはしたまふ 10「念佛衆生攝取不捨」の文を釋したまへるなり。

【一一】日本源空聖人ののたまはく 2「選擇本願念佛集」にはく 3「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」といふは、安養淨利の往生の正因は念佛を本とすと申すみことなり 4「正因」といふは、淨土へむまる、たねと申すなり。 【一二】又曰く 2「夫速欲離生死」といふは、それをすみやかにとく生死をはなれんとおもへといふなり 3「二種勝法中且闍聖道門」といふは 4「二種勝法」は聖道・淨土の二門なり 5「且闍聖道門」は、且闍はしばらくさしおけとな

り、しばらく聖道門をさしおくべしとなり 6「選入淨土門」といふは、選入はえらびていれとなり、よろづの善法の中にえらびて淨土門にいるべしとなり 7「欲入淨土門」といふは、淨土門にいらんとおもはゞといふなり 8「正雜二行中且拋諸雜行」といふは、正雜二行ふたつのなかにしばらくもろくの雜行をなけすてさしおくべしとなり 9「選應歸正行」といふは、えらびて正行に歸すべしとなり 10「欲修於正行正助二業中猶傍於助業」といふは、正行を修せんとおもはゞ正業・助業ふたつのなかに助業をさしおくべしとなり 11「選應專正定」といふは、えらびて正定の業を一心なく修すべしとなり 12「正定之業者即稱佛名」といふは、正定の業因はすなはちこれ佛名を稱するなり 13「正定の因」といふは、必ず無上涅槃のさとりを開いたねと申すなり 14「稱名必得生依佛本願故」といふは、佛のみなを稱するはかならず安養淨土に往生をうるなり 15「佛の本願」によるが故なりとのたまへり。

【一三】又曰く 2「當知生死之家」といふは、まさにしるべし生死のいへといふなり 3「以疑爲所止」といふは、大願の不思議力をうたがふ心をもて六道四生二十五有にとまるとなり、今に迷ふと知るべしとなり 4「涅槃之城」といふは、安養淨利を申すなり、これを涅槃のみやことは申すなり 5「以信爲能入」といふは、眞實の信心をえたる人のみ本願の實報土によくいと知るべしとなり。

【一四】法印聖覺和尚ののたまはく 2「夫根有利鈍者」といふは、それ衆生の根性に利鈍ありとなり 3「利」といふは心のとき人なり、「鈍」といふは心のにぶき人なり 4「教有漸頓」といふは、衆生の根性にしたがうて佛教に漸頓ありとなり 5「漸」はやうやく佛道を修して三祇百大劫を経て佛になるなり、「頓」はこの娑婆世界にして此身



にて忽ちに佛になると申すなり 是れ即ち佛心眞言法華華嚴等のさとりを開くなり 7「機有奢促者」といふは  
 機に奢促あり 8「奢」はおそきこと、ろなるものあり、「促」はときこと、ろなるものあり 9この故に「行有難易」と  
 いへり、行につきて難あり易ありとなり 10「難」は聖道門自力の行なり、「易」は淨土門他力の行なり 11「當知聖  
 道諸門漸教也」といふは、即ち難行なり、また漸教なりと知るべしとなり 12「淨土一宗者」といふは、頓教なり  
 また易行なりと知るべしとなり 13「所謂眞言止觀之行」といふは、眞言は密教なり、止觀は法華なり 14「彌猴情  
 難學」といふは、我等がこゝろをさるの心に譬へたるなり、さるの心の如く定まらずとなり 15この故に眞言法  
 華の行は修し難く行じ難しとなり 16「三論法相之教牛羊眼易迷」といふは、我等がまなこをうしひつじのまな  
 こに譬へて、三論法相宗等の聖道自力の教にはまどふべしとのたまへるなり 17「然至我宗者」といふは 18「聖覺  
 和尚ののたまはく 19「わが淨土宗は彌陀の本願の實報土の正因として十聲稱念すれば無上菩提にいたると教  
 へたまふ 20善導和尚の御教には「三心を具すれば必ず安樂に生る」とのたまへるなり」と聖覺和尚ののたまへ  
 るなり 21「雖非利智精進」といふは、智慧もなく精進の身にもあらず鈍根懈怠の者も專修專念の信心を得つれ  
 ば往生すと心得べしとなり 22「然我大師聖人」といふは、聖覺和尚は聖人をわが大師聖人と仰ぎたのみたまふ  
 御ことばなり 23「爲釋尊之使者弘念佛之一門」といふは、聖人は釋迦如來の御使として念佛一門をひろめたま  
 ふと知るべしとなり 24「爲善導之再誕勸稱名之一行」といふは、聖人は善導和尚の後身として稱名の一行を  
 すゝめたまふと知るべしとなり 25「專修專念之行自此漸弘無間無餘之勤在今始知」といふは、一向專修と申す  
 ことはこれよりひろまると知るべしとなり 26「然則破戒罪根之輩加肩入往生之道」といふは、破戒無戒の人罪

業ふかきものみな往生すと知るべしとなり 27「下智淺才之類振臂赴淨土之門」といふは、無智無才のものは  
 淨土門におもむくべしとなり 28「誠知無明長夜之大燈炬也何悲智眼闇」といふは、まことにしりぬ、彌陀の誓  
 願は無明長夜のおほきなるともしびなり、なんぞ智慧のまなこくらしとかなしまんやとおもへとなり 29「生死  
 大海之大船筏也豈煩業障重」といふは、彌陀の願力は生死大海のおほきなるふねいかたなり、極惡深重の身  
 なりとも歎くべからずとのたまへるなり 30「情思教授恩德實等彌陀悲願者歟」といふは師主のをしへをおもふ  
 に彌陀悲願にひとしとなり 31「大師聖人のをしへの思おもくふかきことをおもひ知るべしとなり 32「粉骨可報之  
 摧身可謝之」といふは、大師聖人の御教の恩德のおもきことを知りて骨を粉にしても報すべしとなり、身を  
 くだきても恩を報ゆべしとなり 33よくくこの和尚のこの教を御覽すべしと。

【二】愚禿親鸞「正信偈」にはく 本願名號正定業」といふは選擇本願の行なり 3「至心信樂願爲因」と  
 いふは彌陀如來廻向の眞實信心を阿耨菩提の因とすべしとなり 4「成等覺證大涅槃」といふは 5「成等覺」とい  
 ふは正定聚の位なり 6この位を龍樹菩薩は即時入必定とのたまへり 7曇鸞和尚は入正定聚之數とをしへた  
 まへり 8是れ即ち彌勒の位とひとしとなり 9「證大涅槃」と申すは、必至滅度の願成就の故に必ず大般涅槃  
 をさとると知るべし 10「如來所以興出世」といふは、諸佛のよにいでたまふゆゑと申すみことなり 11「唯說彌陀  
 本願海」といふは、諸佛の世にいでたまふ御本懷はひとへに願海一乘の法をとかんとなり 12然れば「大經」  
 には「如來所以興出於世欲拯羣萌惠以眞實之利」と説きたまへり 13「五濁惡時羣生海應信如來如實言」といふ  
 は、よろづの衆生如來のこのみことを深く信受すべしとなり 14「能發一念喜愛心」といふは、一念慶喜の眞實

信よく發すれば、必ず本願の實報土にむまると知るべし。15「不斷煩惱得涅槃」といふは、煩惱具足せる我等無上大涅槃にいたるなりと知るべし。16「凡聖逆誘齊迴入」といふは、小聖凡夫五逆誘法無戒闍提みな迴心して眞實信心海に歸入しぬれば衆水海に入りてひとつあぢはひとなるがごとしとなり。17これを「如衆水入海一味」といふなり。18「攝取心光常照護」といふは、無礙光佛の心光つねにてらしまもりたまふ故に、無明の闇はれ生死の長き夜すでに曉になりぬと知るべし。19「已能離破無明闇」といふはこの意なり、信心を得れば曉になりぬと知るべし。20「貪愛瞋憎之雲霧常覆眞實信心天」といふは、我等が貪愛・瞋憎をくもきりに譬へたり、貪愛のくも瞋憎のきり常に信心の天をおほへるなりと知るべし。21「譬如日光覆雲霧之天明無闇」といふは、日月のくもきりにおほはるれどもやみ晴れてくもきりのしたあかきが如く、貪愛・瞋憎のくもきりに信心はおほはるれども往生にさはりあるべからずとなり。22「獲信見敬大慶喜」といふは、この信心をえておほきによりこびうやまふ人といふなり。23「即橫超截五惡趣」といふは信心をうれば即ち横に五惡趣をきるなりと知るべしとなり。24「横超」といふは、25横は如來の願力他力を申すなり。26「超」は生死の大海を易くこえて無上大涅槃のみやこに入るなりと。27信心を淨土宗の正意と知るなり。28この意を得つれば「他力は義なきを義とす」となり。29「義」といふは行者のはからふ心なり、この故に「自力」といふなり。30よくく心得べしと。

建長七歲乙卯六月二日

愚 忝 親 鸞 八十三歳書寫之

### 往相廻向還相廻向文類

#### 往相廻向之文

- 1 「無量壽經優婆塞提舍願生偈」に曰く「云何廻向 不捨一切苦惱衆生」 心常作願、廻向爲首、得成就 大悲心一故。」 文
- 2 この本願力の廻向をもて、如來の廻向に二種あり 一には往相廻向 二には還相廻向なり。
- 3 往相廻向につきて、眞實の行業あり 眞實の信心あり 眞實の證果あり。
- 4 眞實行業といふは、諸佛稱名の悲願に顯れたり 【一】稱名の悲願 大經に言はく「設我得佛 十方世界無量諸佛 不悉咨嗟稱我名者 不取正覺。」 文
- 5 眞實信心といふは、念佛往生の悲願に顯れたり 【二】信樂の悲願 大經に言はく「設我得佛 十方衆生 至心信樂 欲生我國 乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆 誹謗正法。」 文
- 6 眞實證果といふは、必至減度の悲願に顯れたり 【三】證果の悲願 大經に言はく「設我得佛 國中 人天 不下一定聚 必至減度者 不取正覺。」 文
- 7 これらの本誓悲願を「選擇本願」と申すなり 2 これを「往相廻向」と申すなり 3 この必至減度の大願を發し給ひて 4 この眞實信樂を得たらん人は即ち正定聚の位に住せしめん」と誓ひたまへり。

【二】同本異譯の『無量壽如來會』に言はく、<sup>2</sup>若我成佛國中有情、<sup>4</sup>若不決定成<sup>2</sup>等正覺<sup>1</sup>證中大涅槃<sup>5</sup>者、<sup>5</sup>不取<sup>2</sup>正覺<sup>1</sup>文。

【三】この悲願は、即ち「決定して等正覺にならしめん」と誓ひ給へりとなり。<sup>2</sup>「等正覺」といふは、即ち正定聚の位なり。<sup>3</sup>「等正覺」と申すは、「補處の彌勒菩薩と同じからしめん」と誓ひたまへるなり。<sup>4</sup>しかれば「眞實信樂の念佛者は彌勒菩薩と同じ」と龍舒淨土文に顯せり。<sup>5</sup>しかれば『大經』には、「次如彌勒」とのべたまへり。

【二】これらの大願を「往相廻向」と申すとみえたり。

【四】二には「還相廻向」といふは、『淨土論』に曰く、<sup>3</sup>以本願力廻向<sup>1</sup>故、是名<sup>2</sup>出第五門<sup>1</sup>といへり。<sup>4</sup>又曰く、<sup>5</sup>生彼國已、還起<sup>2</sup>大悲、廻入<sup>1</sup>生死、教化<sup>2</sup>衆生<sup>1</sup>、亦名<sup>2</sup>廻向<sup>1</sup>也<sup>1</sup>といへり。<sup>8</sup>これは還相の廻向と聞えたり。<sup>9</sup>この意は一生補處の大願にあらはれたり。

【五】大慈大悲の誓願は、『大經』に言はく、<sup>3</sup>設我得<sup>1</sup>佛、他方<sup>2</sup>佛土諸菩薩衆、<sup>5</sup>來<sup>2</sup>生我國<sup>1</sup>、究竟<sup>2</sup>必至<sup>1</sup>二生<sup>1</sup>補處<sup>1</sup>、除其<sup>2</sup>本願、自在<sup>1</sup>所化、爲<sup>2</sup>衆生<sup>1</sup>故、被<sup>2</sup>弘誓願、積<sup>2</sup>累德本、<sup>1</sup>度<sup>2</sup>脫一切、遊<sup>2</sup>諸佛國、修<sup>2</sup>菩薩行、供<sup>2</sup>養十方諸佛如來、開<sup>2</sup>化恆沙無量衆生、<sup>1</sup>使<sup>2</sup>立無上正眞之道、<sup>7</sup>超<sup>2</sup>出常倫、諸地之行現前、修<sup>2</sup>習普賢之德、<sup>8</sup>若不<sup>2</sup>爾者、不<sup>2</sup>取<sup>1</sup>正覺<sup>1</sup>文。<sup>9</sup>この悲願は如來の還相廻向の御誓なり。

【六】これらを「如來の二種の廻向」と申すなり。<sup>2</sup>他力の往相・還相の廻向なれば、<sup>3</sup>自利・利他ともに行者の願樂にあらず。<sup>4</sup>大願より自然にうるなり。<sup>5</sup>しかれば「他力には義なきをもて義とす」と大師聖人は仰言ありき。<sup>6</sup>つく

づくこの選擇悲願を心得たまふべしと、南無阿彌陀佛

康元元丙辰十一月二十九日

愚禿親鸞八十四歳書之

一念多念證文

【一】 一念をひがごと、思ふまじきこと。

【二】 「恆願一切臨終時勝緣勝境悉現前」といふは「願」はねがふといふなり、今「つねに」といふは絶えぬ心なり、をりに従うて時々もねがへといふなり、今「つねに」といふは常の義にはあらず、常といふはつねなることひまなかれといふ意なり、ときとしてたえず・ところとしてへだてずきはぬを常といふなり、一切臨終時」といふは極樂をねがふよろづの衆生のち終らん時までといふ語なり、勝緣勝境」といふは、佛をも見たてまつり、光をも見、異香をも嗅き、善知識の勸にもあはんとおもへとなり、悉現前」といふはさまぐのめでたきことども眼のまへにあらはれたまへとねがへとなり、【三】 「無量壽經」の中にあるひは「諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼國即得往生住不退轉」と説きたまへり、2 「諸有衆生」といふは十方のよろづの衆生と申す意なり、3 「聞其名號」といふは本願の名號をきくとのたまへるなり、4 「きく」といふは本願をき、て疑ふ心なきを聞といふなり、また「きく」といふは信心をあらはす御法なり、5 「信心歡喜乃至一念」といふは「信心」は如來の御誓をき、て疑ふ心のなきなり、6 「歡喜」といふは「歡」は身をよろこばしむるなり、「喜」は心によろこばしむるなり、得べきことを得てんすと豫てさきよりよろこぶ意なり、7 「乃至」は多きを少きをも久しきをも近きをも前をも後をもみなかねをさむる語なり、10 「一

念」といふは信心を得る時のきはまりをあらはす語なり 11「至心迴向」といふは 12「至心」は眞實といふ語なり 眞實は阿彌陀如來の御心なり 13「迴向」は本願の名號をもて十方の衆生に與へたまふ御法なり 14「願生彼國」といふは 15「願生」はよろづの衆生本願の報土へ生れんと願へとなり 16「彼國」はかのくにといふ、安樂國を教へたまへるなり 17「即得往生」といふは 18「即」はすなはちといふ、時を経ず日をも隔てぬなり 19また「即」はつくといふ、その位に定まりつくといふ語なり 20「得」はうべきことをえたりといふ 21眞實信心をうれば即ち無礙光佛の御心のうちに攝取して捨てたまはざるなり 22「攝」はをさめたまふ 23「取」はむかへると申すなり 24をさめとりたまふ時即ち時日をも隔てず正定聚の位につき定まるを「往生を得」とはのたまへるなり 25「然れば必至滅度の誓願を『大經』に説きたまはく『設我得佛國中有人天不住定聚必至滅度者不取正覺』と願じたまへり 26また『經』にのたまはく『若我成佛國中有情若不決定成等正覺證大涅槃者不取菩提』と誓ひたまへり 27この願成就を釋迦如來說きたまはく『其有衆生彼國者皆悉住於正定之聚所以者何彼佛國中無諸邪聚及不定聚』とのたまへり 28是等の文の意は「たとひわれ佛をえたらんにこのうちの人天定聚にも住してかならず滅度にいたらずば佛にならじ」とちかひたまへる意なり 29またのたまはく「もしわれ佛にならんにこのうちの有情もし決定して等正覺をなりて大涅槃を證せずば佛にならじ」とちかひたまへるなり 30斯の如く法藏菩薩誓ひたまへるを釋迦如來五濁の我等が爲に説きたまへる文の意は「それ衆生ありて彼の國に生れんとするものは皆悉く正定の聚に住す、ゆるはいかんとなれば彼の佛國のうちにはもろくの邪聚および不定聚は無ければなり」とのたまへり 31この二尊の御法を見たてまつるに「即ち往生す」とのたまへるは「正定

聚の位に定まるを「不退轉に住す」とはのたまへるなり 32この位に定まりぬれば必ず無上涅槃にいたるべき身となるが故に 33「等正覺を成る」とも説き 34「阿毘跋致にいたる」とも 35「阿惟越致にいたる」とも説きたまふ 36「即時入必定」とも申すなり 37この眞實信樂は他力横超の金剛心なり 38然れば念佛の人をば『大經』には「次如彌勒」と説きたまへり 39彌勒は豎の金剛心の菩薩なり 40「豎」と申すはたてさまと申す語なり 41これは聖道自力の難行道の人なり 42「横」はよこさまにといふなり 43「超」はこえてといふなり 44これは佛の大願業力の船に乘じぬれば生死の大海をよこさまに超えて眞實報土の岸に著くなり 45「次如彌勒」と申すは 46「次」はちかしといふ、つぎにといふ 47「ちかし」といふは彌勒は大涅槃にいたりたまふべき人なり、この故に「彌勒の如し」と言へり、念佛信心の人にも大涅槃に近くとなり、 48「つぎに」といふは釋迦佛のつぎに五十六億七千萬歳をへて妙覺の位にいたりたまふべしとなり 49「如」はごとしといふ 50「ごとし」といふは他力信樂の人はこの世のうち不退の位にのほりて必ず大般涅槃のさとりを開かんこと彌勒のごとしとなり 51【五】『淨土論』に曰く『經言若人但聞彼國土清淨安樂剋念願生亦得往生即入正定聚此是國土名字爲佛事安可思議』とのたまへり 52この文の意は 53「もしひとひとへにかのくにの清淨安樂なるをきて剋念して生まれんとねがふひとまたすでに往生をえたるひとすなはち正定聚に在るなり 54これはこれかのくにの名字をきくにさだめて佛事をなす、いづくんぞ思議すべきや」とのたまへるなり 55安樂淨土の不可稱不可說不可思議の徳をもとめず知らざるに信する人に得しむと知るべしとなり 56【六】また王日休のいはく「念佛衆生便同彌勒」といへり 57「念佛衆生」は金剛の信心をえたる人なり 58「便」はすなはちといふ、たよりといふ、信心の方便によりてすなはち

正定聚の位に住せしめたまふが故にとなり 4「同」はおなじきといふ、念佛の人は無上涅槃にいたること彌勒に同じき人と申すなり 7「また『經』に言はく「若念佛者當知此人是人中分陀利華」とのたまへり 2「若念佛者」と申すはもし念佛せん人と申すなり 3「當知此人是人中分陀利華」といふは當にこの人はこれ人中の分陀利華なりとしるべしとなり 4「これは如來のみことに分陀利華を念佛の人に譬へたまへるなり 5「この華は人中の上々華なり、好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なりとほめたまへり 6「光明寺の和尚の御釋には念佛のひとをば上々人好人妙好人希有人最勝人とほめたまへり 7「また現生護念の利益を教へたまふには「但有專念阿彌陀佛衆生彼佛心光常照是人攝護不捨總不論照攝餘雜業行者此亦是現生護念増上縁」とのたまへり 2「この文の意は 3「但有專念阿彌陀佛衆生」といふはひとすぢに彌陀佛を信じたまつると申すみことなり 4「彼佛心光」と申すは「彼」はかれと申す、「佛心光」とは無礙光佛の御こゝろと申すなり 5「常照是人」といふは「常」はつねなることひまなくたえずといふなり、「照」はてらすといふ 6「時をきはす處をへだてすひまなく眞實信心のひとをばつねにてらしまもりたまふ 7「かの佛心につねにひまなくまもりたまへる彌陀佛をば不斷光佛と申すなり 8「是人」といふは是非に對する語なり 9「眞實信樂のひとをば是人と申す、虛假疑惑の者をば非人といふ、非人といふはひとにあらずと嫌ひ悪きものといふなり、是人はよきひとと申す 10「攝護不捨」と申すは「攝」はをさめとるといふ、「護」は處をへだてす時をわかす人をきはす信心ある人をばひまなくまもりたまふとなり 11「まもるといふは異學異見のともがらに破られず別解別行のものにさへられず天魔波旬にをかされず惡鬼惡神なやまず事なしとなり 12「不捨」といふは信心の人を智慧光佛の御心

にをさめまもりて心光のうちに時として捨てたまはずと知らしめんと申す御法なり 13「總不論照攝餘雜業行者」といふは「總」はみなといふなり、「不論」はいはずといふ意なり、「照攝」はてらしをさむと、「餘の雜業」といふはもろくの善業なり 14「雜行を修し雜修をこのむ者をばすべてみな照らしをさむといはず護らすとのたまへるなり 15「是れ即ち本願の行者にあらざる故に攝取の利益にあづからざるなりと知るべしとなり 16「この世にてまもらずとなり 17「此亦是現生護念」といふはこの世にてまもらせたまふとなり 18「本願業力は信心の人の強縁なるが故に「増上縁」と申すなり 19「信心を得るをよろこぶ人をば『經』には「諸佛とひとしき人」と説きたまへり 20「首楞嚴院の源信和尚のたまはく「我亦在彼攝取之中煩惱障眼雖不能見大悲無倦常照我身」とこの文の意は「われまたかの攝取のなかにあれども、煩惱まなこをさへてみたてまつるにあたはずといへども、大悲ものうきことなくしてつねにわがみをてらしたまふ」とのたまへるなり 21「其有得聞彼佛名號」といふは本願の名號を信すべしと釋尊説き給へる御法なり 22「歡喜踊躍乃至一念」といふは「歡喜」はうべき事をえてんすと先だちてかねてよろこぶ心なり 4「踊」は天にをどるといふ、「躍」は地にをどるといふ、よろこぶ心の極まりなきかたちなり、慶樂する有様をあらはすなり 5「慶」はうべきことをえて後によりこぶ意なり、「樂」はたのしみ意なり 6「これは正定聚の位をうるかたちをあらはすなり 7「乃至」は解名の遍數の定まりなきことをあらはす 8「一念」は功德のきはまり、一念に萬徳ことごとく備はる、よろづの善みなをさまるなり 9「當知此人」といふは信心の人をあらはす御法なり 10「爲得大利」といふは無上涅槃をさとの故に「則是具足無上功德」ともこのたまへるなり 11「則」といふはすなはちといふ、のりと申すことばなり 12「如來の本願を信じて一念するに、

必ずしもめざるに無上の功德を得しめ、知らざるに廣大の利益をうるなり、自然にさま／＼のさとりをすなはちひらく法則なり<sup>13</sup>「法則」といふは始めて行者のはからひに非ず、もとより不可思議の利益にあづかること自然のありさまと申すことを知らしむるを法則とはいふなり<sup>14</sup>一念信心をうる人のありさまの自然なることをあらはすを法則とは申すなり<sup>15</sup>「經」に「無諸邪聚及不定聚」といふは<sup>16</sup>「無」はなしといふ、「諸」はよろづのこと、いふ語なり<sup>17</sup>「邪聚」といふは雜行雜修萬善諸行の人報土にはなければなりといふなり<sup>18</sup>「及」はおよぶといふ<sup>19</sup>「不定聚」は自力の念佛疑惑の念佛の人は報土にはなしといふなり<sup>20</sup>正定聚の人のみ眞實報土に生るればなり<sup>21</sup>この文どもは一念の證文なり<sup>22</sup>おもふ程はあらはし申さず、これにて推し量らせたまふべきなり。

【一】多念をひがごと、思ふまじき事。

【二】本願の文に「乃至十念」と誓ひたまへり 既に「十念」と誓ひたまへるにて知るべし、一念に限らずといふことを<sup>3</sup>いはんや「乃至」と誓ひたまへり、稱名の遍數定まらずといふことを<sup>4</sup>この誓願はすなはち易往易行のみちをあらはし大慈大悲の極りなきことを示したまふなり<sup>【三】</sup>「阿彌陀經」に「一日乃至七日名號を稱ふべし」と釋迦如來說きおきたまへる御法なり<sup>2</sup>この「經」は「無問自說經」と申す<sup>3</sup>この「經」を説きたまひしに如來に問ひたてまつる人もなし、是れ即ち釋尊出世の本懷をあらはさんと思召す、故に「無問自說」と申すなり<sup>4</sup>彌陀選擇の本願十方諸佛の證、誠諸佛出世の素懷、恆沙如來の護念は諸佛咨嗟の御誓をあらはさんと申すなり<sup>5</sup>諸佛稱名の誓願、「大經」にのたまはく「設我得佛十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺」

と願じたまへり<sup>6</sup>この悲願の意は「たとひわれ佛をえたらんに、十方世界無量の諸佛ことごとく咨嗟してわが名を稱せずば佛にならじ」とちかひたまへるなり<sup>7</sup>「咨嗟」と申すはよろづの佛にほめられたてまつると申す御ことなり<sup>【丑】</sup>「一心專念」は「一心」は金剛の信心なり、「專念」といふは一向專修なり<sup>2</sup>「一向」は餘の善にうつらず餘の佛を念せず、「專修」は本願の御名を一心なくもはら修するなり<sup>3</sup>「修」は心の定まらぬをつくるひ直し行ふなり、「專」はもはらといふ<sup>1</sup>といふなり、もはらといふは餘善他佛にうつる心なきをいふなり<sup>4</sup>「行住坐臥・不問時節久近」といふは「行」はあるくなり、「住」はとまるなり、「坐」はるるなり、「臥」はふすなり、「不問」はとはすといふ、「時」はときなり、「十二時」なり、「節」はときなり、「十二月四季」なり、「久」はひさしき「近」はちかしとなり、時をえらばざれば不淨の時をへだてず、よろづのことを嫌はざれば「不問」といふなり<sup>5</sup>「是名正定之業・願彼佛願故」といふは、弘誓を信するを報土の業因と定まるを正定の業と名くといふ、佛の願にしたがふが故にと申す文なり<sup>【六】</sup>一念多念のあらそひをなす人をば「異學・別解のひと」と申すなり<sup>2</sup>「異學」といふは聖道外道におもむきて餘行を修し餘佛を念す吉日・良辰をえらび占相・祭祀をこのものなり<sup>3</sup>これは外道なり、是等はひとへに自力をたのむものなり<sup>4</sup>「別解」は念佛をしながら他力をたのまぬなり<sup>5</sup>「別」といふは一なることを二にわかちなすことばなり、「解」はさとるといふ、とくとといふ語なり<sup>6</sup>念佛をしながら自力にさとりなすなり、故に「別解」といふなり<sup>7</sup>また助業をこのむものはれ即ち自力をはけむ人なり<sup>8</sup>「自力」といふは我が身をたのみ我が心をたのみ我が力をはけみ我がさま／＼の善根をたのみ人なり<sup>【七】</sup>「上盡一形」といふは「上」はかみといふす、むといふのほるといふ命をはらんまでといふ、「盡」

はつくるまでといふ「形」はかたちといふあらはすとすといふ。念佛せんこと命をはらんまでとなり。十念三念・五念の者も迎へたまふといふは念佛の遍數によらざることを顯すなり。【二八】「直爲彌陀弘誓重」といふは「直」はただしきなり、如來の直説といふなり、諸佛の世に出でたまふ本意と申すを直説といふなり。【二九】「爲」はなすとすといふ・もちゐるといふ・さだまるといふ・かれといふ・これといふ・あふといふ、あふといふはかたちといふ意なり。【三〇】「重」はかさなるといふ・おもしろいといふ・あつしといふ、誓願の名號これをもちゐるさだめなしたまふことかさなれりと思ふべきことを知らせんとなり。【三一】然れば「大經」には「如來所以興出於世・欲拯羣萌惠以眞實之利」とのたまへり。【三二】この文の意は「如來」と申すは諸佛を申すなり、「所以」はゆゑといふ語なり。【三三】「興出於世」といふは佛のよにいでたまふと申すなり。【三四】「欲」はおほしめすと申すなり、「拯」はすくふといふ、「羣萌」はよろづの衆生といふ。「惠」はめぐむと申す、「眞實之利」と申すは彌陀の誓願を申すなり。然れば諸佛の世に出でたまふ故は彌陀の願力を説きてよろづの衆生をめぐみすくはんと思召すを本懐とせんとしたまふが故に「眞實之利」とは申すなり。然ればこれを「諸佛出世の直説」と申すなり。凡そ八萬四千の法門はみな是れ淨土の方便の善なり、これを「要門」といふ、これを「假門」と名けたり。【三五】この要門・假門といふは即ち「無量壽佛觀經」一部に説きたまへる定善・散善是れなり。【三六】定善は十三觀なり、散善は三幅・九品の諸善なり。これみな淨土方便の要門なり、假門ともいふ。【三七】この要門・假門よりよろづの衆生を勧めこしらへて本願一乘・圓融無礙眞實功德大寶海に教へす、め入れたまふが故によろづの自力の善業をば「方便の門」と申すなり。【三八】「一乘」と申すは本願なり。【三九】「圓融」と申すはよろづの功德善根みち／＼と闕くることなし。自在なる意なり。【四〇】「無礙」と申すは煩惱

惡業にさへられず破れぬをいふなり。【四一】眞實功德」と申すは名號なり、一眞實如の妙理圓滿せるが故に大寶海に譬へたまふなり。【四二】「眞實如」と申すは無上大涅槃なり、涅槃すなはち法性なり、法性すなはち如來なり。【四三】「寶海」と申すはよろづの衆生をきはらずさはりなくへだてずみちびきたまふを大海の水のへだてなきに譬へたまへるなり。【四四】この一如寶海より形をあらはして法藏菩薩となりのたまひて無礙の誓をおこしたまふをたねとして阿彌陀佛となりたまふが故に「報身如來」と申すなり。【四五】これを「盡十方無礙光佛」と名けたてまつれるなり。【四六】この如來を「南無不可思議光佛」とも申すなり。【四七】この如來を「方便法身」とは申すなり。【四八】「方便」と申すは形をあらはし御名を示して衆生に知らしめたまふを申すなり。【四九】すなはち阿彌陀佛なり。【五〇】この如來は光明なり。【五一】光明は智慧なり。【五二】智慧は光のかたちなり。【五三】智慧また形なければ「不可思議光佛」と申すなり。【五四】この如來十方微塵世界にみち／＼たまへるが故に「無邊光佛」と申す。然れば世親菩薩は「盡十方無礙光如來」と名けたてまつりたまへり。【五五】「淨土論」には「觀佛本願力・遇無空過者・能令速滿足・功德大寶海」とのたまへり。【五六】この文の意は、佛の本願力を觀するにまうあうてむなくすぐる人なし、よくすみやかに功德の大寶海を滿足せしむとのたまへり。【五七】「觀」は願力を心にうかべみると申す。またしるといふ意なり。【五八】「遇」はまうあふといふ、まうあふと申すは本願力を信するなり。【五九】「無」はなしといふ。「空」はむなくといふ。「過」はすぐるといふ。「者」はひと／＼といふ。むなくすぐる人なしといふは信心あらん人むなく生死にとまるといふことなしとなり。【六〇】「能」はよくといふ。「令」はせしむといふ。「よ」といふ、「速」はすみやかにといふ。ときことといふなり。「滿」はみつといふ。「足」はたりぬといふ。「功德」と申すは名號なり。【六一】「大寶海」はよろづの善根功德みちきは



まるを海に譬へたまふ<sup>10</sup>この功德をよく信する人の心のうちにすみやかにとくみちたりぬと知らしめんとなり  
 然れば金剛心の人は知らず求めざるに功德の大寶その身にみちみつが故に大寶海と譬へたるなり【三】「致  
 使凡夫念即生」といふは「致」はむねとすといふむねとすといふはこれを本とすといふ語なり、いたるとい  
 ふいたるといふは實報土にいたるとなり「使」はせしむといふ「凡夫」はすなはち我等なり、本願力を信  
 樂するをむねとすべしとなり「念」は如来の御誓を一心なく信するをいふなり「即」はすなはちといふ、時  
 をへす日をへだてず正定聚の位に定まるを「即生」といふなり「生」はむまるといふ、これを「念即生」と  
 申すなり「また「即」はつくといふ、つくといふは位に必ずのほるべき身といふなり<sup>10</sup>世俗のならひにも國の  
 王の位にのほるをば即位といふ「位」といふはくらるといふ<sup>11</sup>これを東宮のくらるに在る人は必ず王の位につ  
 くが如く、正定聚の位につくは東宮の位の如し、王にのほるは即位といふ、是は即ち無上大涅槃にいたるを  
 申すなり<sup>12</sup>信心の人は正定聚にいたりて必ず滅度にいたると誓ひたまへるなり、これを「致とす」といふ<sup>13</sup>  
 「むねとす」と申すは涅槃のさとりを開くをむねとすとなり<sup>14</sup>「凡夫」といふは無明煩惱われらが身にみちく  
 て欲もおほく願ひ腹だちそねみねたむ心多く閑なくして臨終の一念にいたるまでとまらすすきえすたえずと水  
 火二河の譬にあらはれたり<sup>15</sup>かゝるあさましき我等願力の白道を一分二分やうくづ、歩み行けば無礙光佛  
 の光の御心にをさめとりたまふが故に必ず安樂淨土へいたれば彌陀如来とおなじく彼の正覺の華に化生して大  
 般涅槃のさとりを開かしむるをむねとせしむべしとなり<sup>16</sup>これを「致使凡夫念即生」と申すなり<sup>17</sup>二河の譬喻  
 に「一分二分のく」といふは一年二年すぎゆくにたとへたるなり<sup>18</sup>諸佛出世の直説、如来成道の素懷は凡夫は

四九八

彌陀の本願を念せしめて即生するをむねとすべしとなり【三】「今信知彌陀本願及稱名號」といふは如来  
 の誓を信知すと申す意なり「信」といふは金剛心なり「知」といふはしるといふ、煩惱・惡業の衆生をみち  
 びきたまふとしるなり「また「知」といふは觀なり、心にうかべおもふを觀といふ、心にうかべしるを知とい  
 ふなり「及稱名號」といふは「及」はおよぶといふ、およぶといふはかねたる心なり「稱」は御名をと  
 ふるとなり、また稱ははかりといふ意なり、はかりといふは物の程をさだむることなり<sup>7</sup>名號を稱すること  
 十聲・一聲きく人うたがふ心一念もなければ實報土へ生ると申す意なり【三】また「阿彌陀經」の「七日もしは  
 一日名號をととなふべし」となり【三】これは多念の證文なり<sup>2</sup>おもふやうには申しあらはさねども、これにて  
 一念・多念のあらそひあるまじきことは推し量らせたまふべし、淨土眞宗のならひには「念佛往生」と申すなり、  
 またく「一念往生」・「多念往生」と申すことなし、これにて知らせたまふべし。  
 南無阿彌陀佛

四九九

【釋】るなかの人々の文字のこゝろも知らずあさましき愚鈍きはまりなき故にやすく心得させんとて同じことをとりかへしく書きつけたたり。心あらん人をかく思ふべし、あざけりをなすべし。然れども人のそしりをかへりみず一向におろかなる人々を心得やすからんとしるせるなり。

正嘉元歳丁巳八月六日書寫之

愚禿親鸞八十五歳

唯信鈔文意

【一】『唯信鈔』といふは「唯」はたゞこのこと一といふ、二ならぶことを嫌ふ語なり。また「唯」はひとりといふ意なり。『信』はうたがふ心なきなり、即ちこれ眞實の信心なり、虚假はなれたる心なり。虚はむなしといふ、假はかりなりといふ、虚は實ならぬをいふ、假は眞ならぬをいふなり。本願他力をたのみて自力をなれたる、これを「唯信」といふ。『鈔』はすぐれたることを抜き出しあつむる語なり。このゆゑに『唯信鈔』といふなり。また「唯信」はこれ他力の信心のほか之餘のことならばすとすなり。即ち本弘誓願なるが故なればなり。

【二】如来尊號甚分明 十方世界普流行 但有稱名皆得往 觀音勢至自來迎  
2 「如来尊號甚分明」 3 このこゝろは「如来」と申すは無礙光如来なり。4 「尊號」といふは南無阿彌陀佛なり。5 「尊」はたふとくすぐれたりとすなり。6 「號」は佛になりたまうて後のみなを申す。7 「名」はいまだ佛になりたまはぬときのみなを申すなり。8 この如来の尊號は不可稱不可說不可思議にまします故に一切衆生をして無上大般涅槃にいたらしめたまふ大慈大悲の誓のみななり。9 この佛のみなはよろづの如来の名號にすぐれたまへり是れ即ち誓願なるが故なり。10 「甚分明」といふは「甚」ははなはだといふ、すぐれたりといふ意なり。11 「分」はわかつといふ、よろづの衆生とわかつ意なり。12 「明」はあきらかなりといふ。13 十方一切衆生をことごとくわか

ちたすけみちびきたまふことあきらかなり、あはれみたまふことすぐれたまへりとなり<sup>15</sup>「十方世界普流行」といふは「普」はあまねくひろくきはなしといふ、「流行」は十方微塵世界にあまねくひろまりて佛教をす、め行ぜしめたまふなり<sup>16</sup>然れば大乘の聖人・小乗の聖人・善人・悪人・一切の凡夫みなともに自力の智慧をもては涅槃に至る事なければ、無礙光佛の御形は智慧の光にたまはります故にこの如來の智願海にす、めいれたまふなり<sup>17</sup>一切諸佛の智慧をあつめたまへる御形なり<sup>18</sup>光明は智慧なりと知るべし<sup>19</sup>「但有稱名皆得往」といふは「但有」はひとへにみなを稱ふる人のみみな極樂淨土に往生すととなり<sup>20</sup>故に「稱名皆得往」とのたまへるなり<sup>21</sup>「觀音勢至自來迎」といふは、南無阿彌陀佛は智慧の名號なればこの不可思議の智慧光佛のみなを信受して憶念すれば觀音勢至は必ず影の形にそへるが如くなり<sup>22</sup>この無礙光佛は觀音とあらはれ勢至と示す<sup>23</sup>ある經には觀音を寶應聲菩薩と名けて日天子と示す<sup>24</sup>これはよろづの衆生の無明闇をはらはしむ<sup>25</sup>勢至を寶吉祥菩薩と名けて月天子とあらはれ、生死の長夜を照して智慧をひらかしむるなり<sup>26</sup>「自來迎」といふは「自」はみづからといふ、彌陀無數の化佛・無教の化觀世音・化大勢至等の無量無數の聖衆みづからつねに時をきらはす處をへだてず眞實信心をえたる人にそひたまひて護りたまふ故にみづからと申すなり<sup>27</sup>また「自」はおのづからといふ、おのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ<sup>28</sup>「しからしむ」といふは行者のはじめてもかくも計らはざるに過去今生未來の一切の罪を善に轉じかへなすといふなり<sup>29</sup>「轉ず」といふは罪を消し失はずして善になすなり、よろづの水大海に入れば即ち潮となるが如し<sup>30</sup>彌陀の願力を信するが故に、如來の功德を得しむるが故に、「しからしむ」といふ<sup>31</sup>はじめに功德を得んと計らはざれば「自然」と

五〇二

いふなり<sup>32</sup>誓願眞實の信心をえたる人は攝取不捨の御誓に攝めとりて護らせたまふによりて、行人のはからひにあらず、金剛の信心となる故に正定聚の位に住すといふ<sup>33</sup>この心なれば憶念の心自然におこるなり<sup>34</sup>この信心のおこることも釋迦の慈父・彌陀の悲母の方便によりて無上の信心を發起せしめたまふとみえたり<sup>35</sup>是れ自然の利益なりと知るべし<sup>36</sup>「來迎」といふは「來」は淨土へきたらしむといふ、是れ即ち若不生者の誓をあらはすみのりなり<sup>37</sup>穢土をすて、眞實の報土にきたらしむとなり、即ち他力をあらはすみことなり<sup>38</sup>また「來」はかへるといふ、かへるといふは願海に入りぬるによりて必ず大涅槃にいたるを「法性のみやこへかへる」と申すなり<sup>39</sup>「法性のみやこ」といふは法身と申す如來のさとりを自然に開くなり、さとりひろく時を「法性のみやこへかへる」と申すなり<sup>40</sup>これを「眞如實相を證す」ともいふ、「無爲法身」ともいふ、「滅度にいたる」ともいふ、「法性の常樂を證す」ともいふ、「無上覺にいたる」とも申すなり<sup>41</sup>このさとりを得れば即ち大慈大悲きはまりて生死海にかへりいりてよろづの有情をたすくるを「普賢の徳に歸せしむ」といふなり<sup>42</sup>この利益におもむくを「來」といふ、これを「法性のみやこへかへる」といふなり<sup>43</sup>「迎」といふはむかへたまふといふ、まづといふ意なり<sup>44</sup>選擇不思議の本願の尊號・無上智慧の信心をき、て一念も疑ふ心なければ「眞實信心」といふ<sup>45</sup>この信心をうれば等正覺にいたりて補處の彌勒に同じくして無上覺を成るべしといへり、即ち正定聚の位に定まるなり<sup>46</sup>この故に信心やぶれずかたふかすみだれぬこと金剛の如くなり、しかれば「金剛の信心」といふなり<sup>47</sup>「大經」には「願生彼國・即得往生・住不退轉」とのたまへり<sup>48</sup>願生彼國はかのくにむまれんとねがへとなり<sup>49</sup>「即得往生」は信心をうればすなはち往生すといふ<sup>50</sup>すなはち往生すといふは不退轉に住

五〇三

するをいふ「不退轉に住す」といふは即ち正定聚の位に定まるなり<sup>52</sup>「成等正覺」ともいへり<sup>53</sup>これを「即得往生」といふなり、「即」はすなはちといふ、すなはちといふは時をへす日をへだてぬをいふなり<sup>54</sup>凡そ十方世界にあまねくひろまることは法藏菩薩の四十八の大願のなかに第十七の願に「十方無量の諸佛にわが名をほめられ稱へられん」と誓ひたまへる一乘大智海の誓願を成就したまへるによりてなり<sup>55</sup>「阿彌陀經」の證誠護念のありさまにて明かなり<sup>56</sup>證誠護念の御意は「大經」にもあらはれたり<sup>57</sup>既に稱名の本願は選擇の正因たること悲願にあらはれたり<sup>58</sup>この文の意はおもふほどは申さず、これにて推し量らせたまふべし<sup>59</sup>この文は後善導法照禪師と申す聖人の御釋なり<sup>60</sup>この和尚をば法道和尚と慈覺大師はのたまへり<sup>61</sup>また傳には廬山の彌陀和尚とも申す、淨業和尚とも申す<sup>62</sup>唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり、このゆゑに後善導と申すなり。

【三】彼佛因中立弘誓 聞名念我總迎來 不簡貧窮將富貴 不簡下智與高才 不簡多聞持淨戒 不簡破戒罪根深 但使迴心多念佛 能令瓦礫變成金

2 「彼佛因中立弘誓」この意は、「彼」はかのといふ、「佛」は阿彌陀佛なり 4 「因中」は法藏菩薩と申せし時なり 5 「立弘誓」は「立」はたつといふなるといふ、「弘」はひろしといふひろまるといふ、「誓」はちかひといふ、法藏比丘超世無上のちかひを發してひろくひろめたまふとなり 6 「超世」は餘の佛の御誓にすぐれたまへりとなり、「超」はこえたりといふうへなしといふ 7 如來の弘誓をおこしたまへるやうはこの「唯信鈔」にくはしくあらはせり 8 「聞名念我」といふは「聞」はきくといふ、信心をあらはすみのりなり、「名」は如來のちかひの

名號なり 9 「念我」と申すはこのみなを憶念せよとなり、諸佛稱名の悲願にあらはせり 10 「憶念」といふは信心まことなる人は本願をつねにおもひ出づる心のたえずつねなるなり 11 「總迎來」といふは「總」はふさねてといふすべてみなといふ意なり、「迎」はむかふるといふまつといふ、他力をあらはす意なり、「來」はかへるといふきたるといふ法性のみやこへむかへるてかへらしむとなり 12 法性のみやこより衆生利益の爲に娑婆界にきたりたまふ故に「來」をきたるといふなり 13 「經」には「從如來生」とのたまへり、「從如」といふは眞如よりと申す「來生」といふはきたり生ずといふなり 14 「不簡貧窮將富貴」といふは「不簡」はえらばずといふ、きはすといふ意なり、「貧窮」はまづしくたしなきなり、「將」はまさにといふもてといふるてゆくといふ、「富貴」はとめるといふよきひと、いふ、是等をまさにもてえらばず淨土へるてゆくとなり 15 「不簡下智與高才」といふは「下智」は智慧あさくせばくすくなきものなり、「高才」は才覺ひろきもの、是等をえらばずとなり 16 「不簡多聞持淨戒」といふは「多聞」は聖教をひろくおほくき、信するなり 17 「持」はたもつといふ、たもつといふはならひまなぶ心をうしなはず散らさぬなり 18 「淨戒」は大乗・小乗のよろこひの戒法五戒八戒十善戒・小乗の具足戒三千の威儀六萬の齋行・大乘の一心金剛法戒三聚淨戒梵網の五十八戒等すべて道俗の戒品是等をたもつを「持」といふ、是等の戒品をやぶるを「破」といふなり 19 彼様のさまんくの大小の戒品をたもてるいみじき人々も他力眞實の信心をえて後に眞實の報土には往生を遂ぐるなり 20 自らのおのくの戒善おのくの自力の信・自力の善にては眞實の報の淨土には生れずと知るべし 21 「不簡破戒罪根深」といふは「破戒」は上にあらはす所のよろづの道俗の戒品をうけてやぶりすてたるもの、是等をきはすとなり 22 「罪根深」といふは

十惡五逆の惡人謗法闍提の罪人おほよそ善根すくなきもの惡業おほきもの善心あさきもの惡心ふかきもの彼様のあさましきさまの罪ふかき人を「深」といふ、ふかしといふ語なり<sup>28</sup>すべてよき人あしき人たふとき人いやしき人を無礙光佛の御誓にはえらばず、これをみちびきたまふをさきとしむねとするなり<sup>29</sup>眞實信心をうれば實報土に生る」とをしへたまへるを淨土眞宗とすと知るべし<sup>30</sup>總迎來」といふはすべて眞實信樂あるものを淨土へむかへるてかへらしむとなり<sup>31</sup>但使廻心多念佛」といふは「但使廻心」はひと廻心せしめよといふ意なり<sup>32</sup>廻心」といふは自力の心をひるがへしつるをいふなり<sup>33</sup>實報土に生る、人は必ず無礙光佛の心中に攝めとりたまふ故に金剛の信心となるなり、この故に「多念佛」と申すなり<sup>34</sup>多は大意なり勝の意なり増上の意なり、大はおほきなり勝はすぐれたり、よろづの善にまされりと知るべし、増上はよろづの善にすぐれたるなり<sup>35</sup>是れ即ち他力本願無上の故なり<sup>36</sup>自力の心をすつ」といふはやうくさまざまの大小の聖人善惡の凡夫のみづからが身をよしと思ふ心をすて身をたのますあしき心をさがしくかへりみず、また人をよしあしと思ふ心をすてて<sup>37</sup>一向に具縛の凡夫屠沽の下類、無礙光佛の不可思議の誓願廣大智慧の名號を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり<sup>38</sup>具縛」といふはよろづの煩惱にしばられたる我等なり「煩」は身をわづらはす、「惱」はこゝろをなやますといふ<sup>39</sup>屠」はよろづの生きたるものをころしほふるものこれは獵師といふものなり、「沽」はよろづのものをうりかふものなりこれは商人なり、是等を「下類」といふなり<sup>40</sup>彼様の商人獵師さまの者はみないしかはらつての如くなる我等なり<sup>41</sup>能令瓦礫變成金」といふは「能」はよくといふ、「令」はせしむといふ、「瓦」はかはらといふ、「礫」はつてと

五〇六

五〇七

いふ「變成金」は「變成」はかへなすといふ、「金」はこがねといふ<sup>42</sup>如來の本願を信すれば瓦礫の如くなる我等を金にかへなすしむと誓へたまへるなり<sup>43</sup>商人獵師などは石瓦礫の如くなるを如來の攝取の光に攝めとりたまうて捨てたまはず、これひとへにまことの信心の故なればなりと知るべし<sup>44</sup>攝取の光明」と申すは無礙光佛の御心のうちに攝めとりたまふ故に「金剛の信心」と申すなり<sup>45</sup>文の意は思ふほどは申しあらはし候はねどもあらく申すなり、深きことはよからん人にも問はせたまふべし<sup>46</sup>この文は慈愍三藏と申す天竺の聖人の御釋なり、震旦には慧日三藏と申すなり。

【四】極樂無爲涅槃界 隨緣雜善惡難生 故使如來選要法 教念彌陀專復專

①「極樂無爲涅槃界」といふは「極樂」と申すは彼の安樂淨土なり、よろづの樂つねにして苦まじはらざるなり 彼の國をば「安養」といへり、覺鸞和尚は「ほめたてまつりて安養と申す」とのたまへり ②また「論」には「蓮華藏世界」ともいへり、「無爲」ともいへり「涅槃界」といふは無明のまどひをひるがへして無上覺をさとするなり、「界」はさかひといふ、さとりを開くさかひなりと知るべし「涅槃」と申すにその名無量なり、くはしく申すに能はず、おろくその名をあらはすべし<sup>47</sup>涅槃をば「滅度」といふ、「無爲」といふ、「安樂」といふ、「常樂」といふ、「實相」といふ、「法身」といふ、「法性」といふ、「眞如」といふ、「一如」といふ、「佛性」といふ 佛性すなはち如來なり<sup>48</sup>この如來微塵世界にみちくしてまします、即ち一切羣生海の心にみちたまへるなり<sup>49</sup>草木國土ことくくみな成佛す」と説けり<sup>50</sup>この一切有情の心に方便法身の誓願を信樂するが故に、この信心すなはち佛性なり<sup>51</sup>この佛性すなはち法性なり<sup>52</sup>法性すなはち法身なり<sup>53</sup>然れば佛について二種の法身

まします、一には法性法身と申す、二には方便法身と申す、三には法性法身と申すは色もなし形もましまさず、然れば心もおよばず語もたえたり、16この一如より形をあらはして「方便法身」と申す、その御相に「法藏比丘」と名のりたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり、17この誓願のなかに光明無量の本願壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御形を世親菩薩は「盡十方無礙光如來」と名けたてまつりたまへり、18この如來すなはち誓願の業因にむくいたまひて「報身如來」と申すなり、即ち「阿彌陀如來」と申すなり、「報」といふはたねにむくいたる故なり、19この報身より應化等の無量無數の身をあらはして微塵世界に無礙の智慧光を放たしめたまふ故に「盡十方無礙光佛」と申す、20光の御形にて色もましまさず形もましまさず、21即ち法性法身に同じくして無明の闇をはらひ惡業にさへられず、この故に「無礙光」と申すなり、22無礙は有情の惡業煩惱にさへられずとなり、23然れば阿彌陀佛は光明なり、光明は智慧の形なりと知るべし、24「隨緣雜善惡難生」といふは「隨緣」は衆生のおのくの縁にしたがひてもろくの善を修するを極樂に廻向するなり、即ち八萬四千の法門なり、25これはみな自力の善根なるが故に實報土には生れずときらはる、故に「恐難生」といへり、26「恐」はおそるといふ、實報土に雜善自力の善生るといふことをおそる、なり、「難生」は生れがたしとなり、27「故使如來選要法」といふは釋迦如來よろづの善の中より名號をえらびとりて五濁惡時惡世界惡衆生邪見無信の者に與へたまへるなりと知るべし、28これを「選」といふ、ひろくえらぶといふ意なり、「要」はもはらといふもとむといふちぎるといふなり、「法」といふは名號なり、29「教念彌陀專復專」といふは「教」はをしふといふのりといふ、釋尊の教勸なり、「念」は心におもひさだめてともかくもはたらかぬ意なり、即ち選擇本

願の名號を一向專修なれと教へたまふことなり、30「專復專」といふははじめの「專」は一行を修すべしとなり、「復」はまたといふ、かさねといふ、然ればまた「專」といふは一心なれとなり、一行一心をもちはらなれとなり、31「專」は一といふ語なり、もはらといふは二心なれとなり、ともかくもうつる心なきを「專」といふなり、32この一行一心なる人を「彌陀攝取してすてたまはざれば阿彌陀と名けたてまつる」と光明寺の和尚はのたまへり、33この一心は横超の信心なり、34「横」はよこさまといふ、「超」はこえてといふ、よろづの法にすぐれて速かにとく生死の大海をこえて無上覺にいたる故に「超」と申すなり、35是れ即ち如來大悲の誓願力なる故なり、36この信心は攝取の故に金剛心となる、37これは念佛往生の本願の三信心なり、「觀經」の三心にはあらず、38この眞實信心を世親菩薩は「願作佛心」とのたまへり、是れ淨土の大菩提心なり、39然ればこの願作佛心は即ち度衆生心なり、40この「度衆生心」と申すは即ち衆生をして生死の大海を度すことなり、41この信樂は衆生をして無上大涅槃にいたらしめたまふ信心なり、42この信心即ち大慈大悲の心なり、43この信心即ち佛性なり、44佛性即ち如來なり、45この信心をうるを「慶喜」といふ、46慶喜する人は諸佛にひとしき人と名く、47「慶」はうべきこととをえて後によろこぶことなり、信心をえて後によろこぶなり、48「喜」はこゝろの内につねによろこぶこと、ろたえずして憶念つねなるなり、49踊躍するなり、「踊」は天にをどるといふ、「躍」は地にをどるといふ、よろこぶ心のきはまりなきかたちをあらはすなり、50信心をえたる人をば芬陀利華に譬へたまへり、51この信心をえがたきことを「大經」には「若聞斯經信樂受持難中之難無過此難」とをしへたまへり、52「小經」には「極難信法」と見えたり、53この文の意はこの經をき、て信することかたきか中にかたし、これに過ぎてかたきことなしと

なり 54 釋迦牟尼如來は五濁惡世に出でてこの難信の法を行じて無上涅槃にいたれりと説きたまふ 55 さてこの智慧の名號を濁惡の衆生に與へたまへるなり 56 十方諸佛の證誠恆沙如來の護念ひとへに眞實信心の人のためなり 57 釋迦は慈父彌陀は悲母われらが父母として信心ををしへたまへりと知るべきなり 58 過去久遠に三恆河沙の諸佛の世に出でたまひし所にして自力の大菩提心をおこしき、恆沙の善根を修せしめしによりて今大願業力にまうあふことを得たり 59 他力の三信心を得たらん人はゆめく餘の善をそしり餘の佛聖をいやしうすることなかれとなり。

【五】「具三心者・必生彼國」といふは 2 三心を具すれば必ず彼の國に生るとなり 3 しかれば善導は「具此三心者・必得往生也・若少一心・即不得生」とのたまへり 4 「具此三心」といふはみつの心を具すべしとなり 5 「必得往生」といふは「必」はかならずといふ、「得」はうるといふ、うるといふは往生をうるとなり 6 「若少一心」といふは「若」はもしといふ、「少」といふ、「少」はかくるといふ、すくなしといふ、一心かけぬれば生るゝものなしとなり 7 一心かくるといふは信心の缺くるなり 8 信心かくるといふは本願眞實の三信心の缺くるなり 9 「觀經」の三心をえて後に「大經」の三信心をうるを一心をうるとはいふなり 10 この故に「大經」の三信を得ざるをば一心かくるといふなり 11 この一心かけぬれば實報土に生れずとなり 12 「觀經」の三心は定機・散機の自力の心なり 13 定散の二善を廻して「大經」の三信を得んとねがふ方便の深心と至誠心と知るべし 14 眞實の三信心を得ざれば眞の報土に生れず 15 生れざれば「即不得生」といふなり、「即」はすなはちといふ、「不得生」は生るゝことをえずといふなり 16 定機・散機の人、雜行・雜修して三信心かけたる故に、多生・曠劫を経て「大經」の三信心を

えて後に眞實報土に生るべき故に、即ち生れずといふなり 17 もし胎生邊地に生れても五百歳をへあるひは億千萬衆のなかに時にまれに一人まことの報土にはすゝむと見えたり 18 三信をえんことをよくく心得てねがふべきなり。

【六】「不得外現賢善精進之相」といふは 2 淨土をねがふ人はあらはにかしこきすがた善人のかたちをふるまはざれ、精進なるすがたを示すことなかれとなり 3 その故は内懷虚假なればなりと 4 「内」はうちといふ、こゝろのうちに煩惱を具せる故に虚なり假なり、虚はむなくして實ならず、假はかりにして眞ならず 5 しかれば今の世を如來のみのりに末法惡世と定めたまへる故は、一切有情まことの心なくして師長を輕慢し父母に孝せず朋友に信なくして惡をのみこのむ故に世間出世みな心口各異言念無實なりと教へたまへり 6 「心口各異」といふはこゝろとくちにいふこと皆おのくことなり 7 「言念無實」といふはことばとこゝろのうちと實なしといふなり 8 「實」はまこと、いふ語なり、この世の人は無實のこゝろのみにして淨土をねがふ人はいつはりへつらひの心のみなりと聞えたり 9 世をすつるも名のこゝろの利のこゝろをさきとする故なり 10 しかれば善人にもあらず賢人にもあらず精進のこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして内はむなくいつはりかさりへつらふ心のみつねにしてまことなる心なき身と知るべし 11 斟酌すべし」といふはことのあるさまにしたがうてはからふべしといふ語なり。

【七】「不簡破戒罪根深」といふは 2 もろくの戒をやぶり罪ふかき人をきはらずとなり 3 このやうは上にくはしく明せり、よく見るべし。

【六】「乃至十念若不生者不取正覺」といふは、<sup>2</sup>選擇本願の文なり。<sup>3</sup>この文の意は乃至十念のちかひの名號をとなへん人も我が國に生れずば佛にならじと誓ひたまへるなり。<sup>4</sup>乃至は上下多き少き近き遠き久しきみなをさむる語なり。<sup>5</sup>多念にこゝろをとゞめ一念にとゞまるこゝろをやめんがために未來の衆生をあはれみて法藏菩薩かねて願ひまします御誓なり。<sup>6</sup>よくよくよろこぶべし慶樂すべきなり。

【七】「非權・非實」といふは、<sup>2</sup>法華宗のをしへなり、淨土眞宗のこゝろにあらす。聖道家のこゝろなり、易行道のこゝろにあらす。彼の宗の人に尋ねべし。

【八】「汝若不能念者」といふは、<sup>2</sup>五逆十惡の罪人不淨說法のもの病のくるしみに閉ぢられて心に彌陀を稱念したてまつらばたゞ口に南無阿彌陀佛と稱へよと勧めたまへるみのりなり。<sup>3</sup>これは口稱を本願と誓ひたまへるをあらはさんとす。<sup>4</sup>應稱無量壽佛」とのたまへる、この意なり、「應稱」はとなふべしとなり。

【九】「具足十念・稱南無無量壽佛・稱佛名故於念念中除八十億劫生死之罪」といふは、<sup>2</sup>五逆の罪人はその身に罪をもてること八十億劫の罪をもてる故に十念南無阿彌陀佛と稱ふべしと勧めたまへるなり。<sup>3</sup>一念に八十億劫の罪を消すまじきにはあらねども五逆の罪の重きほどを知らせんがためなり。<sup>4</sup>「十念」といふはたゞ口に十遍を稱ふべしとなり。<sup>5</sup>しかれば選擇本願には「若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺」と申すは、彌陀の本願には「下至」といへるは下は上に對してとこゝろまでの衆生必ず往生すべしと知らせたまへるなり。<sup>7</sup>念と聲とは一つ意なり、念をはなれたる聲なし、聲をはなれたる念なしと知るべし。<sup>8</sup>この文どもの意はおもふほどは申さず、よからん人にたづぬべし、深きことはこれにて推し量りたまふべし。

南無阿彌陀佛

【釋】るなかの人々の文字の意も知らず、あさましき愚癡きはまりなき故に、易く心得させんとて、同じことをたび／＼とりかへし／＼書き付けたり。<sup>2</sup>こゝろあらん人はをかくしく思ふべし、あざけりをなすべし。<sup>3</sup>然れどもおほかたのそしりを願みず、ひとすちに愚なる者を心得やすからんとてしるせるなり。

正嘉元歲丁巳八月十九日

愚禿親鸞八十五歲書之



【校異】 一本卷尾載三和尚碑文。曰。曇鸞和尚碑文。法師常修三淨土。亦每有三世俗君子來呵。法師曰。十方佛國皆爲三淨土。法師何乃獨意注。西。豈非三偏見生也。法師對曰。吾既凡夫智慧淺短。未入三地位。念力須均。如三似置。草引。牛恆須繫。心槽。豈得三縱放全無。所歸。雖三復難者紛紜。而法師獨決。是以無問。二切道俗。但與三法師。二面相遇者。若未生。三正信。勸令生信。若已生。三正信。二者皆勸歸三淨國。是故法師臨三命終時。寺傍左右道俗。皆見三幡華映。院。盡聞三異香音樂迎接。遂三往生也。

### 末燈鈔

本願寺親鸞大師の御己證竝に邊州所々の御消息等類聚鈔

有念無念の事。○ 來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるが故に、臨終といふことは諸行往生の人にいふべし、未だ眞實の信心を獲ざるが故なり。また十惡五逆の罪人のはじめて善知識にあうて勸めらるゝ時にいふことなり。眞實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚の位に住す。この故に臨終まつことなし、來迎たのむことなし。信心の定まるとき往生また定まるなり、來迎の儀則を待たず。正念といふは本弘誓願の信樂定まるをいふなり。この信心獲るゆゑに必ず無上涅槃に到るなり。この信心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これ即ち他力のなかの他力なり。又正念といふにつきて二あり、一に定心の行人の正念。二には散心の行人の正念あるべし。この二の正念は他力の中の自力の正念なり。定散の善は諸行往生の言葉にをさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。この自力の行人は來迎をまたずしては邊地胎生懈慢界までも生るべからず。この故に第十九の誓願に「諸の善をして淨土に廻向して往生せんと願ふ人の臨終にはわれ現じて迎へん」と誓ひたまへり。臨終まつこと、來迎往生といふことはこの定心散心の行者のいふことなり。選擇本願は有念にあらす無念にあらす。有念はすなはち色形を思ふにつきていふことなり。無念といふは形を心にかかず、色を心におもはずして念も無きをいふなり。これみな聖道の教なり。聖道といふは已に佛になりたまへる人の、吾等が心を勸めんが爲に佛心宗眞言宗法華宗華嚴宗三

論宗等の大乘至極の教なり 25 佛心宗といふはこの世に弘まる禪宗これなり 27 また法相宗成實宗俱舍宗等の權教小乘等の教なり 28 これみな聖道門なり 29 權教といふは即ち已に佛になりたまへる佛菩薩のかりに種々の形を現はして勸めたまふが故に權といふなり 30 淨土宗にまた有念あり無念あり 31 有念は散善の義、無念は定善の義なり 32 淨土の無念は聖道の無念には似ず 33 またこれ聖道の無念のなかにまた有念あり 34 よくよくとふべし 35 淨土宗のなかに眞あり假あり、眞といふは選擇本願なり、假といふは定散二善なり 36 選擇本願は淨土眞宗なり 37 定散二善は方便假門なり 38 淨土眞宗は大乘の中の至極なり 39 方便假門の中にまた大小權實の教あり 40 釋迦如來の御善知識は一百一十人なり、華嚴經に見えたり 41 南無阿彌陀佛 42 建長二歲辛亥閏九月二十日 〇 愚禿親鸞 七十九歲

一 等間の念佛者の疑ひ問はれたること 2 それ淨土眞宗の意は往生の根機に他力あり自力あり 3 このこと既に天竺の論家淨土の祖師の仰せられたることなり 4 まづ自力とまをすことは、行者の各々の縁に隨ひて、餘の佛號を稱念し、餘の善根を修行してわが身をたのみ、わが計の心を以て身自意の亂、心を繕ひ、めでたう爲なして淨土へ往生せんと思ふを自力と申すなり 5 また他力と申すことは、彌陀如來の御誓のなかに選擇攝取したまへる第十八の念佛往生の本願を信樂するを他力と申すなり 6 如來の御誓なれば「他力には義なきを義とす」と聖人の仰言にてありき 7 義といふことは計ふことばなり 8 行者の計は自力なれば義といふなり 9 他力は本願を信樂して往生 必定なる故に更に義なしとなり 10 しかれば「我身の悪ければいかでか如來迎へたまはん」と思ふべからず、凡夫はもとより煩惱具足したる故に惡きものと思ふべし 11 また「わが心の善ければ往生

すべし」と思ふべからず、自力の御計にては眞實の報土へ生ずべからざるなり 12 行者の各々の自力のみにては懈慢邊地の往生胎生疑城の淨土までぞ往生せらるゝことにてあるべき」とぞ承りたりし 13 第十八の本願成就の故に阿彌陀如來と成らせたまひて不可思議の利益きはまりましたまきぬ御かたちを天親菩薩は「盡十方無礙光如來」とあらはしたまへり 14 この故に「善き惡しき人を嫌はず煩惱の心を簡ばす隔てずして往生は必ずするなり」と知るべしとなり 15 しかれば惠心院の和尚は「往生要集」に本願の念佛を信樂する有様をあらはせるには「行住坐臥をえらばず時處諸緣をきはす」と仰せられたり 16 眞實の信心を獲たる人は攝取の光にをさめとられまらせたり」と確にあらはせり 17 しかれば「無明煩惱を具して安養淨土に往生すればすなはち無上佛果に到る」と釋迦如來說きたまへり 18 しかるに「五濁惡世のわれら釋迦一佛のみことを信受せんこと有り難かるべし」とて十方恆沙の諸佛證人とならせたまふ」と善導和尚は釋したまへり 19 釋迦彌陀十方の諸佛みな同じ御心にて、本願念佛の衆生には影の形に添へるが如く離れたまはず」と證せり 20 しかればこの信心の人を釋迦如來は「わが親しき友なり」とよろこびまします 21 この信心の人を「眞の佛弟子」といへり 22 この人を「正念に住する人」とす 23 この人は攝取して捨てたまはざれば「金剛心を獲たる人」と申すなり 24 この人を「上人」とも「好人」とも「妙好人」とも「最勝人」とも「希有人」とも申すなり 25 この人は正定聚の位に定れるなりと知るべし 26 しかれば「彌勒佛と等しき人」とのたまへり 27 これは眞實信心を獲たるゆゑに必ず眞實の報土に往生するなりと知るべし 28 この信心をうることは釋迦彌陀十方諸佛の御方便よりたまはりたるを知るべし 29 しかれば「諸佛の御教を謗ることなし、餘の善根を行ずる人を誹ることなし 30 この念佛する人を憎み誹る人を憎

み講ることあるべからず、あはれみをなし、悲しむ情をもつべし」とこそ聖人は仰言ありしか<sup>31</sup>あなかしこあなかしこ<sup>32</sup>佛恩の深きことは懈慢邊地に往生し疑城胎宮に往生するだにも、彌陀の御誓のなかに、第十九第二の願の御あはれみにてこそ、不可思議のたのしみに遇ふことにて候へ<sup>33</sup>佛恩の深きこと其の際もなし<sup>34</sup>いか況んや、眞實の報土へ往生して大涅槃のさとりを開かんこと佛恩よく御案ども候ふべし<sup>35</sup>これ更に性信房、親鸞がはからひ申すにはあらず候、ゆめ／＼<sup>36</sup>建長七歳乙卯十月三日<sup>37</sup>愚禿親鸞八十三歳書之<sup>38</sup>此御書者自性信聖之遺跡一以二聖人御自筆之本寫三與彼門弟中一云々

信心を獲たる人は必ず正定聚の位に住するが故に「等正覺の位」と申すなり<sup>2</sup>大無量壽經には攝取不捨の利益に定る者を「正定聚」となづけ<sup>3</sup>無量壽如來會には「等正覺」と説きたまへり<sup>4</sup>その名こそかはりたれども、正定聚等正覺は一つ意一つ位なり<sup>5</sup>等正覺と申す位は補處の彌勒と同じ位なり<sup>6</sup>彌勒と同じく、このたび無上覺にいたるべき故に「彌勒と同じ」と説きたまへり<sup>7</sup>さて「大經」には「次如彌勒」とは申すなり<sup>8</sup>彌勒はすでに佛に近くましませば「彌勒佛」と諸宗のならひは申すなり<sup>9</sup>しかれば彌勒に同じ位なれば正定聚の人は「如來と等し」とも申すなり<sup>10</sup>淨土の眞實信心の人はこの身こそあさましき不淨造惡の身なれども、心は已に如來と等しければ「如來と等し」と申すこともあるべしと知らせたまへ<sup>11</sup>彌勒はすでに無上覺にその心さだまりてあるべきにならせたまふによりて「三會の曉」と申すなり<sup>12</sup>淨土眞實の人もこの意を心得べきなり<sup>13</sup>光明寺の和尚の「般舟讚」には「信心の人はその心すでに常に淨土に居す」と釋したまへり<sup>14</sup>「居す」といふは「淨土に信心の人の心つねに在りたり」といふ意なり<sup>15</sup>これは「彌勒と同じ」といふことを申すなり<sup>16</sup>こ

れは等正覺を「彌勒と同じ」と申すによりて「信心の人は如來と等し」と申す意なり<sup>17</sup>正嘉元年丁巳十月十日<sup>18</sup>親鸞<sup>19</sup>性信御房

四 これは經の文なり<sup>2</sup>華嚴經に言はく「信心歡喜者與諸如來等」といふは「信心よろこぶ人はもろ／＼の如來と等し」といふなり<sup>3</sup>もろ／＼の如來と等し」といふは「信心を獲て殊によりこぶ人は釋尊のみことには「見敬得大慶則我善親友」と説きたまへり<sup>4</sup>また彌陀の第十七の願には「十方世界無量諸佛不悉咨嗟稱我名者不取正覺」と誓ひたまへり<sup>5</sup>願成就の文には「よろづの佛にほめられ、よろこびたまふ」と見えた<sup>6</sup>少しも疑ふべきにあらず<sup>7</sup>これは「如來と等し」といふ文ともあらはししるすなり<sup>8</sup>正嘉元年丁巳十月十日<sup>9</sup>親鸞<sup>10</sup>眞佛御房

五 自然法爾事<sup>1</sup>「自然」といふは「自」は「おのづから」といふ、行者のはからひにあらず<sup>2</sup>然といふは「しからしむ」といふことばなり<sup>3</sup>「しからしむ」といふは、行者の計にあらず<sup>4</sup>如來の誓にてあるが故に「法爾」といふ<sup>5</sup>「法爾」といふはこの如來の御誓なるが故に然らしむるを「法爾」といふなり<sup>6</sup>法爾はこの御誓なりける故に、およそ行者の計の無きを以て、この法の徳の故に然らしむといふなり<sup>7</sup>すべて人のはじめてはからはざるなり<sup>8</sup>このゆゑに義なきを義とすと知るべしとなり<sup>9</sup>「自然」といふは「もとより然らしむる」といふことばなり<sup>10</sup>彌陀佛の御誓のもとより行者の計にあらずして「南無阿彌陀佛」とたのませたまひて迎へんと計らはせたまひたるによりて、行者の善からんとも悪しからんとも思はぬを「自然」とは申すぞと聞きて候<sup>11</sup>誓のやうは「無上佛に成らしめん」と誓ひたまへるなり<sup>12</sup>無上佛と申すは形も無くまします、かたちもまし

まさぬ故に「自然」とは申すなり<sup>14</sup>かたちましますと示す時には「無上涅槃」とは申さず<sup>15</sup>かたちましますま  
ぬやうを知らせんとて始めて「彌陀佛」と申すとぞ聞きならひて候<sup>16</sup>彌陀佛は自然のやうを知らせん料なり<sup>17</sup>  
この道理を心得つる後にはこの自然のことは常に沙汰すべきにはあらざるなり<sup>18</sup>常に自然を沙汰せば「義なき  
を義とす」といふことはなほ義のあるなるべし<sup>19</sup>これは佛智の不思議にてあるなるべし<sup>20</sup>正嘉元年十二月  
十四日 ○ 21愚禿親鸞 八十六歳

何よりも去年今年、老少男女多くの人々の死にあひて候ふらんことこそあはれに候へ<sup>2</sup>たゞし生死無常の  
理<sup>3</sup>くはしく如來の説きおかせ在りまして候ふ上は驚き思召すべからず候<sup>4</sup>まづ善信が身には臨終の善惡をば  
申さず<sup>5</sup>信心決定の人は疑無ければ正定聚に住することにて候ふなり<sup>6</sup>さればこそ愚癡無智の人も終もめで  
たく候へ<sup>7</sup>如來の御はからひにて往生するよし人々に申され候ひける、毫も違はず候ふなり<sup>8</sup>としごろ各々に  
申し候ひしこと違はずこそ候へ<sup>9</sup>かまへて學匠沙汰せさせたまひ候はで往生を遂げさせたまひ候ふべし<sup>10</sup>故法  
然聖人は「淨土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを確に承り候ひし上に<sup>11</sup>物も覺えぬあさましき  
人々の参りたるを御覽じては「往生必定すべし」とて笑ませたまひしを見まらせ候ひき<sup>12</sup>文沙汰してさがさ  
がしき人の参りたるをば「往生はいかゝあらんすらん」と確に承りき<sup>13</sup>今にいたるまで思ひあはせられ候ふ  
なり<sup>14</sup>人々に賺されさせたまはで御信心たじろかせたまはずして、おのゝ御往生候ふべきなり<sup>15</sup>たゞし人に  
賺させたまひ候はずとも、信心の定まらぬ人は正定聚に住したまはずして浮かれたまひたる人なり<sup>16</sup>乘信  
房にかやうに申し候ふやうを人々にも申され候ふべし<sup>17</sup>あなかしこく ○ 17文應元年十一月十三日 18善信 八

十八歳 ○ 19乘信御房 ○ 20この御消息の正本は坂東下野國おほうち御莊高田にこれあるなりと云々。

諸佛等同と云ふ事 ○ 2 往生は何事もく凡夫の計ならず、如來の御誓に任せ参らせられたればこそ他力にては  
候へ<sup>3</sup>様々にはからひあうて候ふらん、をかしく候<sup>4</sup>如來の誓願を信する心の定まると申すは攝取不捨の利益  
にあづかる故に不退の位に定まると御心得候ふべし<sup>5</sup>眞實信心の定まると申すも金剛の信心の定まると申すも  
攝取不捨の故に申すなり<sup>6</sup>さればこそ無上覺に至るべき心のおこると申すなり<sup>7</sup>これを「不退の位」とも申し、  
「正定聚の位に至る」とも申し、「等正覺に至る」とも申すなり<sup>8</sup>この心の定まるを十方諸佛のよろこびて「諸佛  
の御心に等し」と讃めたまふなり<sup>9</sup>この故にまことの信心の人をば「諸佛と等し」と申すなり、また「補處の  
彌勒と同じ」とも申すなり<sup>10</sup>この世にて眞實信心の人を護らせたまへばこそ「阿彌陀經」には「十方恆沙の諸  
佛護念す」とは申すことにては候へ<sup>11</sup>安樂淨土へ往生して後に護りたまふ」と申すことにては候はず、娑婆世  
界にいたるほど護念す」とは申すことなり<sup>12</sup>信心まことなる人の心を十方恆沙の如來の讃めたまへば「佛と等  
し」と申すことなり<sup>13</sup>また他力と申すことは義なきを義とすと申すなり<sup>14</sup>義と申すことは行者の各の計ふこと  
を義とは申すなり<sup>15</sup>如來の誓願は不可思議にまします故に佛と佛との御はからひなり、凡夫のはからひにあら  
ず<sup>16</sup>補處の彌勒菩薩を初として佛智の不思議を計ふべき人は候はず<sup>17</sup>然れば「如來の誓願には義なきを義とす」  
とは大師聖人の仰に候ひき<sup>18</sup>この心の他に往生に在るべきこと候はずと心得てまかりすぎ候へば、人の仰言に  
はいらぬものにて候ふなり ○ 19二月廿五日 20親鸞 ○ 21淨信御房 御返事

八 又「五説」といふはよろづの經を説かれ候ふに五種には過ぎず候ふなり<sup>2</sup>一には佛説、二には聖弟子の説、

三には天仙の説、四には鬼神の説、五には變化の説といへり。この五のなかに佛説を用ひて上の四種をたのむべからず候。この『三部經』は釋迦如來の自説にてましますと知るべしとなり。四土といふは一には法身の土、二には報身の土、三には應身の土、四には化土なり、いまこの安樂淨土は報土なり。三寶といふは一には佛寶、二には法寶、三には僧寶なり、いまこの淨土宗は佛寶なり。四乘といふは一には佛乘、二には菩薩乘、三には緣覺乘、四には聲聞乘なり、いまこの淨土宗は菩薩乘なり。二教といふは一には頓教、二には漸教なり、いまこの教は頓教なり。二藏といふは一には菩薩藏、二には聲聞藏なり、いまこの教は菩薩藏なり。二行といふは一には正行、二には雜行なり、いまこの淨土宗は正行を本とするなり。三超といふは一には堅超、二には横超なり、いまこの淨土宗は横超なり、堅超は聖道自力なり。一縁といふは一には無縁、二には有縁なり、いまこの淨土は有縁の教なり。一住といふは一には止住、二には不住なり、いまこの淨土の教は法滅百歲まで住したまひて有情を利益したまふとなり。不住は聖道諸善なり、諸善はみな龍宮へかくれりたまひぬるなり。一思不思といふは、思議の法は聖道八萬四千の諸善なり、不思といふは淨土の教は不可思議の教法なり。これらは加様にしるし申したり、よく知れらん人にたづね申したまふべし、また詳しくはこの文にて申すべくも候はず。目も見えず候、何事もみな忘れて候ふ上に人にあきらかに申すべき身にもあらず候。よく淨土の學生にとひ申したまふべし、穴賢賢○21閏三月三日 22親鸞

九 誓願・名號同一事 ○2御文くはしく承り候ひぬ。さてはこの御不審しかるべしとも覺えず候。その故は誓願・名號と申してかはりたること候はず、誓願を離れたる名號も候はず、名號を離れたる誓願も候はず。候はく申し候ふもはからひにて候ふなり。たゞ誓願を不思議と信じ、また名號を不思議と一念信じ稱へつる上は何條わがはからひを致すべきき、わけ、しりわくるなど煩はしくは仰せられ候ふやらん、これ皆辭言にて候ふなり。たゞ不思議と信じつる上は、とかく御計あるべからず候。往生の業には私のはからひはあるまじく候ふなり、あなかしこく、10たゞ如來にまかせまらせおはしますべく候、あなかしこく、○11五月五日 12親鸞 ○13教名御房 ○14端書云、この文をもて人々にも見せまらせさせたまふべく候、他力には義なきを義とすとは申し候ふなり。

佛智不思議と信す可き事 ○2御文くはしく承り候ひぬ。さては御法門の御不審に「一念發起のとき無礙の心光に攝護せられまらせ候ふ故につねに淨土の業因決定す」と仰せられ候。これめでたく候、かくめでたくは仰せ候へども、これ皆わたくしの御計になりぬとおほえ候。たゞ不思議と信ぜさせたまひ候ひぬる上は煩はしき計あるべからず候。またある人の候ふなること、○7出世のこゝろおほく淨土の業因すくなし」と候ふなるは心得がたく候。出世と候ふも淨土の業因と候ふも皆一つにて候ふなり。すべてこれなまじひなる御はからひと存じ候。佛智不思議と信ぜさせたまひ候ひなば別に煩はしく兎角の御計あるべからず候。11たゞ人々のとかく申し候はんことをば御不審あるべからず候。12たゞ如來の誓願にまかせまらせたまふべく候、とかくの御はからひあるべからず候ふなり、あなかしこく、○13五月五日 14親鸞、御判 ○15淨信御房へ ○16端書云、

他力と申し候ふは、とかくのはからひなきを申し候ふなり。

四月七日の御文、五月廿六日たじかに見候ひぬ。さては仰せられたること、信の一念、行の一念、たつなれども、信を離れたる行もなし、行の一念をはなれたる信の一念もなし。その故は「行」と申すは「本願の名號を一聲となへて往生す」と申すことを聞きて一聲をも稱へ、もしは十念をもせんは行なり。この御誓をき、疑ふ心の少も無きを「信の一念」と申すなり。信と行と二ときけども、行を一聲すると聞きて疑はねば、行を離れたる信は無しと聞きて候。また信を離れたる行なしと思召すべし。これ皆彌陀の御誓と申すことを心得べし、行と信とは御誓を申すなり、穴賢々々。〇7のち候は、必ず上らせたまふべし。〇8五月二十六日、親鸞尋ね仰せられ候ふ念佛の不審の事。念佛往生と信する人は邊地の往生とて嫌はれ候ふらんことおほかた心得難く候。その故は彌陀の本願と申すは「名號を稱へん者をば極樂へ迎へん」と誓はせ給ひたるを深く信じて稱ふるがめでたきことにて候ふなり。信心ありとも名號を稱へざらんは詮なく候。又一向名號を稱ふとも信心あさくば往生しがたく候。されば念佛往生と深く信じてしかも名號を稱へんするは疑無き報土の往生にてあるべく候ふなり。詮するところ、名號を稱ふといふとも他力本願を信ぜざらんは邊地に生るべし。本願他力を深く信ぜんともがらは何事にかは邊地の往生にて候ふべき。このやうをよく御心得候うて御念佛候ふべし。この身は今歳きはまりて候へば定めてさきだちて往生し候はんすれば、淨土にて必ず待ちまらせ候ふべし、あなかしこ。〇10七月十三日、親鸞。〇12有阿彌陀佛、御返事。

攝取不捨の事。〇2尋ね仰せられて候ふ攝取不捨の事は「般舟三昧行道往生讚」と申すに仰せられて候ふ

を見まらせ候へば。釋迦如來彌陀佛等が慈悲の父母にて様々の方便にてわれらが無上の信心をば開き發させたまふ」と候へば。まことの信心の定まることは釋迦彌陀の御はからひと見えて候。往生の心うたがひ無くなり候ふは攝取せられまらせたる故と見えて候。攝取の上にはともかくも行者の計あるべからず候。淨土へ往生するまでは不退の位にておはしませ候へば、「正定聚の位」となづけおはしますことにて候ふなり。まことの信心をば釋迦如來彌陀如來一尊の御計にて發起せしめたまひ候ふと見えて候へば、信心の定まると申すは攝取に與かる時にて候ふなり。その後は正定聚の位にてまことに淨土へ生る、までは候ふべしと見え候ふなり。ともかくも行者のはからひ塵ばかりもあるべからず候へばこそ他力と申す事にて候へ、あなかしこ。あなかしこ。〇11十月六日、親鸞。御判。〇13眞佛御房御返事。

畏りて申し候。〇2「大無量壽經」に「信心歡喜」と候。華嚴經を引きて「淨土和讚」にも「信心よろこぶその人を如來とひとしと説きたまふ大信心は佛性なり佛性すなはち如來なり」と仰せられて候ふに、専修の人の中に或人心得違へて候ふやらん。「信心よろこぶ人を如來と等し」と同行達の言ふは自力なり、眞言に偏りたり」と申し候ふなるは人の上を知るべきに候はねども申し候。又「眞實信心うるひとはすなはち定聚の數に入る不退の位に入りぬれば、必ず滅度をさとりしむ」と候。6「滅度をさとりしむ」と候ふは、此度此身の終り候はんとき、眞實信心の行者の心、報土に至り候ひなば、壽命無量を體として光明無量の徳用離れたまはざれば、如來の心光に一味なり。7この故に「大信心は佛性なり佛性すなはち如來なり」と仰せられて候ふやらん。これは十一、十二の御誓と心得られ候。罪惡の吾等がために發したまへる大悲の御誓のめでたくあはれに

まします嬉しき心も及ばれず、言葉も絶えて申し盡し難きこと限りなく候。10 無始曠劫よりこのかた過去遠々に  
 恆沙の諸佛の出世のみもとにて大菩提心おこすといへども、自力かなはず。11 二尊の御方便に催されまらせ  
 て、難行・難修・自力・疑心の思無し。12 無礙光如來の攝取不捨の御あはれみのゆゑに疑心なく喜びまらせ、一  
 念にて往生定まりて誓願不思議と心得候ひなんには。13 聞き見候ふに飽かぬ淨土の聖教も、知識に遇ひまらせ  
 んと思はん事も、攝取不捨も信も念佛も人のためと覺えられず候。14 いま師主の御教の故心をぬきて御意向を伺  
 ひ候ふによりて、願意をさとり直道を求め得てまさしき眞實報土に至り候はんこと、このたび一念聞名にいた  
 るまで、嬉しき御恩のいたりに候。15 その上、「彌陀經義集」におろく明らかに仰せられ候。16 しかるに世間の  
 忽々に紛れて一時も時は二時三時忘るといへども、晝夜に忘れず御あはれみを喜ぶ業力ばかりにて。17 行住坐臥  
 に時處の不淨をもきはらず、一向に金剛の信心ばかりにて、佛恩のふかさ師主の恩徳のうれしさ、報謝のため  
 になし、然るべくはよく／＼こまかに仰を蒙り候はんとして僅に思ふばかりを記して申し上げ候。19 扱は京に久し  
 く候ひしに忽々にのみ候ひて心靜に覺えず候ひしことの歎かれ候ひて、わざといかにしても罷り上りて心しづ  
 かにせめては五日御所に候はゞやとねがひ候ふなり。20 噫かうまで申し候ふも御恩の力なり。○21 進上聖人の御  
 所へ蓮位御房申させ給へ。○22 十月十日。23 慶信 上。在判。○24 追て申上候。○25 念佛申し候ふ人々の中に  
 「南無阿彌陀佛」と稱へ候ふひまには「無礙光如來」と稱へまゐらせ候ふ人も候。26 これをき、て或人の申し候  
 ふなる「南無阿彌陀佛」と稱へての上に「歸命盡十方無礙光如來」と稱へまゐらせ候ふことは恐あることにて

五二六

こそあれ、いまめかはしくと申し候ふなる、このやういか候ふべき。

尋ね仰せられて候ふ事返す／＼めでたく候。まことの信心を獲たる人は既に佛になりたまふべき御身とな  
 りて在します故に「如來と等しき人」と經に説かれて候ふなり。彌勒は未だ佛になり給はねども此度必ず佛に  
 なりたまふべきによりて、彌勒をば既に「彌勒佛」と申し候ふなり。その定に、眞實信心を獲たる人をば「如  
 來と等し」と仰せられて候ふなり。又乘信房の「彌勒と等し」と候ふも僻事にては候はねども「他力によりて  
 信を獲て歡ぶ心は如來と等し」と候ふを「自力なり」と候ふらんは、今少し乘信房の御心の底のゆきつかぬや  
 うにき、候ふこそよく御案あるべくや候ふらん。自力の心にて「わが身は如來と等し」と候はんはまことに惡  
 しく候ふべし。他力の信心の故に乘信房の喜ばせたまひ候ふらんは何かは自力にて候ふべき、よく／＼御計ひ  
 候ふべし。このやうはこの人々にくはしく申して候。乘信御房に問ひまゐらせたまふべく候、あなかしこ／＼  
 ○ 9 十月廿七日。10 親鸞。○11 南無阿彌陀佛を稱へての上に無礙光如來を申すは惡しきことなりと候ふなるこ  
 そ極れる僻言と聞え候へ。12 歸命は南無なり、無礙光佛は光明なり智慧なり、この智慧は即ち阿彌陀佛なり。13 阿  
 彌陀佛の御かたちを知らせたまはねばその御かたちを確にく知らせまゐらせんとて世親菩薩御力を盡してあ  
 らはしたまへるなり。14 この他のことは少々文字をなほしてまゐらせ候ふなり。○15 慶信御房 御返事。16 親鸞  
 何よりも聖教の教をも知らず、又淨土宗の眞の底をも知らずして、不可思議の放逸無慚の者どもものなかに  
 「惡は思ふさまに振舞ふべし」と仰せられ候ふなるこそ、返す／＼あるべくも候はず。2 北の郡にありし善證房  
 といひし者に終に相睦る、ことなくて止みにしをば見ざりけるにや。凡夫なればとて何事も思ふ様ならば、盜

一三

をもし、人をも殺しなんどすべきかは、<sup>4</sup>もと盗心あらん人も極樂を願ひ念佛を申すほどのことになりなば、も  
と僻<sup>3</sup>うたる心をも思ひなほしてこそあるべきに、其のしるしも無からん人々に「悪くるしからず」といふこと、  
ゆめ／＼あるべからず候<sup>5</sup>。煩惱に狂はされて思はざるほかに爲まじきことをも振舞ひ、言ふまじきことをも言  
ひ、思ふまじきことをも思ふにてこそあれ、<sup>6</sup>さはらぬことなればとて人の爲にも腹くろく、爲まじきことをも  
し、言ふまじきことをも言はば、煩惱に狂はされたる儀にはあらで、わざと爲まじきことをもせば、返す／＼  
あるまじき事なり。鹿島行方の人々の悪しからんことをば言ひとゞめ、その邊の人々の殊に僻みたることを  
ば制したまはゞこそ、この邊より出で來たるしるしにては候はめ。振舞は何とも心に任せよ」と言ひつると  
候ふらん、あさましきことに候。この世の悪きをも棄てあさましき事をも爲ざらんこそ世を厭ひ念佛申すこと  
にては候へ。10としごろ念佛する人などの、人の爲に悪しきことをし、また言ひもせば、世を厭ふしるしもな  
し。されば善導の御教には「悪を好む人をば敬ひて遠ざかれ」とこそ至誠心の中には教へおかせおはしまして  
候へ。11いつか「わが心の悪きにまかせて振舞へ」とは候。12おほかた、經釋をも知らず、如來の御言をも知らぬ  
身にゆめ／＼その沙汰あるべくも候はず、あなかしこく。14十一月廿四日 15親鸞

【七】他力の中には自力と申すことは候ふと聞き候ひき。他力の中にまた他力と申すことは聞き候はず。他力の  
中に自力と申すことは難行難修・定心念佛を心懸けられて候ふ人々は他力の中の自力の人々なり。他力の中に  
また他力と申すことは承り候はず。何事も専信房のしばらくも居たらんと候へばそのとき申し候ふべし、穴  
賢穴賢。6錢貳拾貫文體に／＼給はり候。穴賢々々。7十一月二十五日 8親鸞

【八】御尋ね候ふことは、彌陀他力の廻向の誓願に値ひたてまつりて眞實の信心をたまはりてよろこぶ心の定ま  
る時攝取して捨てられまらざる故に、金剛心になる時を「正定聚の位に住す」とも申す。彌勒菩薩と同じ  
位になる」とも説かれて候ふめり。彌勒と一つ位になる故に、信心まことなる人を「佛に等し」とも申す。ま  
た諸佛の眞實信心を獲てよろこぶをば眞によるこびて「われと等しき者なり」と説かせたまひて候ふなり。大  
經には、釋尊のみことばに「見敬得大慶、則我善親友」とよろこばせたまひ候へば、信心を獲たる人は諸佛  
と等しと説かれて候ふめり。また彌勒をば已に佛にならせたまはんことあるべきにならせたまひて候へばとて  
彌勒佛と申すなり。然れば已に他力の信を獲たる人をも「佛と等し」と申すべしと見えたり。御疑あるべか  
らず候。御同行の「臨終を期して」と仰せられ候ふらんは力及ばぬことなり。信心まことにならせたまひて候  
ふ人は誓願の利益にて候ふうへに「攝取して捨てず」と候へば來迎臨終を期せさせたまふべからずとこそ覺え  
候へ。10未だ信心定まらざらん人は臨終をも期し、來迎をも待たせたまふべし。11この御文主の御名は隨信房と仰  
せられ候はゞめでたく候ふべし。12この御文の書様めでたく候。13御同行の仰せられやうは心得ず候。それをば力  
およばず候。あなかしこく。14十一月廿六日 15親鸞 16隨信御房

【九】御文度々まらせ候ひき、御覽せずや候ひけん。何事よりも明法御房の往生の本意遂けて在しまし候ふこ  
そ常陸國うちの此にこゝろざし在します人々の御爲にめでたきことにて候へ。往生はともかくも凡夫の計にて  
爲べきことにて候はず、めでたき智者も計らふべきことにも候はず、大小の聖人だにもともかくも計はでた  
だ願力にまかせてこそおはしますことにて候へ。4まして各々のやうに在します人々はたゞこの誓ありと聞き、



南無阿彌陀佛に値ひまるらせたまふこそ、ありがたくめでたく候ふ御果報にては候ふなれ<sup>5</sup>とかく計はせたまふことのめく候ふべからず<sup>6</sup>さきに下しまるらせ候ひし『唯信鈔』、『自力他力』などの文にて御覽候ふべし<sup>7</sup>それこそ此世にとりては善き人々にておはします、すでに往生をもしておはします人々にておは文どもに書かれて候ふには何事もく過ぐべくも候はず<sup>8</sup>法然聖人の御教をよくく御心得たる人々にておはしますに候ひき<sup>9</sup>さればこそ往生もめでたくしておはしました候へ<sup>10</sup>おほかたは年頃念佛申しあひたまふ人々のなかにも偏にわが思ふ様なることをのみ申しあはれて候ふ人々もさふらひき、今もさぞ候ふらんと覺え候<sup>11</sup>明法房などの往生しておはしますも、もとは不可思議の僻事を思ひなんどしたる心をも願しなんどしてこそ候ひしか<sup>12</sup>われ往生すべければとて爲まじきことをもし、思ふまじきことをもおもひ、言ふまじきことをも言ひなどすることはあるべくも候はず<sup>13</sup>貪欲の煩惱に狂はされて欲もおこり、瞋恚の煩惱に狂はされて猜むべくもなき因果をやぶる心もおこり、愚癡の煩惱にまどはされて思ふまじきことなどもおこるにてこそ候へ<sup>14</sup>めでたき佛の御誓のあればとてわざと爲まじき事共をもし、思ふまじき事どもをも思ひなどせんは、よくくこの世の厭はしからず、身の悪き事をも思ひ知らぬにて候へば、念佛に志もなく、佛の御誓にも志の在しませぬにて候へば、念佛せさせたまふともその御志にては順次の往生も難くや候ふべからん<sup>15</sup>よくく此の由を人々に聞かせまるらせさせたまふべく候<sup>16</sup>かやうにも申すべくも候はねども、何となくこの邊の事を御心に懸け合せたまふ人々にて在りましたあひて候へばかくも申し候ふなり<sup>17</sup>この世の念佛の義はやうくく異りあうて候ふれば、とかく申すにおよばず候へども<sup>18</sup>故聖人の御教をよくく承りて在します人々は今ももとのやうに

異らせたまふこと候はず、世かくれなきことなれば聞かせたまひあうて候ふらん<sup>19</sup>淨土宗の義みな異りて在しましあうて候ふ人々も聖人の御弟子にて候へども、やうくくに義を言ひかへなどして身も惑ひ人をも惑はかしあうて候ふめり、淺ましきことにて候ふなり<sup>20</sup>京にも多く惑ひあうて候ふめり、田舎はさこそ候ふらめとこころにくくも候はず<sup>21</sup>何事も申し盡しがたく候、又々申し候ふべし<sup>22</sup>この明教房の上られて候ふことまことにありがたきこと、覺え候<sup>23</sup>明法御房の御往生の事をまのあたり聞き候ふも嬉しく候<sup>24</sup>人々の御志もありがたく覺え候、かたぐこの人々の上り不思議のことに候<sup>25</sup>この文をたれぐにも同じ心に讀み聞かせたまふべく候<sup>26</sup>この文は奥郡におはします同朋の御中に皆同じく御覽候ふべし、穴賢々々<sup>27</sup>年ごろ念佛して往生願ふしるしには、もと悪しかりしわが心をも思ひかへして友同朋にも懇に心のおはしましたあは<sup>28</sup>こそ世を厭ふしるしにても候はめとこそ覺え候へ、よくく御心得候ふべし<sup>29</sup>善知識をおろかに思ひ師をそしる者をば謗法の者と申すなり、親をそしる者をば五逆の者と申すなり、同座せされと候ふなり<sup>30</sup>されば北の郡に候ひし善證房は親を罵り、善信をやうくくにそしり候ひしかば、親づき睦じく思ひ候はで近づけず候ひき<sup>31</sup>明法御房の往生の事を聞きながらあとを悪かにせん人々はその同朋にあらず候ふべし<sup>32</sup>無明の酒に酔ひたる人によくく酔を勧め、三毒を久しく嗜み食ふ人によくく毒をゆるして好めと申しあうて候ふらん、不便のことに候<sup>33</sup>無明の酒に酔ひたることを悲しみ、三毒を好み食うて未だ毒も失せはてず、無明の酔も未ださめやらぬに在しましたあうて候ふぞかし<sup>34</sup>よくく御心得候ふべし<sup>35</sup>方々よりの御志の物共數のま、に確に賜はり候<sup>36</sup>明教房の上られて候ふことありがたきことに候、かたぐの御志申しつくしがたく候<sup>37</sup>明法御房の往生のこと驚き申すべ

きにはあらねども、返すくうれしく候、鹿島・行方・奥郡、かやうの往生願はせたまふ人々の皆の御よろこびにて候、又平家の入道殿の御往生の事き、候ふこそ返すくう申すにかぎりなくおほえ候へ、めでたき申しつくすべくも候はず、各々みな往生は一定と思召すべし、39 さりながらも往生を願はせたまふ人々の御中にも御心得ぬ事も候ひき、今もさこそ候ふらめとおほえ候、40 京にも心得ずしてやうく感ひあうて候ふめり、國々にも多くきこえ候、41 法然聖人の御弟子のなかにも「われは雄々しき學生」などとおもひあひたる人々もこの世には皆やうく法文をいひかへて身も惑ひ人をも惑はして煩ひあうて候ふめり、42 聖教の教をも見ず知らぬ各々のやうに在します人々は「往生に障なし」とばかり言ふをき、て悪様に御心得あることおほく候ひき、今もさこそ候ふらめとおほえ候、淨土の教も知らぬ信見房などが申すことによりて僻様にいよくなり合せたまひ候ふらんを聞き候ふこそあさましく候へ、43 まづ各々の昔は彌陀の誓をも知らず阿彌陀佛をも申さず在し候ひしが、釋迦・彌陀の御方便に催されて今彌陀の誓をも聞きはじめて在します身にて候ふなり、45 もとは無明の酒に酔ひて貪欲・瞋恚・愚癡の三毒をのみ嗜み召しあうて候ひつるに、佛の誓を聞きはじめしより無明の酔もやうやう少しづつさめ、三毒をも少しづつ、好まずして、阿彌陀佛の藥を常にこのみ召す身となりて在しあうて候ふぞかし、46 しかるになほ酔もさめやらぬに重ねて酔を勧め、毒も消えやらぬになほ毒を勧められ候ふらんこそあさましく候へ、47 煩惱具足の身なればとて心にまかせて身にも爲まじきことをも許し、口にも言ふまじきことをも許し、意にも思ふまじき事をも許して、いかにも心の儘にてあるべしと申しあうて候ふらんこそ返す返す不便におほえ候へ、48 酔もさめぬさきになほ酒を勧め毒も消えやらぬにいよく毒を勧めんがごとし、49 「藥

あり毒を好め」と候ふらんことはあるべくも候はずとこそおほえ候、50 佛の御名をもき、念佛を申して久しくなりて在し、まさん人々は後世の悪しきことを厭ふしるしこの身の悪しきことをば厭ひ捨てんと思召すしるしも候ふべしとこそおほえ候へ、51 はじめて佛の誓を聞き初むる人々の、わが身の悪く心の悪きを思ひ知りて「この身のやうにては何ぞ往生せんずる」といふ人にこそ「煩惱具足したる身なればわが心の善惡をば沙汰せず迎へたまふぞ」とは申し候へ、52 かく聞きてのち佛を信ぜんと思ふ心深くなりぬるには、まことにこの身をも厭ひ、流轉せん事をも悲しみて、深く誓をも信じ阿彌陀佛をも好み申しなんどする人は「もとも心の儘にて惡事をも振舞ひなんどせじ」と思召しあはせたまは、53 こそ世を厭ふしるしにても候はめ、54 また往生の信心は釋迦彌陀の御勸によりておこるとこそ見えて候へば、さりともまことの心おこらせたまひなんには、いか昔の御心のままたては候ふべき、54 この御中の人々も少々は悪しき様なることの聞え候ふめり、55 師をそしり善知識をかるしめ同行をもあなづりなんどしあはせたまふ由聞き候ふこそ淺ましく候へ、56 すでに謗法の人なり五逆の人なり、なれ睦ぶべからず、57 「淨土論」と申す文には「かやうの人は佛法信する心のなきよりこの心はおこるなり」と候ふめり、58 また至誠心のなかには「かやうに惡をこのまんに慎んで遠ざかれ、近づくべからず」とこそ説かれ候へ、「善知識同行には親しみ近づけ」とこそ説きおかれて候へ、59 惡をこのむ人にも近づきなんどすることは淨土に参りてのち衆生利益に還りてこそさやうの罪人にもしたがひ近づくことは候へ、60 それもわが計にはあらず、彌陀の誓によりて御たすけにてこそ思ふさまの振舞も候はんずれ、61 當時はこの身どものやうにてはいかが候ふべかるらんと覺え候、よくく案ぜさせたまふべく候、62 往生の金剛心のおこることは佛の御はからひよ

りおこりて候へば、金剛心をととりて候はん人はよも師を誘り善知識を侮りなんどすることは候はじとこそ覺え候へ。この文をもて鹿島・行方・南の莊いづかたもこれに志おはしまさん人には同じ御心に讀み聞かせたまふべく候。あなかしこく。〇 64 建長四年二月廿四日

【10】安樂淨土に入り果つればすなはち大涅槃を證るとも、また無上覺を悟るとも、滅度にいたるとも申すは、御名こそ異りたるやうなれども、これみな法身と申す佛の覺を開くべき正因に彌陀佛の御誓を法藏菩薩われらに廻向したまへるを「往相の廻向」と申すなり。この廻向せさせたまへる願を「念佛往生の願」とは申すなり。この念佛往生の願を一向に信じて二心なきを「一向專修」とは申すなり。如来二種の廻向」と申すことはこの二種の廻向の願を信じ二心なきを「眞實の信心」と申す。この眞實の信心のおこることは釋迦・彌陀の二尊の御はからひよりおこりたりと知らせたまふべし、あなかしこく。〇 7 「寶號經」にのたまはく「彌陀の本願は行にあらす善にあらす、たゞ佛名をたもつなり」。名號はこれ善なり行なり。行といふは善をするにしていふ言葉なり。10 本願はもとより佛の御約束と心得ぬるには、善にあらす行にあらざるなり。11 かるがゆるに他力とはまをすなり。12 本願の名號は能生する因なり、能生の因といふはすなはちこれ父なり。13 大悲の光明はこれ所生の縁なり、所生の縁といふはすなはちこれ母なり。

【14】本云 凡斯御消息者、念佛成佛之咽喉、愚癡愚迷之眼目也、可祕々々而已。〇于時文安四年 丁卯二月晦日 〇 奉書寫訖 右筆蓮如

### 親鸞聖人御消息集

【1】何事よりは如来の御本願の弘まらせ給ひて候ふ事かへすくめでたくうれしく候。そのことに各々處處に「われは」といふことを思つて争ふことゆめ／＼あるべからず候。京にも「一念多念」など申す争ふ事の多く候ふやうにあること更々さふらふべからず。たゞ評する所は「唯信鈔」後世物語「自力他力」この御文どもをよく／＼常に見て其の御意に違へず在しますべし。何方の人々にもこの意を仰せられ候ふべし。6 なほ覺束なきことあらば、今日まで生きて候へばわざともこれへ訪ねたまふべし、また便にも仰せたまふべし。7 鹿島行方そのならびの人々にもこの意をよく／＼仰せらるべし。8 一念多念の争なんどのやうに詮なきこと論じごとをのみ申しあはれて候ふぞかし、よく／＼慎むべきことなり、あなかしこく。〇 9 かやうのことを心得ぬ人々はそのこと、なきことを申し合はれて候ふぞ、よく／＼慎みたまふべし、返すく。〇 10 二月三日 11 親鸞

【2】六月一日の御文くはしく見候ひぬ。さては鎌倉にての御訴の様はおろ／＼承りて候。この御文に違はず承りて候ひしに、別の事はよも候はじ」と思ひ候ひしに、御くだりうれしく候。おほかたはこの訴のやうは御身ひとりのことにはあらす候、すべて淨土の念佛者のことなり。このやうは故聖人の御時この身どものやう／＼に申され候ひしことなり、こともあたらしき訴にて候ふなり。性信坊ひとりの沙汰あるべきことにはあらず、念佛申さん人は皆おなじ心に御沙汰あるべきことなり、御身を笑ひ申すべきことにはあらず候ふべし

7 念佛者のものに心得ぬは性信坊の咎に申しなされんは極まれる僻事に候ふべし 8 念佛申さん人は性信坊の片人にこそなりあはせたまふべけれ、母姉・妹などやう／＼に申さるゝことはふるごとにて候 9 さればとて念佛をとゞめられ候ひしが世に曲事の起り候ひしかば、それにつけても念佛を深くたのみて世のいのりに心に入れて申し合せたまふべしとぞおほえ候 10 御文のやうおほかたの陳状よく御はからひども候ひけり、うれしく候 11 詮じさふらふ所は、御身にかぎらず念佛をさん人々は、わが御身の料は思召さすとも、朝家の御ため國民のために念佛をまをし合せたまひさふらはゞめでたう候ふべし 12 往生を不定に思召さん人はまづわが身の往生を思召して御念佛さふらふべし 13 わが身の往生一定と思召さん人は佛の御恩をおほしめさんに御報恩のため念佛候ころに入れて申して「世のなか安穩なれ、佛法ひろまれ」と思召すべしとぞ覺え候 14 よく／＼御案さふらふべし 15 このほかは別の御計あるべしとおほえす候 16 なほ／＼とく御くだりのさふらふこそ嬉しう候へ 17 よく／＼御心に入れて往生一定と思ひ定められ候ひなば、佛の御恩を思召さんには異事は候ふべからず、御念佛を心にいれて申させたまふべしと覺え候 18 なほ／＼とく御くだりのさふらふこそ嬉しう候へ 19 親鸞 ○ 20 性信御坊

一 護念坊の便に教忍御坊より錢二百文御志の物賜はりて候 21 さきに念佛のすゝめのものの方々の御中よりとて確に賜りて候ひき、人々によろこび申させたまふべく候 22 この御返事にて同じ御心に申させたまふべく候 23 さてはこの御尋ね候ふことはまことによき御疑どもにて候ふべし 24 まづ「一念にて往生の業因は足れり」と申し候ふは眞に然るべき事にて候ふべし、さればとて一念のほかに念佛を申すまじきことには候はず 25 そのやうは「唯信鈔」に詳しく候、よく／＼御覽さふらふべし 26 一念のほかに餘るところの念佛は十方の衆生に廻

向すべしと候ふも然るべき事にて候ふべし 27 十方の衆生に廻向すればとて二念三念せんは往生に悪しきことと思召され候はゞ僻事にて候ふべし 28 念佛往生の本願」とこそ仰せられて候へば「多く申さんも一念二稱も往生すべし」とこそ承りて候へ 29 かならず一念ばかりにて往生す」といひて「多念をせんは往生すまじき」と申すことはゆめ／＼あるまじきことなり 30 唯信鈔」をよく／＼御覽さふらふべし 31 また「有念無念」と申す事は他力の法門にはあらぬことにて候、聖道門に申すことにて候ふなり、みな自力聖道の法文なり 32 阿彌陀如來の選擇本願念佛は有念の義にもあらず無念の義にもあらずとまをし候ふなり 33 いかなる人申し候ふとも、ゆめ／＼用ひさせたまふべからず候 34 聖道に申すことを悪しさまにき、なして淨土宗に申すにてぞ候ふらん、さら／＼ゆめ／＼用ひさせたまふまじく候 35 また慶喜と申し候ふことは他力の信心を獲て往生を一定してむすところよろこぶ心を申すなり 36 常陸國中の念佛者の中に有念無念の念佛沙汰のきこえ候ふは僻事に候ふと申し候ひにき 37 たゞ詮する所は他力のやうは行者の計にてはあらず候へば「有念にあらざる無念にあらざる」と申すことを悪しう聞きなして「有念無念」など申し候ひけると覺え候 38 彌陀の選擇本願は行者のはからひの候はねばこそ偏に他力とは申すことにて候へ 39 一念こそよけれ多念こそよけれ」など申す事もゆめ／＼あるべからず候 40 なほ／＼「一念のほかに餘るところの念佛を法界衆生に廻向す」と候ふは、釋迦彌陀如來の御恩を報じ参らせんとて十方衆生に廻向せられ候ふらんは然るべく候へども 41 一念二念三念ををして往生せん人を僻事とは候ふべからず 42 よく／＼「唯信鈔」を御覽候ふべし 43 念佛往生の御誓なれば、一念十念も往生は僻事にあらずと思召すべきなり、あなかしこ／＼ ○ 25 十二月廿六日 26 親鸞 ○ 27 教忍御坊、御返事

四 一。まづ、萬の佛菩薩を輕しめまるらせ、萬の神祇冥道を侮り捨てたてまつると申す事、此事のめく無きことなり。世々生々に無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて萬の善を修行せしかども自力にては生死を出でずありし故に曠劫多生のあひだ諸佛菩薩の御勸によりて今まうあひ難き彌陀の御誓にあひまるらせて候ふ御恩を知らずしてよろづの佛菩薩を仇に申さんは深き御恩を知らず候ふべし。佛法を深く信する人をば天地に在しませ萬の神は影の形に添へるが如くして護らせ給ふ事にて候へば、念佛を信じたる身にて「天地の神を捨て申さん」と思ふことゆめくなきことなり。神祇等だにも捨てられたまはず、何に況んや萬の佛菩薩を仇にも申しおろかに思ひまるらせ候ふべしや。よろづの佛をおろかに申さば念佛信せず彌陀の御名を稱へぬ身にてこそ候はんすれ。詮する所は、虚事を申し僻事を事につれて念佛の人々に仰せられつけて、念佛を止めんとする所の領家地頭名主の御計どもの候ふらんことよくくやうあるべきことなり。その故は、釋迦如來の御言に「念佛する人を誹る者をば「名無眼人」と説き「名無耳人」と仰せおかれたることに候。善導和尚は「五濁増時多疑謗道俗相嫌不用聞見有修行起瞋毒方便破壞競生怨」と確かに釋しおかせたまひたり。この世のならひにて念佛を妨げん人はそのとこの領家地頭名主のやうあることにてこそ候はめ、とかく申すべきにあらす。念佛せん人々はかの妨をなさん人をば憐愍をなし不便に思つて念佛をも懇に申して妨なさんを助けさせたまふべしとこそ古き人は申され候ひしか。よくく御たづねあるべきことなり。12つぎに、念佛せさせたまふ人々のこと、「彌陀の御誓は煩惱具足の人の爲なり」と信ぜられ候ふはめでたきやうなり。13たゞし惡き者のためなりとて殊更に僻事を心にも思ひ身にも口にも申すべしとは淨土宗に申すことならねば、人々にも語る

こと候はず。14おほかたは「煩惱具足の身にて心をも止めがたく候ひながら往生を疑はずせんと思召すべし」とこそ師も善知識も申すことにて候ふに。15「かゝる惡き身なれば僻事を殊更に好みて念佛の人々の障となり、師の爲にも善知識の爲にも咎となさせたまふべし」と申すことはゆめくなきことなり。16彌陀の御ちかひに値ひがたくしてあひまるらせて「佛恩を報じまるせん」とこそ思召すべきに、念佛を止めらるゝことに沙汰しなされて候ふらんこそかへすく心得ず候。あさましきことに候。17人々の僻様に御心得どもの候ふゆゑ有るべくもなき事どもきこえ候、申すばかりなく候。18たゞし、念佛の人僻事をまをし候は、その身ひとりこそ地獄にも落ち天魔ともなり候はめ、よろづの念佛者の咎になるべしとは覺えず候。19よくく御はからひども候ふべし。20なほく念佛せさせたまふ人々よくくこの文を御覽じとかせたまふべし、あなかしこく。○21九月二日

22親鸞 ○23念佛人々御中へ

五 一。文書きて參らせ候。此の文を人々にも讀みて聞かせ給ふべし。遠江の尼御前の御心にいれて御沙汰さふらふらん、かへすくめでたくあはれにおほえ候。よくく京よりよろこび申す由を申し給ふべし。信願坊が申すやうかへすく不便のことなり。惡き身なればとて殊更に僻事をこのみて師のため善知識のために惡しきことを沙汰し、念佛の人々の爲に咎となるべきことを知らずば、佛恩を知らず、よくくはからひたまふべし。また、ものに狂うて死にけん人々のことをもちて信願坊がことをよしあしと申すべきにはあらず。念佛する人の死にやうも、身より病をする人は往生のやうを申すべからず、心より病をする人は天魔ともなり地獄にも墮つることにて候ふべし。心よりおこる病と身よりおこる病とは異なるべければ、心よりおこりて死ぬる人の

ことをよく／＼御はからひ候ふべし。信願坊が申すやうは「凡夫の習なれば悪きこそ本なれば」とて思ふまじき事を好み、身にもすまじきことをし、口にもいふまじきことを申すべきやうに申され候ふこそ信願坊が申様とは心得ず候。9「往生に障礙なければとて僻事を好むべし」とは申したること候はず、かへす／＼心得ず覺え候10詮する所、僻事をさん人はその身ひとりこそともかくもなり候はめ、すべてよろづの念佛者の障礙となるべしとは覺えず候。11また、念佛をとゞめん人はその人ばかりこそいかにもなり候はめ、よろづの念佛する人の咎となるべしとは覺えず候。12「五濁増時多疑謗道俗相嫌不用聞見有修行起瞋毒方便破壞競生怨」とまのあたり善導の御教へさふらふぞかし。13釋迦如來は「名無眼人名無耳人」と説かせたまひて候ふぞかし。14かやうなる人にて念佛をも止め、念佛者をも憎みなんどすることにて候ふらん。15それはかの人を憎まずして、念佛を人々まをしてたすけんと思ひあはせたまへとこそ覺え候へ、あなかしこ／＼。16九月二日 17親鸞○18慈信坊 御返事 ○19入信坊眞淨坊法信坊にも此の文を読み聞かせたまふべし、かへす／＼不便のことに候。20性信坊には春のほりて候ひしによく／＼申して候。21久下殿にもよく／＼よろこび申したまふべし。22この人々の僻事を申しあうて候へばとて、道理をば失はれ候はじとこそ覺え候へ。23世間の事にも然ることの候ふぞかし、領家・地頭・名主の僻事すればとて百姓を惑はすことは候はぬぞかし。24佛法をば破る人なし、佛法者の破るにたとへたるには「師子の身中の蟲の師子をくらふが如し」と候へば、念佛者をば佛法者の破り礙け候ふなり。25よく／＼心得たまふべし。26なほ／＼御文には申しつくすべくも候はず。

一〇 九月廿七日の御文委しく見候ひぬ。さては御志の錢伍貫文十一月九日に賜はりて候。さては田舎の

人々みな「年來念佛せしはいたづらごとにてありけり」とて方々人々やう／＼に申すなることこそかへす／＼不便の事に聞え候へ。やう／＼の文どもを書きて持てるを如何にみなして候ふやらん、返す／＼覺束なく候。5 慈信坊の下りて「わが聞きたる法文こそまことにてはあれ、日頃の念佛は皆いたづらごとなり」と候へばとて、大部の中太郎の方の人は九十なん人とかやみな慈信坊の方へとて中太郎入道を棄てたるとかや、聞き候。7 如何なるやうにて然様には候ふぞ、詮するところ信心の定らざりけると聞き候。如何様なることにて然程に多くの人々のたじろき候ふらん、不便のやうと聞きさふらふ。又、かやうの聞なんど候へば、そらごとも多くさふらふべし。10 また、親鸞も偏頗あるものと聞きさふらへば、力をつくして「唯信鈔」後世物語「自力他力」の文の意ども「一河の譬喩」なんど書きて方々へ人々に下して候ふも皆そらごとになりて候ふと聞え候ふは、如何様に勧められたるやらん、不可思議の事とき、候ふこそ不便に候へ。11 よく／＼聞かせたまふべし、あなかしこ／＼。12 十一月九日 13 親鸞 ○14 慈信御坊

七 一〇 眞佛坊・性信坊・入信坊この人々のこと承り候。かへす／＼歎き覺え候へども力及ばず候。また餘の人々の同じ心ならず候ふらんも力及ばず候。人々の同じ心ならず候へばとかく申すに及ばず、今は人の上も申すべきにあらず候。よく／＼心得たまふべし。11 親鸞 ○12 慈信御坊

八 一〇 さては念佛のあひだの事によりて處せき様に承り候。返す／＼心苦しく候。詮する所、その處の縁ぞ盡きさせたまひ候ふらん。念佛を障へらるなんど申さん事にとまかくも歎き思召すべからず候。念佛止めん人こそいかにもなり候はめ、申したまふ人は何か苦しく候ふべき。餘の人々を縁として念佛を弘めんと計ひ合

せ給ふこと、ゆめくあるべからず候。6 そのとこに念佛の引り候はんことも佛天の御はからひにて候ふべし  
 7 慈信坊がやうく申し候ふなるによりて人々も御心共の様々にならせたまひ候ふ由承り候。返すく不  
 便のことに候。9 ともかくも佛天の御計に任せまらせさせたまふべし。10 其の處の縁盡きて在し候は、  
 何の處にても移らせたまひ候うて在しますやうに御計ひ候ふべし。11 慈信坊が申し候ふ事を頼み思召して、こ  
 れよりは餘の人を強縁として念佛ひろめよ」と申すことゆめく申したること候はず、極れる僻事にて候。12 こ  
 の世の習にて念佛を妨げんことは豫て佛の説きおかせたまひて候へば、驚き思召すべからず。13 やうく慈信  
 坊が申すことをこれより申し候ふと御心得候、ゆめくあるべからず候。14 法門のやうもあらぬ様に申しなし  
 て候ふなり、御耳に聞きいれらるべからず候。極れる僻事どもの聞え候、あさましく候。15 入信坊なども不便  
 に覺えさふらふ、鎌倉に長居して候ふらん、不便に候。16 當時それも煩ふべくてぞさても候ふらん、力及ばず候  
 17 奥郡の人々の、慈信坊に賺されて信心みな浮かれあうて在し候ふなること、かへすくあはれにかなし  
 う覺え候。18 これも人々を賺し申したるやうに聞え候ふこと、かへすくあさましく覺え候。19 それも日ごろ人々  
 の信の定まらず候ひけることあらはれてきこえ候、かへすく不便に候ひけり。20 慈信坊が申すことによりて  
 人々の日頃の信のたじろきあうて在し候ふも、詮する所は人々の信心の眞實ならぬことあらはれて候、  
 よきことにて候。21 それを人々はこれより申したるやうに思召しあうて候ふこそあさましく候へ。22 日ごろ様々の  
 御文どもを書き持ちて在しあうて候ふ甲斐もなく覺え候。23 唯信鈔様々の御文どもは今詮なくなりて  
 候ふと覺え候。24 よく書き持たせたまひて候ふ法門はみな詮なくなりて候ふなり。25 慈信坊に皆したがひてめ

五三三

でたき御文どもは棄てさせたまひあうて候ふと聞え候ふこそ詮なくあはれに覺え候へ。26 よく唯信鈔後  
 世物語 などを御覽あるべく候。27 年ごろ信ありと仰せられあうて候ひける人々は皆そらごとにて候ひけりと  
 聞え候、あさましく候。28 何事もくまたく申しさふらふべし。29 正月九日 30 親鸞 31 眞淨御坊  
 九 一 下らせたまひて後な事に候ふらん。2 この源藤四郎殿に思はざるに遇ひまらせて候、便の嬉しさに  
 申し候。3 そののち何事か候、念佛の訴の事しづまりて候ふよし方々より承り候へば嬉しうこそ候へ。今はよ  
 くよく念佛も弘まり候はんすらんと喜びいりて候。6 これにつけても御身の料は今定まらせたまひたり。7 念佛を  
 御心にいれてつねに申して、念佛をしらん人々此世後の世までの事をいのりあはせたまふべく候。御身ども  
 の料は御念佛は今何かはせさせたまふべき。9 た僻うたる世の人々をいのり彌陀の御誓にいれと思召しあは  
 ば、佛の御恩を報じまらせたまふになり候ふべし。10 よく御心にいれて申し合せたまふべく候。11 聖人の廿  
 五日の御念佛も詮する所はかやうの邪見の者をたすけん料にこそ申しあはせたまへと申すことにて候へば、よ  
 くよく念佛誂らん人をたすかれと思召して念佛しあはせたまふべく候。12 また何事も度々便には申し候ひき、源  
 藤四郎殿の便に嬉しうて申し候、あなかしこく。13 入西御坊の方へも申したう候へども同じことなればこのや  
 うを傳へたまふべく候、あなかしこく。14 親鸞 15 性信御坊へ  
 一〇 人々の仰せられて候。十二 光佛の御事のやう書きしるして下しまるらせ候。くはしく書きまらせ候ふ  
 べきやうも候はず、おろく書きしるして候。詮する所は、無礙光佛とまをしまるらせ候ふことを本とせさせ  
 たまふべく候。無礙光佛はよろづのもの、あさましきわるき事には障り無くたすけさせたまはん料に無礙光佛

と申すと知らせたまふべく候、あなかしこく〇十月廿一日 親鸞〇唯信御坊 御返事

一 諸佛稱名の願と申し「諸佛菩薩の願」と申し候ふなるは十方衆生を勸めん爲と聞えたり、又十方衆生の疑心を止めん料と聞えて候、彌陀經の十方諸佛の證誠のやうにて聞えたり、證する所は、方便の御誓願と信じまるらせ候、念佛往生の願は如来の往相廻向の正業正因なりと見えて候、まことの信心ある人は等正覺の彌勒と等しければ如来と等しとも諸佛の讃めさせたまひたりとこそ聞えて候へ、また彌陀の本願を信じ候ひぬる上には義なきを義とすこそ大師聖人の仰にて候へ、かやうに義の候ふらんかぎりには他力にはあらず自力なりときこえて候、また他力と申すは佛智不思議にて候ふるときに煩惱具足の凡夫の無上覺のさとりを得さふらふなる事をば佛と佛のみ御はからひなり、さらに行者の計にあらず候、しかれば義なきを義とすと仰のや候ふなり、義と申すことは自力の人の計を申すなり、他力には然れば義なきを義とすと候ふなり、この人々のうはこれにはつや／＼と知らぬことにて候へば、とかく申すべきにあらず候、また來の字は衆生利益のためには「きたる」と申す、方便なり、覺を開きては「かへる」と申す、時にしたがひて「きたる」とも「かへる」とも申すと見えて候、何事もく／＼またく申すべく候、〇二月九日 親鸞〇慶西御坊 御返事

歎異鈔

竊に愚案を廻らして粗古今を勘ふるに、先師の口傳之眞信に異ることを歎き、後學相續之疑惑有ることを思ふに、幸に有縁の知識に依らずば争でか易行の一門に入ることを得ん哉、全く自見の覺悟を以て他力の宗旨を亂ること莫れ、仍て故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留る所聊か之を註す、偏に同心行者の不審を散ぜんが爲なりと、云々。

一 彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるなり」と信じて「念佛まをさん」とおもひたつこゝろの發する時すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり、彌陀の本願には、老少善惡の人をえらばれず、たゞ信心を要とすと知るべし、その故は、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします、しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念佛にまさるべき善なき故に、惡をもおそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なき故にと、云々。

一 おの／＼十餘箇國の境を越えて身命を願みずして尋ね來らしめたまふ御こゝろさし、ひとへに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり、然るに「念佛より他に往生の道をも在知し、また法文等をも知りたるらん」とこゝろにく、思召して在しましてはんべらんは、大きな誤なり、もし然らば、南都北嶺にもゆゝしき學生達多く座せられて候ふなれば、彼の人々にも會ひたてまつりて往生の要よく／＼聞かるべきなり、親鸞におき



ては「たゞ念佛して彌陀にたすけられまらすべし」とよきひとの仰を被りて信するほかに別の子細なきなり  
 念佛はまことに淨土に生るゝたねにてやはんべらん、また地獄に墮つべき業にてやはんべらん、總じても  
 て在知せざるなり、たとひ法然上人に賺されまらせて念佛して地獄に墮ちたりともさらに後悔すべからず候  
 7その故は自餘の行を勵みて佛になるべかりける身が念佛を申して地獄にも墮ちて候は、こそ「賺されたて  
 まつりて」といふ後悔も候はめ、いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし、彌陀の本願  
 まことにおはしまさば釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば善導の御釋虚言したまふべか  
 らず、10善導の御釋まことならば法然の仰そらごとならんや、11法然の仰まことならば親鸞がまをす旨またもて虚  
 しかるべからず候歟、12詮するところ、愚身の信心におきては此の如し、13この上は念佛をとりて信じたてまつら  
 んともまた棄てんとも面々の御計なりと、云々。

一〇 善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや悪人をや、しかるを世の人つねに曰く「悪人なほ往生す、いかに  
 いはんや善人をや」と、この條一旦その謂あるに似たれども本願他力の意趣に背けり、4その故は自力作善の人  
 はひとへに他力をたのむ心缺けたるあひだ彌陀の本願にあらず、しかれども自力の心を廻して他力をたのみ  
 たてまつれば眞實報土の往生を遂ぐるなり、煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離るゝことあるべか  
 らざるを憐みたまひて願をおこしたまふ本意悪人成佛のためなれば他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の  
 正因なり、7よて「善人だに往生す、まして悪人は」と仰せ候ひきと、云々。

四 慈悲に聖道淨土のかはりめあり、2聖道の慈悲といふはものを憫み悲み育むなり、3しかれども思ふが如

五十四

く助け遂ぐることを極めてありがたし、また淨土の慈悲といふは念佛していそぎ佛に成りて大慈大悲心をもて思  
 ふが如く衆生を利益するをいふべきなり、今生にいかん愛し不便と思ふとも存知のごとく助け難ければこの慈  
 悲始終なし、しかれば念佛をすのみぞ未徹りたる大慈悲心にて候ふべきと、云々。

一〇 親鸞は父母の孝養のためとて一遍にても念佛をしたらること未だ候はず、2その故は、一切の有情は皆  
 もて世々生々の父母兄弟なり、何れもくこの順次生に佛に成りて助け候ふべきなり、4わが力にて勵む善に  
 ても候は、こそ念佛を廻向して父母をも助け候はめ、たゞ自力を棄て、いそぎ覺を開きなば、六道四生のあひ  
 だいづれの業苦に沈めりとも、神通方便を以てまづ有縁を度すべきなりと、云々。

六 一 専修念佛のともがらの「わが弟子ひとの弟子」といふ相論の候ふらんこと、もてのほかの子細なり  
 2 親鸞は弟子一人もたす候、その故は、わが計にてひとに念佛をまをさせ候は、こそ弟子にても候はめ、ひ  
 とへに彌陀の御催にあづかりて念佛を申し候ふ人を「わが弟子」とまをすこと極めたる荒涼のことなり、4つ  
 くべき縁あれば伴ひ、はなるべき縁あれば離るゝことのあるをも「師を背きて人につれて念佛すれば往生すべ  
 からざるものなり」など言ふこと不可説なり、如来より賜りたる信心をわがものがほにとりかへさんとまを  
 すにや、かへすなくもあるべからざることなり、6自然の理にあひかなは、佛恩をも知りまた師の恩をも知るべ  
 きなりと、云々。

七 一〇 念佛者は無礙の一道なり、2そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道  
 も障礙することなし、3罪惡も業報を感ずることあたはず、4諸善も及ぶことなき故なりと、云々。

八 念佛は行者のために非行・非善なり。わが計にて行するに非ざれば非行といふ、わが計にてつくる善に非ざれば非善といふ。ひとへに他力にして、自力を離れたる故に、行者のためには非行・非善なりと云々。

九 「念佛まをし候へども踊躍歡喜の心疎に候ふこと又いそぎ淨土へ参りたき心の候はぬは如何にと候ふべきことにて候ふやらん」と申しいで候ひしかば、「親鸞もこの不審ありつるに唯圓房おなじ心にてありけり。よく案じみれば天に躍り地に踊るほどに喜ぶべきことを喜ばぬにていよく「往生は一定」と思ひたまふべきなり。よろこぶべき心を抑へてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねて知ろしめして「煩惱具足の凡夫」と仰せられたることなれば「他力の悲願は此の如きのわれらがためなりけり」と知られていよく頼しくおほゆるなり。また淨土へいそぎ参りたき心の無くて、いさゝか所勞のこともあれば「死なんずるやらん」と心細くおほゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫より今まで流轉せる苦惱の舊里は棄て難く未だ生れざる安養の淨土は戀しからず候ふこと、まことによく「煩惱の興盛に候ふにこそ名残惜しく思へども娑婆の縁盡きて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者をことに憫みたまふなり。これにつけてこそいよく「大悲大願は頼しく往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜の心もあり、いそぎ淨土へも参りたく候はんには「煩惱の無きやらん」とあやしく候ひなまし」と云々。

一〇 「念佛には無義をもて義とす、不可稱不可説不可思議の故に」と、仰せ候ひき。抑もかの御在生の昔、同じ志をして歩を遼遠の洛陽にはけまし、信を一にして心を常來の報土にかけし輩は、同時に御意趣を承りしかども、その人々に伴ひて念佛まをさる、老若その數を知らず在すなかに

の仰にあらざる異義どもを近來は多く仰せられあうて候ふ由傳へ承る謂なき條々の子細のこと。

一 一文不通のともがらの念佛まをすにあうて、汝は誓願不思議を信じて念佛まをすか、また名號不思議を信するかと、言ひ驚かして二つの不思議を子細をも分明に言ひひらかずしてひとの心を惑すこと。この條かへすくも心をとめて思ひ分くべきことなり。誓願の不思議によりて易く持ち稱へ易き名號を案じ出したまひて「この名字を稱へん者を迎へとらん」と御約束あることなれば、まづ「彌陀の大悲大願の不思議にたすけられまらせて生死を出づべし」と信じて「念佛の申さるゝも如來の御はからひなり」と思へば、少しも自の計まじはらざるが故に、本願に相應して眞實報土に往生するなり。これは誓願の不思議をむねと信じたてまつれば名號の不思議も具足して誓願名號の不思議ひとつにしてさらに異なることなきなり。次に自の計をさしはさみて善惡の二つにつきて往生の助け障り二様におもふは誓願不思議をばたのますしてわが心に往生の業を勵みて申すところの念佛をも自行になすなり。この人は名號の不思議をもまた信ぜざるなり。信ぜざれども邊地・懈慢・疑城・胎宮にも往生して果遂の願の故につひに報土に生ずるは名號不思議の力なり。これすなはち誓願不思議の故なれば、たゞ一つなるべし。

一〇 經釋を讀み學せざるともがら往生不定の由のこと。この條すこぶる不足言の義といひつべし。他力眞實の旨をあかせるもろくの正教は本願を信じ念佛をまをさば佛に成る、そのほか何の學問かは往生の要なるべきや。まことにこの理に迷ひはんべらん人はいかにもく學問して本願の旨を知るべきなり。經釋をよみ學すといへども聖教の本意を心得ざる條もとも不便のことなり。一文不通にして經釋のゆくりも知らざらん人の

稱へ易からんための名號におはしますゆゑに易行といふ、<sup>7</sup>學問を旨とするは聖道門なり、難行となづく、<sup>8</sup>「あやまで學問して名聞利養の念に住する人、順次の往生いかゝあらんすらん」といふ證文も候ふぞかし、當時、專修念佛の人と聖道門の人と諍論を企て、「わが宗こそ勝れたれ、ひとの宗は劣りなり」といふほどに、法敵もいできたり謗法もおこるなり、<sup>10</sup>これしかしながら自らわが法を破謗するにあらずや、<sup>11</sup>たとひ諸門こそりて「念佛はかひなき人のためなり、その宗淺し陋し」といふとも、更に争はずして、<sup>12</sup>「われらがごとく下根の凡夫、一文不通の者の信すればたすかるよし、承りて信じ候へば、さらに上根の人のためには陋しくともわれらがためには最上の法にいたします、<sup>13</sup>たとひ自餘の教法は勝れたりとも自が爲には器量およばざれば勤めがたし、<sup>14</sup>われもひともし生死を離れんことこそ諸佛の御本意にておはしませば、御妨あるべからず」とてにくい氣せずば、誰の人がありて仇をすべきや、<sup>15</sup>かつは「諍論のところにはもろくの煩惱おこる、智者遠離すべき」よしの證文さふらふにこそ、<sup>16</sup>故聖人の仰には「この法をば信する衆生もあり、謗る衆生もあるべし」と佛説きおかせたまひたることなれば、我はずでに信じたてまつる、又ひとありて謗るにて「佛説まことなりけり」と知られ候ししかれば「往生はいよく一定」とおもひたまふべきなり、<sup>18</sup>あやまで謗る人の候はざらんこそ、「いかに信する人はあれども謗る人のなきやらん」ともおほえ候ひぬべけれ、<sup>19</sup>かく申せばとて「必ずひとに謗られん」とにはあらず、佛の豫て信謗ともにあるべき旨を知ろしめして「人の疑をあらせじ」と説きおかせたまふことを申すなり」とこそ候ひしか、<sup>20</sup>いまの世には「學問して人の謗をやめん、ひとへに論議問答旨とせん」とかまへられ候ふにや、<sup>21</sup>學問せばいよく如來の御本意を知り悲願の廣大の旨をも存知して、「いやしからん身にて往生

はいかゞ」など危ふまん人にも、本願には善惡淨穢なきおもむきを説き聞かせられ候はゞこそ學生の甲斐にても候はめ、<sup>22</sup>たま／＼何心もなく本願に相應して念佛する人をも「學問してこそ」などと言ひおとさる、<sup>23</sup>と、法の魔障なり佛の怨敵なり、みづから他力の信心かくるのみならず、あやまで他を迷はさんとす、<sup>24</sup>つ、しんでおそるべし、先師の御心に背くことを、かねてあはれむべし、彌陀の本願にあらざることなを、<sup>25</sup>

一〇「彌陀の本願不思議に在しませばとて惡をおそれざる」はまた「本願ほこりとして往生かなふべからず」といふこと、<sup>26</sup>この條本願を疑ふ、善惡の宿業を心得ざるなり、善き心のおこるも宿業の催す故なり、惡事の思はれ爲らるゝも惡業の計ふゆゑなり、故聖人の仰には「兎毛・羊毛の端にる塵ばかりも造る罪の宿業にあらずといふことなしと知るべし」と候ひき、<sup>27</sup>又あるとき「唯圓房は我がいふことをば信するか」と仰の候ひしあひだ、「さん候」とまをされ候ひしかば、「さうらば我が言はんこと違ふまじきか」とかさねて仰の候ひしあひだ、つ、しんで領狀まをされて候ひしかば、「たとへば人千人殺してんや、しからば往生は一定すべし」と仰せ候ひしとき、<sup>28</sup>「仰にては候へども一人もこの身の器量にては殺しつべしとおほえず候」と申されて候ひしかば、「さてはいかに親鸞がいふことを違ふまじきとは言ふぞ」と、<sup>29</sup>これにて知るべし、何事も心にまかせたることならば、往生の爲に千人殺せといはんにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあきによりて害せざるなり、我が心の善くて殺さぬにはあらず、また害せじと思ふとも百人千人を殺すこともあるべし」と仰の候ひしは、<sup>30</sup>吾等が心の善きをば「よし」と思ひ惡しきことをば「あし」と思ひて「本願の不思議にて助けたまふ」といふことを知らざることをおほせの候ひしなり、<sup>31</sup>そのかみ邪見に墮ちたる人あて、「惡を

造りたる者をたすけんといふ願にてましませば」とてわざと好みて悪を造りて「往生の業とすべきよしを言ひて、やう／＼に悪様なることなき候ひしとき<sup>13</sup>御消息に「薬あれとて毒をこのむべからず」とこそ遊ばされて候ふはかの邪執を止めんがためなり、またく「悪は往生の障たるべし」とにはあらず<sup>14</sup>持戒持律にてのみ本願を信すべくば我等いかでか生死を離るべきや、かゝる淺ましき身も本願に値ひたてまつりてこそけに誇られ候へ<sup>15</sup>さればとて身にそなへざらん悪業はよも造られ候はじものを<sup>16</sup>「また海河に網をひき釣をして世を渡る者も野山に猪を狩り鳥を捕りて命を繋ぐ輩も商をし田島を作りて過ぐる人もたゞ同じことなり、さるべき業縁の備せば如何なる振舞もすべし」とこそ聖人は仰せさふらひしに<sup>17</sup>當時は後世者ぶりして善からん者ばかり念佛まをすべきやうに思ひ或は道場に張文をして「何々の事したらん者をば道場へ入るべからず」などといふ事偏へに賢善精進の相を外に示して内には虚假を懐けるものか<sup>18</sup>願に誇りて造らん罪も宿業の催す故なり<sup>19</sup>されば善きことも悪しきことも業報にさしまかせて偏に本願をたのみまらすればこそ他力にては候へ<sup>20</sup>唯信鈔にも「彌陀いばかりの力ましますと知りてか罪業の身なれば救はれ難しと思ふべき」と候ふぞかし<sup>21</sup>本願に誇る心のあらんにつけてこそ他力をたのむ信心も決定しぬべきことにて候へ<sup>22</sup>凡そ悪業煩惱を断じ盡して後本願を信ぜんのみぞ願に誇る思もなくてよかるべきに、煩惱を断じなばすなはち佛なり、佛のために五劫思惟の願その詮なくやましますさん<sup>23</sup>本願ほこりと誠めらるゝ人々も煩惱不淨具足せられてこそ候ふけなれ、それは願にほこらるゝにあらずや<sup>24</sup>いかなる悪を本願ほこりといふ、いかなる悪かほこらぬにて候ふべきぞや、かへりて心をさなきことか。

一〇〇 「一念に八十億劫の重罪を滅すと信すべし」といふこと<sup>2</sup>この條は十惡五逆の罪人、日ごろ念佛を申さずして、命終のときはじめて善知識の教にて一念まをせば八十億劫の罪を滅し、十念まをせば八十億劫の重罪を滅して往生すといへり<sup>3</sup>これは十惡五逆の輕重を知らせんがために一念十念といへるが滅罪の利益なり、未だ我らが信ずるところに及ばず<sup>4</sup>その故は彌陀の光明に照されまらざる故に一念發起するとき金剛の信心を賜りぬれば已に定聚の位に攝めしめたまひて命終すれば諸の煩惱惡障を轉じて無生忍をさとしめたまふなり<sup>5</sup>この悲願ましますばかゝる淺ましき罪人いかでか生死を解脱すべきと思ひて一生の間申すところの念佛は皆悉く「如來大悲の恩を報じ徳を謝す」と思ふべきなり<sup>6</sup>念佛申さん毎に罪を滅さんと信ぜんは既にわれと罪を消して往生せんと勵むにてこそ候ふなれ<sup>7</sup>もし然らば、一生の間おもひとおもふことみな生死の絆に非ざることなければ、いのち盡きんまで念佛退轉せずして往生すべし<sup>8</sup>たゞし業報かぎりあることなれば、いかなる不思議の事にもあひ、また病惱苦痛せめて正念に住せずして終らんに念佛まをすこと難し<sup>9</sup>その間の罪をばいかゞして滅すべきや、罪消えざれば往生はかなふべからざるか<sup>10</sup>攝取不捨の願をたのみたてまつらばいかなる不思議ありて罪業ををかし念佛まをさずしてをはるとも速に往生を遂ぐべし<sup>11</sup>また念佛の申されんもたゞいま覺を開かんする期の近くにしたがひていよく彌陀をたのみ御恩を報じたてまつるにてこそ候はめ<sup>12</sup>罪を滅せんと思はんは自力の心にして臨終正念といひのるひとの本意なれば他力の信心なきにて候ふなり。

一〇一 煩惱具足の身をもて已に覺を開くといふこと<sup>2</sup>この條もてのほかの事に候<sup>3</sup>即身成佛は眞言祕教の本意三密行業の證果なり、六根清淨はまた法華一乘の所説四安樂の行の感徳なり、これみな難行上根のつと

め観念成就の覺なり 4 來生の開覺は他力淨土の宗旨信心決定の道なるが故なり、これまた易行下根のつとめ、不簡善惡の法なり 5 おほよそ今生に於ては煩惱惡障を斷ぜん事極めてあり難きあひだ、眞言法華を行する淨侶なほもて順次生の覺をいのる 6 いかん況んや戒行慧解ともに無しといへども、彌陀の願船に乗じて生死の苦海を渡り報土の岸に著きぬるものならば煩惱の黒雲はやく霽れ法性の覺月すみやかに顯れて盡十方の無礙の光明に一味にして一切の生を利益せんときにこそ覺にては候へ 7 この身をもて覺を開くと候ふなる人は釋尊の如く種々の應化の身をも現じ三十二相八十隨形好をも具足して説法利益さふらふにや 8 これこそ今生に覺を開く本とは申し候へ 9 和讃に曰く「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ彌陀の心光攝護してながく生死をへだてける」と候ふは、信心の定まる時にひとたび攝取して捨てたまはざれば六道に輪廻すべからず、然ればながく生死をば隔て候ふぞかし 10 此の如く知るを「覺る」とは言ひ紛かすべきや、あはれに候ふをや 11 淨土眞宗には今生に本願を信じて彼土にして覺をば開くとならひ候ふぞ」とこそ故聖人の仰には候ひしか。

一六 信心の行者自然に腹をも立て惡しざまなる事をもをかし同朋同侶にもあひて口論をしては必ず廻心すべしといふこと 2 この條、斷惡修善のこ、ちか 3 一向專修の人に於ては廻心といふことたゞ一度あるべし 4 その廻心とは日ごろ本願他力眞宗を知らざるひと彌陀の智慧を賜りて「日ごろの心にては往生かなふべからず」と思ひて本の心をひきかへて本願をたのみまるるをこそ「廻心」とは申し候へ 5 一切のことに朝夕に廻心して往生を遂げ候ふべくば、人の命は出づる息入るほどをまたすして終ることなれば、廻心もせず柔和忍辱のおもひにも住せざらん前に命つきば攝取不捨の誓願は虚しくならせおはしますべきにや 6 口には「願力をたのみ

たてまつる」といひて、心には「さこそ惡人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすが善からん者をこそたすけたまはんすれ」と思ふほどに願力を疑ひ他力をたのみまるる心缺けて邊地の生を受けんこと、もとも歎き思ひたまふべきことなり 7 信心定まりなば往生は彌陀に計はれまるらせてすることなればわが計なるべからず 8 惡からんにつけてもいよく願力を仰ぎまるらせば自然の理にて柔和忍辱の心も出でくべし 9 總て萬の事につけて往生には賢き思を具せずしてたゞほれんと彌陀の御恩の深重なること常におもひ出しまるらすべし 10 しかれば念佛申され候、これ自然なり 11 わが計はざるを自然と申すなり、これ即ち他力にてまします 12 然るを自然といふことの別にあるやうにわれ物知り顔に言ふ人の候ふよし承る、淺ましく候。

一七 邊地の往生を遂ぐる人つひには地獄に墮つべしといふこと 2 この條、何の證文に見え候ふぞや、學生たつる人の中に言ひ出さるゝことにて候ふなるこそあさましく候へ 3 經論正教をばいかやうに見做されて候ふらん 4 信心缺けたる行者は本願を疑ふによりて邊地に生じて疑の罪をつくのひてのち報土の覺を開くとこそ承り候へ 5 信心の行者すくなき故に化土に多く勸めいれられ候ふを「つひに虚しくなるべし」と候ふなるこそ如來に虚妄を申しつけまるらせられ候ふなれ。

一八 佛法の方に施入物の多少にしたがひて大小佛に成るべしといふこと 2 この條不可説なり不可説なり比興のことなり 3 まづ佛に大小の分量を定めんことあるべからず候 4 かの安養淨土の教主の御身量を説かれて候ふもそれは方便報身のかたちなり 5 法性の覺を開いて長短方圓のかたちにもあらず、青黃赤白黒の色をもはなれなば、何をもちか大小を定むべきや 6 念佛をすに化佛を見たてまつるといふ事の候ふなるこそ「大念

には大佛を見、小念には小佛を見る」といへるか、もしこの理などにはしきかけられ候ふやらん、且はまた檀波羅蜜の行ともいひつべし、いかに寶物を佛前にもなげ師匠にも施すとも信心かけなばその詮なし、一紙半錢も佛法の方にいれずとも他方に心をかけて信心ふかくばそれこそ願の本意にて候はめ、11すべて佛法に言を寄せて世間の欲心もある故に同朋をいひおとさるゝにや。

右條々は皆もて信心の異なるより事おこり候ふか、故聖人の御物語に、法然聖人の御とき御弟子その數おはしけるなかに同じ御信心の人も少くおはしけるにこそ、親鸞御同朋の御なかにして御相論のこと候ひけり、その故は「善信が信心も聖人の御信心も一つなり」と仰の候ひければ、勢觀房念佛房などまをす御同朋達もての外に争ひたまひて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心一つにはあるべきぞ」と候ひければ、聖人の御智慧才覺ひろくおはしますに一つならんと申さばこそ僻事ならめ、往生の信心に於ては全く異なることなし、たゞ一つなり」と御返答ありけれども、なほ「いかでかその義あらん」といふ疑難ありければ、詮するところ聖人の御前にて自他の是非を定むべきにて、この子細をまをし上げれば、法然聖人の仰には「源空が信心も如来よりたまはりたる信心なり、善信房の信心も如来よりたまはせたまひたる信心なり、さればたゞ一つなり、別の信心にておはしなさん人は源空が參らんする淨土へはよも參らせたたまひ候はじ」と仰せ候ひしかば、當時一向專修の人々の中にも親鸞の御信心に一つならぬ御ことも候ふらんとおほえ候、11いづれも、縦言にて候へどもかきつけ候ふなり、12露命わづかに枯草の身にかゝりて候ふほどにこそ、相伴はしめたまふ人々御不審をも、承り聖人の仰の候ひし趣をも申し聞かせまらせ候へども、13閉眼の後はさこそしどけなき事共にて候は

んすらめと歎き存じ候ひて、14此の如くの義ども仰せられあひ候ふ人々にも言ひ迷はされなんとせらるゝ、事の候はん時は、故聖人の御心にあひかなひて御用る候ふ御聖教どもをよく、御覽さふらふべし、15おほよそ聖教には眞實權假ともに相交り候ふなり、權をすて實をとり、假をさしおきて眞をもちるこそ聖人の御本意にて候へ、かまへて、聖教を見紊らせたまふまじく候、16大切の證文ども少々ぬきいでまらせ候うて目安にしてこの書に添へまらせて候ふなり、17聖人のつねの仰には「彌陀の五劫思惟の願をよく、案すればひとへに親鸞一人が爲なりけり、さればそくばくの業をもちける身にありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と御述懐さふらひしことを、18今また案するに善導の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没み常に流轉して、出離の緣あることなき身と知れ」といふ金言にすこしも違はせおはしなす、19されば辱くわが御身にひきかけて、我らが身の罪惡の深きほどを知らず如来の御恩の高きことをも知らずして迷へるを思ひ知らせんが爲にて候ひけり、20まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして我も人も善惡といふことをのみ申しあへり、21聖人の仰には「善惡の二つ總じてもて存知せざるなり、22その故は、如来の御心に善しと思召すほどに知り徹したらばこそ善きを知りたるにてもあらめ、如来の惡しと思召す程に知り徹したらばこそ惡しきを知りたるにてもあらめ、23煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は萬の事みなもてそらごと、たわごと眞實あること無きに、たゞ念佛のみぞまことに在します」とこそ仰は候ひしか、24まことに我も人もそらごとをのみ申しあひ候ふなかに、一つ痛ましきことの候ふなり、25その故は念佛をすについて信心の趣をも互に問答し人にもいひ聞かするとき、人の口をふさぎ相論を絶たんために、全く仰にてなきことをも仰とのみ申すこと、

淺ましく歎き存じ候ふなり 26 この旨をよく／＼おもひとき心得らるべきことに候 27 これ更に私の言葉にあらずといへども 經釋のゆくちも知らず法文の淺深を心得わけたることも候はねば、定めてをかきしきことにてこそ候はめども、28 故親鸞聖人の仰言さふらひし趣を百分が一片端ばかりをもおもひ出でまらせて書きつけ候ふなり 29 悲きかなや、幸に念佛しながら直に報土に生れずして邊地に宿をとらんこと 30 一室の行者の中に信心異なることなからんために泣く／＼筆を染めてこれをしるす 31 名けて「歎異抄」といふべし、外見あるべからず。

【釋】 後鳥羽院の御宇、法然聖人他力本願念佛宗を興行す 2 時に興福寺の僧侶之を敵奏す 3 御弟子中狼藉子細ある由、無實の風聞によりて罪科に處せらる、人數の事 4 一、法然聖人竝に御弟子七人流罪、又御弟子四人死罪に行はる、なり 5 聖人は土佐の國香多といふ所へ流罪、罪名藤井元彦男と云々、生年七十六歳なり 6 親鸞は越後國、罪名藤井善信と云々、生年三十五歳なり 7 淨聞房 備後國 澄西禪光房 伯耆國 好覺房 伊豆國 行空法本房 佐渡國 11 幸西成覺房善惠房二人同じく遠流に定る、然るに無動寺の善題大僧正これを申しあづかると云々 12 遠流の人々已上八人なりと云々 13 死罪に行はる、人々 14 一番、西意善禪房 2 一番、性願房 3 一番、住蓮房 4 一番、安樂房 14 二位法印尊長の沙汰なり 15 親鸞僧儀を改めて俗名を賜ふ、仍て僧に非ず俗にて非ず、然る間「禿」の字を以て姓と爲して奏聞を経させられたんぬ 16 彼の御申狀今に外記廳に納むと云々 17 流罪以後「愚禿親鸞」と書かしめ給ふなり。

【釋】 右斯聖教者爲當流大事聖教也、於無宿善機無左右不可許之者也○釋蓮如判

執持鈔

一 本願寺聖人の仰に云はく○ 2 來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるが故に、臨終まつこと來迎たのむことは諸行往生の人にいふべし 3 眞實信心の行人は攝取不捨の故に正定聚に住す、正定聚に住するが故に必ず滅度に至る 4 かるがゆゑに臨終まつことなし、來迎たのむことなし 5 是れすなはち第十八の願のこゝろなり 臨終をまち來迎をたのむことは諸行往生を誓ひまします第十九の願のこゝろなり。

一 又云はく○ 2 是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなければども、名利に人師をこのむなり 3 往生淨土の爲にはたゞ信心を先とす、其の他をば顧みざるなり 4 往生ほどの一大事、凡夫の計ふべきことにあらず、ひとすぢに如來にまかせたてまつるべし 5 すべて凡夫に限らず補處の彌勒菩薩を始として佛智の不思議を計ふべきに非ず、まして凡夫の淺智をや かへす／＼如來の御誓にまかせたてまつるべきなり 7 これを他に歸したる信心發得の行者といふなり 8 さればわれとして「淨土へ參るべし」ともまた「地獄へ往くべし」とも定むべからず 9 故聖人 無量壽聖人の御こゝしはなり の仰に「源空があらん處へのかんと思はるべし」とたしかに承りし上は「たとひ地獄なりとも故聖人の渡らせたまふ處へ參るべし」と思ふなり 10 この度もし善知識にあひたてまつらば吾等凡夫かならず地獄に墜つべし 11 然るにいま聖人の御化導にあづかりて彌陀の本願をき、攝取不捨の理を胸にをさめ生死の離れ難きを離れ淨土の生れ難きを一定と期すること、更に私の力にあらず 12 た

とひ彌陀の佛智に歸して念佛するが地獄の業たるをいつはりて「往生淨土の業因ぞ」と聖人授けたまふに賺されまるらせてわれ地獄におつといふとも、更に悔しむ念あるべからず<sup>13</sup>その故は明師にあひたてまつらで止みなましかば決定惡道へ往くべかりつる身なるが故にとなり<sup>14</sup>しかるに善知識に賺されたてまつりて惡道へゆかば一人ゆくべからず師とともに墜つべし<sup>15</sup>されば「たゞ地獄なりといふとも故聖人のわたらせたまふ處へ參らん」とおもひかためたれば「善惡の生所わたくしの定むるところにあらす」といふなりと<sup>16</sup>これ自力をすて、他力に歸するすがたなり。

三 又云はく〇 光明寺の和尚 善導の御こゝの「大無量壽經」の第十八の念佛往生の願の意を釋したまふに善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上縁」といへり<sup>3</sup>この意は「善人なればとて、己が爲すとこゝろの善をもて彼の阿彌陀佛の報土へ生るゝこと、かなふべからず」となり<sup>4</sup>惡人また言ふにやおよぶ、己が惡業の力三惡四趣の生をひくよりほか報土の生因たらんや<sup>5</sup>しかあれば善業も要にたゝず、惡業も妨とならず<sup>6</sup>善人の往生するも彌陀如來の別願超世の大慈大悲にあらずばかなひがたし<sup>7</sup>惡人の往生またかけてもおもひよるべき報佛報土にあらざれども、佛智の不思議なる奇特をあらはさんが爲なれば、五劫が間これを思惟し永劫が間これを行じて、かゝるあさましきものが六趣四生よりほかは棲家もなく浮むべき期なきがために、とりわき旨と發されたれば、惡業に卑下すべからずと、勸めたまふ旨なり<sup>8</sup>されば己を忘れて仰ぎて佛智に歸するまことなくば、己がもつところの惡業なんぞ淨土の生因たらん<sup>9</sup>連にかの十惡五逆四重謗法の惡因にひかれて三途・八難にこそ没むべけれ、何の要にかた、ん<sup>9</sup>しかれば善も極樂に生るゝたねにならざれば往生の爲に

はその要なし、惡も亦さきの如し<sup>10</sup>しかあればたゞ機生得の善惡なり、彼の土の望他力に歸せずば思絶えたり<sup>11</sup>これによりて「善惡凡夫の生るゝは大願業力ぞ」と釋したまふなり<sup>12</sup>増上縁とせざるは莫し」といふは彌陀の御誓のすぐれたまへるに勝れるものなしとなり。

四 又云はく〇 光明名號の因縁といふことあり<sup>3</sup>彌陀如來四十八願の中に第十二の願は「わがひかりきはなからん」と誓ひたまへり<sup>4</sup>これすなはち念佛の衆生を攝取のためなり<sup>5</sup>かの願すでに成就して遍く無礙の光明をもて十方微塵世界を照したまひて衆生の煩惱惡業を長時に照しますます<sup>6</sup>さればこの光明の縁にあふ衆生漸やく無明の昏闇うすくなりて宿善のたね萌すときまさしく報土に生るべき第十八の念佛往生の願因の名號を聞くなり<sup>7</sup>しかれば名號執持すること更に自力にあらす、ひとへに光明に催さるゝによりてなり<sup>8</sup>これによりて「光明の縁にきざして名號の因を獲」と云ふなり<sup>9</sup>かるがゆゑに宗師 善導大師の御事なり「以光明名號・攝化十方・但使信心求念」とのたまへり<sup>10</sup>但使信心求念」といふは光明と名號と父母の如くにて子をそだてはぐくむべしといへども、子となりて出でくべき因なきには父母と名くべきものなし、子のあるとき其がために父といひ母といふ號あり<sup>11</sup>其が如くに光明を母にたとへ名號を父にたとへて「光明の母名號の父」といふことも報土にまさしく生るべき信心の因なくばあるべからず<sup>12</sup>しかれば、信心をおこして往生を求願するとき名號も稱へられ光明もこれを攝取するなり<sup>13</sup>されば名號につきて信心をおこす行者なくば彌陀如來攝取不捨の誓成すべからず、彌陀如來の攝取不捨の御誓なくばまた行者の往生淨土のねがひ何によりてか成ぜん<sup>14</sup>されば「本願や名號名號や本願本願や行者行者や本願」といふ、この謂なり<sup>15</sup>本願寺の聖人の御釋「教行信證」にのた



まはく<sup>16</sup>「德號の慈父ましまさずば能生の因闕けなん、光明の悲母ましまさずば所生の縁乖きなん、光明名號の父母これすなはち外縁とす、眞實信の業識これすなはち内因とす、内外因縁和合して報土の眞身を得證すと見えたり<sup>17</sup>これを譬ふるに日輪須彌の半にめぐりて他州を照すときこのさかひ闇冥たり、他州よりこの南州に近くとき夜すでに明くるがごとし、然れば日輪の出づるによりて夜はあくものなり<sup>18</sup>世の人つねに謂へらく「夜のあけて日輪いづ」と、今言ふ所は然らざるなり<sup>19</sup>彌陀佛日の照觸によりて無明長夜の闇已にはれて安養往生の業因たる名號の寶珠をば獲るなりと、知るべし。

【五】一 私に曰く、<sup>2</sup>根機つたなしとて卑下すべからず、佛に下根を救ふ大悲あり、行業、疎なりとて疑ふべからず、經に乃至一念の文あり、佛語に虚妄なし、本願あに誤あらんや、名號を正定業と名くることは佛の不思議力をたもてば往生の業まさしく定る故なり、<sup>6</sup>もし彌陀の名願力を稱念すとも往生なほ不定ならば正定業とは名くべからず、われ已に本願の名號を持念す、往生の業すでに成辨することをよろこぶべし、<sup>8</sup>かるがゆゑに臨終に復び名號をとなへずとも往生を遂ぐべきこと勿論なり、<sup>9</sup>一切衆生のありさま過去の業因まち／＼なり、また死の縁無量なり、<sup>10</sup>病にかされて死する者あり、剣にあたりて死する者あり、水に溺れて死する者あり、火に焼けて死する者あり、乃至寢死する者あり、酒狂して死するたぐひあり、<sup>11</sup>これみな先世の業因なり、更にのがるべきにあらず、<sup>12</sup>かくの如きの死期に至りて一旦の妄心を發さんほかいかでか凡夫のならひ名號稱念の正念もおこり往生淨土の願心もあらんや、<sup>13</sup>平生のとき期する所の約束もし違は、往生ののぞみむなしかるべし、<sup>14</sup>然れば平生の一念によりて往生の得否は定れるものなり、<sup>15</sup>平生のとき不定のおもひに住せばかなふべから

す、平生のとき善智識の言葉の下に歸命の一念を發得せばそのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべし、<sup>16</sup>そもそも南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり、<sup>17</sup>このこゝろ遍く萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義あり、<sup>18</sup>この能歸の心、所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行・果地の萬徳こと／＼くに名號のなかに攝在して十方衆生の往生の行體となれば、「阿彌陀佛即是其行」と釋したまへり、<sup>19</sup>また殺生罪を造るとき地獄の定業を結ぶも、臨終にかさねて造らざれども、平生の業にひかれて地獄に必ず墜つべし、<sup>20</sup>念佛もまた是の如し、本願を信じ名號を稱ふればその時分にあたりてかならず往生は定るものとなるべし。

執持鈔

【奥書】 一本無三此題號二而有嘉曆元年及曆應三年所レ書之跋、其一本云嘉曆元歲丙寅九月五日老眼染二禿筆一  
 是偏爲レ利ニ益衆生ニ也。釋宗昭 五十七 其二曰先年如レ此予染レ筆與ニ飛彈願智坊ニ訖而今年曆應三歲庚辰十月  
 十五日隨ニ身此書ニ上洛中一日逗留十七日下國仍於ニ燈下ニ馳ニ老筆ニ留レ之爲ニ利益ニ也。宗昭 七十一

口傳鈔

本願寺の賢聖人、如信上人に對しまし、てをり、の御物語の條々。

一〇 ある時の仰にのたまはく、黒谷聖人、淨土眞宗御興行さかりなりし時、上一人よりはじめて偏執の  
 やから一天にみたり、これによりて、かの立宗の義を破せられんがために禁中、時代不審もし土御門院の御字敷にして七  
 日の御逆修をはじめ行はる、ついでに、安居院の法印聖覺を唱導として、「聖道の諸宗のほかに別して淨土宗あ  
 るべからざる」よしこれを申しみだらるべきよし勅請あり、しかりといへども、勅喚に應じながら、師範空聖  
 人の本懐さへぎりて覺悟のあひだ、申しみだらる、に及ばず、あまさへ、「聖道のほかに淨土の正宗興じて凡夫  
 直入の大益あるべき」由をついでをもて殊に申したてられけり、こゝに公庭にして其の沙汰ある由、聖人、源空  
 聞召すについて、「もしこの時申し破られなば淨土の宗義なんぞ立せんや」よりて安居院の坊へ仰せ遣されんと  
 す、誰人たるべきぞや、の由その仁を内々えらばる、ときに、「善信御房その仁たるべき」よし聖人さし申さる、  
 同朋の中に亦「もとも然るべき」由同心に舉し申されけり、そのとき上人、善信かたく御辭退再三に及ぶ、然れ  
 ども貴命のがれ難きによりて使節として上人、善信、安居院の房へ向はしめたまはんとす、時に「緯もとも重事な  
 り、すべからく人を相添へらるべき」由申さしめたまふ、<sup>9</sup>「最も然るべし」とて西意善緯御房をさし添へらる、<sup>10</sup>兩  
 人安居院の坊にいたりて案内せらる、をりふし沐浴と云々、<sup>11</sup>「御使誰人ぞや」と問はる、「善信御房入來あり」と

云々<sup>12</sup>そのときおほきに驚きて「此人の御使たること遷返なり、おほろけの事にあらじ」とて急ぎ温室より出で  
 対面<sup>13</sup>上件の子細をつぶさに聖人<sup>14</sup>の仰とて演説<sup>15</sup>法印申されて曰く「このこと年来の御宿念たり、聖覺い  
 かでか疎簡を存ぜん、たとひ勅定たりといふとも師範の命をやぶるべからず<sup>16</sup>よりて仰を蒙らざるさきに、聖  
 道<sup>17</sup>淨土の二門を混亂せず、あまさへ淨土の宗義を申し立てはんべりき<sup>18</sup>これ然しながら王命よりも師孝を重く  
 するが故なり、御心やすかるべき由申さしめたまふべし」と云々<sup>19</sup>このあひだの一座の委曲、つぶさにするに  
 違あらず<sup>20</sup>すなはち上人<sup>21</sup>善信<sup>22</sup>御歸參ありて公庭一座の唱導として、法印重説の旨を聖人<sup>23</sup>の御前にて一言も  
 おとしましませず分明にまた一座宣説し申さる<sup>24</sup>そのとき差添へらる、善綽<sup>25</sup>御房に對して「もし糺謬ありや」  
 と聖人<sup>26</sup>聖<sup>27</sup>仰せらる、所に、善綽<sup>28</sup>御房申されて曰く「西意二座の説法聽聞つかうまつりをはりぬ、言語の及  
 ぶ所にあらず」と云々<sup>29</sup>二百八十餘人の御門侶の中に、その上足といひその器用といひ、すでに清撰にあたり  
 て使節をつとめます所<sup>30</sup>に西意また證明の發言に及ぶ、恐らくは多寶證明の往事に相同じきものをや、  
 このこと大師聖人の御とき隨分の面目たりき<sup>31</sup>説導も涯分古に耻づべからずといへども「人師<sup>32</sup>戒師停止すべ  
 き」よし聖人の御前にして誓言發願をはりき<sup>33</sup>これによりて權越を諫はず、その請に赴かずと云々<sup>34</sup>その頃七  
 條の源三中務承が遺孫次郎入道淨信、土木の大功ををへて一字の伽藍を造立して「供養の爲に唱導に赴きま  
 しますべき由」を屈請し申すといへども、上人<sup>35</sup>善信<sup>36</sup>つひにもて固辭し仰せられて上件の趣を語り仰せらる<sup>37</sup>その  
 時上人<sup>38</sup>善信<sup>39</sup>權者にましますといへども濁亂の凡夫に同じて不淨説法のとが重きことを示し申すものなり。  
 一〇 光明名號の因縁といふ事〇十方衆生のなかに淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり、いか

んとならば「大經」のなかに説くが如く、過去の宿善厚き者は今生にこの教に値うてまさに信樂す、宿福なき者  
 はこの教に遇ふといへども念持せざればまた遇はざるが若し「欲知過去因」の文の如く、今生の有様にて宿善  
 の有無あきらかに知りぬべし、然るに宿善開發する機<sup>1</sup>のしるしには、善知識にあうて開悟せらる、とき一念疑  
 惑を生ぜざるなり<sup>2</sup>その疑惑を生ぜざることは光明の縁にあふ故なり<sup>3</sup>もし光明の縁もよほさずば、報土往生  
 の眞因たる名號の因をうべからず<sup>4</sup>いふこゝろは、十方世界を照曜する無礙光遍照の明朗なるに照らされて無  
 明沈没の煩惑漸々に融けて涅槃の眞因たる信心の根芽わづかに萌すとき報土得生の定聚の位に住す<sup>5</sup>すなはち  
 この位を「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」とら説けり<sup>6</sup>また光明寺の御釋には「以光明名號攝化  
 十方但使信心求念」とものたまへり<sup>7</sup>しかれば往生の信心の定ることはわれらが智分にあらず、光明の縁に催  
 し育てられて名號信知の報土の因を獲と知るべしとなり、これを他力といふなり。  
 一〇 無礙の光曜によりて無明の闇夜はる、事〇本願寺の上人<sup>1</sup>聖賢あるとき門弟に示してのたまはく「つ  
 ねに人の知るところ夜あけて日輪は出づや、日輪いでて夜あくや、兩篇汝達いかんが知る」と云々<sup>2</sup>うちま  
 かせて人みな謂へらく「夜あけて後日いつ」と答へ申す<sup>3</sup>上人のたまはく「しからざるなり」と、「日いでて  
 まさに夜あくものなり<sup>4</sup>その故は日輪まさに須彌の半腹を行度するとき他州のひかり近くについてこの南州  
 明かになれば「日出でて夜はあく」といふなり、此は譬なり、無礙光の日輪照觸せざる時は永々昏闇の無明の  
 夜あけず、然るにいま宿善とき到りて不礙難思の日輪食臍の半腹に行度するとき無明やうやく闇はれて信心忽  
 ちに明かなり<sup>5</sup>しかりと雖も貪願の雲霧かりに覆ふによりて炎王・清淨等の日光あらはれず、これによりて「煩

憍障眼雖不能見」とも釋し「已能雖破無明闇」とらのたまへり 9 日輪の他力いたらざるほどはわれと無明を破すといふことあるべからず 10 無明を破せずばまた出離その期あるべからず 11 他力をもて無明を破するが故に「日

いでてのち夜あく」といふなり 12 これ先の光明名號の義に意同じといへども自力他力を分別せられん爲に法警を合して仰言ありきと云々

四 一〇 善惡二業の事 〇 2 上人觀覺仰にのたまはく 某はまたく善も欲しからず、また惡も恐なし 4 善の欲しからざる故は彌陀の本願を信受するに勝れる善なきが故に、惡の恐なきといふは彌陀の本願をさまたぐる惡なきが故に 5 然るに世の人皆謂へらく「善根を具足せずんばたとひ念佛すといふとも往生すべからず」と、また「たとひ念佛すといふとも惡業深重ならば往生すべからず」と 6 このおもひ共に甚だ然るべからず 7 もし惡業を意に任せてとゞめ善根を思の儘にそなへて生死を出離し淨土に往生すべくば、あながちに本願を信知せずとも何の不足かあらん 8 そのこと孰れも意に任せざるによりて、惡業をば恐れながらすなはち起し、善根をばあらま

せども得ること能はざる凡夫なり 9 かゝる淺ましき三毒具足の惡機としてわれと出離に途絶えたる機を攝取したまはん爲の五劫思惟の本願なるが故に、たゞ仰ぎて佛智を信受するに如かず 10 然るに善機の念佛するをば決定往生とおもひ、惡人の念佛するをば往生不定とうたがふ、本願の規模こゝに失し、自身の惡機たることを知らざるになる 11 おほよす凡夫引接の無縁の慈悲をもて修因感果したまへる別願所成の報佛報土へ五乘ひとしく入ることは、諸佛未だ發さざる超世不思議の願なれば 12 たとひ讀誦大乘・解第一義の善機たりといふとも、己が生得の善ばかりをもて其の土に往生することかなふべからず、また惡業はもとより諸の佛法に捨てらるる所なれば、惡機また惡を募として其の土へのぞむべきにあらず 13 しかれば機に生れつきたる善惡の二つ報土往生の得ともならず失ともならず條勿論なり 14 さればこの善惡の機の上にもつ所の彌陀の佛智を募とせんよりほかは凡夫いかでか往生の得分あるべきや 15 さればこそ「惡も恐しからず」ともいひ「善も欲しからず」とはいへ」と 16 こゝをもて光明寺の大師「言弘願者如大經說一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲増上緣也」とのたまへり 17 文の意は「弘願といふは『大經』の說の如し、一切善惡凡夫の生るゝことを得るは皆阿彌陀佛の大願業力に乗りて増上緣と爲さるは莫し」となり 18 されば「宿善厚き人は今生に善をこのみ惡をお

【五】自力の修善は蓄へ難く、他力の佛智は護念の益をもて蓄へらるゝ事○ 2 たとひ萬行諸善の法財を修し蓄ふといふとも進道の資糧となるべからず、故は六賊知聞して侵奪するが故に 3 念佛においては既に「行者の善にあらず、行者の行にあらず」とら釋せらるれば 4 凡夫自力の善にあらず、全く彌陀の佛智なるが故に 5 諸佛護念の益によりて六賊これを侵すに能はざるが故に 6 出離の資糧となり、報土の正因となるなり、知るべし。

【六】弟子・同行を争ひ、本尊・聖教を奪ひ取ること然るべからざるよしの事○ 2 常陸國新堤の信樂房、聖人の御前にて法文の義理故に仰を用ひ申さるるによりて突鼻にあづかりて本國に下向のきざみ 3 御弟子蓮位房申されて曰く 4 「信樂房の御門弟の儀をはなれて下國の上は、預け渡さるゝところの本尊・聖教を召し返さるべくや候ふらん」と 5 「なかんづくに釋親鸞と外題の下に遊ばされたる聖教おほし、御門下を離れたてまつる上は定めて仰崇の儀ながらん歟」と云々 6 聖人の仰に曰く 7 「本尊・聖教を取返すこと甚だ然るべからざることなり 7 その故は親鸞は弟子一人もたす、何事を教へて弟子といふべきぞや、みな如來の御弟子なれば皆共に同行なり 8 念佛・往生の信心を獲ることは釋迦・彌陀二尊の御方便として發起すと見えれば全く親鸞が授けたるにあらず 9 當世たがひに違逆の時本尊・聖教をとり返し、附くる所の房號をとり返し、信心をとり返すなどいふこと、國中に繁昌と云々、かへすく然るべからず 10 本尊・聖教は衆生利益の方便なれば親鸞が睦をすて、他の門室に入るといふとも私に自尊すべからず、如來の教法は總じて流通物なればなり 11 然るに親鸞が名字ののりたるを法師憎ければ袈裟さへの風情に厭ひ思ふによりてたとひ彼の聖教を山野に棄つといふとも、その處の有情群類かの聖教に救はれて悉くその益を得べし 12 然らば衆生利益の本懐そのとき満足すべし 13 凡夫の執する所

の財寶の如くにとり返すといふ義あるべからざるなり 14 よく心得べし」と仰せありき。

【七】凡夫往生の事○ 2 おほよす凡夫の報土に入る事をば諸宗許さる所なり 3 然るに淨土眞宗に於て善導家の御意、安養淨土をば報佛報土と定め、入る所の機をばさかりに凡夫と談す 4 この事性相の耳を驚かすことなり 5 されば彼の性相に封ぜられて人の心おほく迷ひてこの義勢におきて疑をいだく 6 その疑の萌す所は必ずしも彌陀超世の悲願を「さる事あらじ」と疑ひたてまつるまではなけれども 7 わが身の分を卑下してその理を辨へ知りて、聖道門よりは凡夫報土に入るべからざる道理をうかべてその比量をもて今の眞宗を疑ふまでの人は稀なれども、8 聖道の性相世に流布するを何となく耳に觸れならひたる故歟、多く之に防がれて眞宗別途の他力を疑ふこと、且は無明に癡惑せられたる故なり、且は明師にあはざるが致す所なり 9 其の故は淨土宗の意もと凡夫の爲にして聖人の爲に非すと云々 10 然れば貪慾も深く瞋恚も猛く愚癡も熾ならんにつけても今度の順次の往生は佛語に虚妄なければいよく必定と思ふべし 11 あやまたわが心の三毒もいたく興盛ならず善心頻りに起らば、往生不定の思もあるべし 12 その故は「凡夫の爲の願」と佛説分明なり、然るにわが心凡夫けもなくば「さてはわれ凡夫にあらねばこの願に漏れやせん」と思ふべきによりてなり 13 然るに吾等が心既に貪瞋癡の三毒皆同じく具足す、之が爲とて起さるゝ願なれば、往生その機として必定なるべしとなり 14 かく心得つれば、心の惡きにつけても機の卑劣なるにつけても往生せすばあるべからざる道理文證勿論なり、何方よりか凡夫の往生もれて空しからんや 15 然れば則ち「五劫の思惟も兆載の修行もたゞ親鸞一人が爲なり」と仰言ありき 16 私に云く「此をもて彼を案するに、この條祖師聖人の御事に限るべからず、末世の吾等みな凡夫たらん

上は亦もて往生同じかるべし」と知るべし。

八 一切經御校合の事。西明寺の禪門の父、修理亮時氏、政徳を專にせしころ一切經を書寫せられき。これを校合のために智者、學生たらん僧を屈請あるべしとて、武藤左衛門入道 實名を知らず 并にやどやの入道 實名を知らず 兩大名に仰せつけて尋ねあなぐられけるとき、事の縁ありて聖人をたづね出したてまつりき。もし常陸の國笠間郡稻田の郷に御經題の頃歟。聖人その請に應じまし。一切經御校合ありき。その最中、副將軍連々眠近したてまつるに、あるとき盃酌の砌にして種々の珍物を具へて諸大名面々數獻の沙汰に及ぶ。聖人別して勇猛精進の僧の威儀をたゞしくし在すことなればたゞ世俗の入道俗人等と同じき御振舞なり、よて魚鳥の肉味等をも聞召さるゝこと御憚なし。時に餚を御前に進ず、此を聞召さるゝこと常のごとし。袈裟を御著用ありながらまるるとき、西明寺の禪門、ときに開壽殿とて九歳、さしよりて聖人の御耳に密談せられて曰く、「あの入道ども面々魚食の時は袈裟を脱ぎてこれを食す、善信の御房いかなれば袈裟を御著用ありながら食し在すぞや、これ不審」と云々。聖人仰せられて曰く、「あの入道達は常に此を用ゐるについてこれを食する時は袈裟を脱ぐべきこと、覺悟のあひだ脱ぎてこれを食する歟、善信は此の如きの食物邂逅なればおほけて急ぎ食べんとするにつきて忘卻して此を脱がす」と云々。開壽殿また申されて曰く、「この御答御僞言なり、定めて深き御所存ある歟、開壽幼稚なればとて御蔑如にこそ」とて退きぬ。また或時さきの如くに袈裟を御著服ありながら御魚食あり、また開壽殿前の如くに尋ね申さるゝ、聖人また御忘卻と答へまします。13 そのとき開壽殿「さのみ御廢忘あるべからず、これ併しながら幼少の愚意深義を辨へ知るべからざるによりて御所存を述べられざるものなり、まけて

たゞ實義を述成あるべし」と再三こざかしく望み申されけり。14 そのとき聖人のがれがたくして、幼童に對して示しまし。て曰く「稀に人身を受けて生命を亡し肉味を食すること甚だ然るべからざることなり、されば如来の制誡にも此事殊にさかんなり。15 しかれども末法濁世の今時の衆生無戒の時なれば持つ者もなく破する者もなし、これによりて剃髮染衣のその姿たゞ世俗の群類に心同じきが故にこれらを食す。17 とても食する程ならばかの生類をして解脱せしむるやうにこそありたく候へ。18 然るにわれ名字を釋氏にかるといへども、心俗塵に染みて智もなく徳もなし、何によりてかかの有情を救ふべきや。19 これによりて袈裟はこれ三世の諸佛解脱幢相の靈服なり、これを著用しながらかれを食せば袈裟の徳用をもて濟生利物の願念をや果すと存じてこれを著しなからかれを食するものなり。20 冥衆の照覽を仰ぎて人倫の所見を憚らざること且は無慚無愧の甚しきに似たり、然れども所存此の如し」と云々。21 この時開壽殿幼少の身として感氣おもてにあらはれ隨喜もとも深し。22 「一天四海を治むべき棟梁、その器用は幼きより様あるものなり」と仰言ありき。

九 あるとき鸞聖人、黒谷の聖人の禪房へ御參ありけるに、修行者一人御伴の下部に案内して曰く「京中に八宗兼學の名譽まします、智慧第一の聖人の貴坊や知らせたまへる」といふ。2 この様を御伴の下部御車のうちへ白す。鸞聖人のたまはく「智慧第一の聖人の御房と尋ぬるは、もし源空聖人の御こと歟、然らばわれこそ只今かの御坊へ參する身にてはんべれ、いかん」。修行者申して曰く「その事に候、源空聖人の御ことを尋ね申すなり」と、鸞聖人のたまはく「さらば先達すべし、この車に乗らるべし」と、修行者おほきに辭し申して「そのおそれあり、かなふべからず」と云々。鸞聖人のたまはく「求法の爲ならばあながちに關心あるべからず、釋門

の睦何か苦しかるべき、たゞ乗らるべし」とて、再三辭退まをすといへども御伴の者に「修行者かくる所の籠負をかくべし」と御下知ありて御車にひき乗せらる。而してかの御坊に御参ありて、空聖人の御前にて鸞聖人「鎮西の者と申して修行者一人、求法のためとて御坊を尋ね申してはんべりつるを路次より相伴ひ参りて候、召さるべきをや」と云々、空聖人「こなたへ招請あるべし」と仰あり、よりて鸞聖人かの修行者を御引導ありて御前へめさる。その時空聖人はたと修行者を睨みましますに、修行者また聖人を睨み返したてまつる、かくてや久しく互に言説なし、<sup>10</sup>暫くありて空聖人仰せられて言はく「御房は何處の人ぞ、又何の用ありて來れるぞや」と修行者申して曰く「我はこれ鎮西の者なり、求法の爲に華洛に上る、仍て推参つかまつるものなり」と<sup>12</sup>そのとき聖人「求法とは何れの法を求むるぞや」と、修行者白して曰く「念佛の法を求む」と<sup>13</sup>聖人言はく「念佛は唐土の念佛か日本の念佛か」と、修行者暫く停滯す、然れどもきと案じて「唐土の念佛を求むるなり」と云々、<sup>14</sup>聖人言はく「さては善導和尚の御弟子にこそあるなれ」と<sup>15</sup>その時修行者懐よりつま硯をとり出して二字を書きてさ、ぐ、鎮西の聖光房これなり、<sup>16</sup>この聖光ひじり鎮西にして謂へらく「洛に世もて智慧第一と稱する聖人おはすなり、何事かははんべるべき、われ速に上洛してかの聖人と問答すべし、その時もし智慧すぐれて吾にかさまば吾まさに弟子となるべし、また問答に勝たば彼を弟子とすべし」と<sup>17</sup>しかるにこの慢心を空聖人権者とて御覽せられければ、今の如くに御問ありけるにや、<sup>18</sup>かのひじりわが弟子とすべきこと梯をたて、も及び難かりけり」と、慢幢忽ちに挫け、れば師資の禮をなしてたちどころに二字を捧げけり、<sup>19</sup>兩三年の後あるとき籠負かきおひて聖光房、聖人の御前へ参りて「本國戀慕の志あるによりて鎮西下向つかまつるべし、暇たまは

五七四

るべし」と申す、すなはち御前を罷りたちて出門す、<sup>20</sup>聖人言はく「あたは修行者が鬘を切らで行くはとよ」と<sup>21</sup>その御聲はるかに耳に入りけるにやたち歸りて白して曰く「聖光は出家得度して歳久し、然るに鬘を切らぬよし仰を蒙る、もとも不審、この仰耳に聞るによりて路を行くに能はず、事の次第を承り辨へんが爲に歸り参れり」と云々、<sup>22</sup>その時聖人言はく「法師には三の鬘あり、いはゆる勝他、利養、名聞、これなり、<sup>23</sup>この三箇年のあひだ源空が述ぶる所の法門を記しあつめて隨身す、本國に下りて人を虐げんとす、これ勝他にあらすや、其につけて善き學生といはれんと思ふ、これ名聞をねがふ所なり、よりて檀越をのぞむこと所詮利養のためなり、<sup>24</sup>この三つの鬘を剃り捨てすば法師といひがたし、仍てさ申しつるなり」と云々、<sup>25</sup>そのとき聖光房改悔の色をあらはして、負の底より納むる所の鈔物どもをとり出でて皆やりすて、又暇を申して出でぬ、<sup>26</sup>しかれども其餘残ありけるにや、終に仰をさしおきて口傳に背きたる諸行往生の自義を骨張して自障障他すること、祖師の遺訓を忘れ諸天の冥慮を憚らざるにやと覺ゆ、悲しむべし畏るべし、<sup>27</sup>しかればかの聖光房は最初に鸞聖人の御引導によりて黒谷の門下にのぞめる人なり、末學これを知るべし。

一〇 十八の願につきたる御釋の事。 二 彼佛今現在成佛等。 三 この御釋に、世流布の本には「在世」とあり、しかるに黒谷・本願寺兩師ともにこの「世」の字を略して引かれたり、私にその故を案するに、略せらる、條もともその所以ある歟、まづ大乘同性經にいはく「淨土中成佛悉是報身、穢土中成佛悉是化身」文といへり、<sup>6</sup>この文を依憑として大師報身報土の義を成せらる、に此の「世」の字を置きては頗る義理淺近なるべしと思召さる、歟、その故は「淨土中成佛」の彌陀如來につきて「いま世にましくて」とこの文を訓せばいまま少し義理い

一一

はれざる歟。極樂世界とも釋せらるゝ上は「世」の字いかでか報身報土の義にのくべきと覺ゆる篇もあれども、さればそれも自宗において淺近のかたを釋せらるゝ時の一往の義なり。おほよす諸宗において多くはこの字を淺近のときもちるつれたり。10 まづ「俱舍論」の性相、世間品に「安立器世間・風輪最居下」とら判ぜり、器世間を建立するとき此字もちるる條分明なり、世親菩薩の所造もとも所以あるべきをや勿論なり。11 然るにわが眞宗に至りては、善導和尚の御意によるに、すでに報身報土の廢立をもて規模とす。12 しかれば「觀彼世界相・勝過三界道」の論文をもて思ふに、三界の道に勝過せる報土にして正覺を成ずる彌陀如來のことをいふとき、世間淺近の事に用ゐる習ひたる「世」の字をもていかでか義を成せらるべきや。13 この道理によりていまの一字を略せらるゝかと思へたり。14 されば「彼佛今現在成佛」とつゞけてこれを訓するに「かの佛いま現在して成佛したまへり」と訓すれば遙に聞きよきなり、義理といひ文點といひ、この一字もともあまれる歟。15 この道理をもて兩祖の御相傳を推驗して八宗兼學の了然聖人に、ニミに三箇宗、いまの料簡を談話せしに「淨土眞宗において料簡もとも同すべし」と云々。

一〇 助業をなほ傍にしまして事。〇 驚聖人、東國に御經廻のとき御風氣とて三日三夜ひきかつぎて水漿不通しますことありき。常の時の如く御腰膝を打たせらるゝこともなし、御煎物などいふこともなし、御看病の人を近くよせらるゝこともなし。三箇日と申すとき「噫いまはさてあらん」と仰言ありて御起居平復もとの如し。5 そのとき惠信御房、男女六人君達の御母儀、尋ね申されていはく「御風氣とて兩三日御寢のところに、今はさてあらんと仰言あること何事ぞや」と。聖人しめしまして言はく「我この三箇年のあひだ淨土の三部經

を讀むこと怠らず、「同じくは千部讀まばや」と思ひて之を始むる所。また思ふやう「自信教人信・難中轉更難と見えたれば、自も信じ人を教へても信ぜしむるほかは何の務かあらんに、この三部經の部数を積むこと我ながら心得られず」と思ひなりて、此の事をよく／＼案じ定めん料にその間はひきかつぎて臥しぬ。10 常の病に非ざるほどに、今はさてあらんと言ひつるなり」と仰言ありき。11 私に云く、つらく／＼此の事を案するに、人の夢想の告の如く、觀音の垂迹として一向專念の一義を御弘通あること掲焉なり。

一〇 聖人本地觀音の事。〇 下野國さぬきといふ處にて惠信御房の御夢想にいはいはく、堂供養すると覺しき處あり、試樂ゆゑしく嚴重に執り行へる砌なり。4 こゝに虚空に神社の鳥居のやうなるすがたにて木を横へたり。5 それに繪像の本尊二鋪かゝりたり、一鋪は形體まします、たゞ金色の光明のみなり、いま一鋪はたゞしくその尊形あらはれまします。6 その形體まします本尊を人ありてまた人に「あれは何佛にてましますぞや」と問ふ。7 人答へていはく「あれこそ大勢至菩薩にてまします、すなはち源空聖人の御ことなり」と云々。8 また問うていはく、「いま一鋪の尊形あらはれたまふをあれはまた何佛ぞや」と。人答へていはく「あれは大悲觀世音菩薩にてましますなり、あれこそ善信御房にてわたらせたまへ」と申すと覺えて夢さめ畢んぬ」と云々。10 このことを聖人に語りまをさるゝところに「11 そのことなり、大勢至菩薩は智慧をつかさどりまします菩薩なり、すなはち智慧は光明と現はるゝによりて、ひかりばかりにてその形體はまします。12 驚聖人の御本地の様は御ぬしに申さんことわが身としては、憚れば申しだすに及ばず。14 かの夢想の後には心中に渴仰の念ふかくして、年月を送るばかり



なり15すでに御歸京ありて御入滅の由承るについて「わが父はかゝる權者にてましくける」と知りたてまつられんが爲に申すなり」とて16越後の國府より留め置き申さる、惠信御房の御文、弘長三年の春のころ御女覺信御房へ進ぜらる17私に云く、源空聖人、勢至菩薩の化現として本師彌陀の教文を和國に弘興しますます18親鸞聖人、觀世音菩薩の垂迹として共に同じく無礙光如來の智炬を本朝にかゝやかさん爲に師弟となりて口決相承しますますこと明かなり19仰ぐべし、尊むべし。

一〇 蓮位房 聖人當體の御門弟、眞宗復古の學者、俗姓源三位賴政の顯孫の夢想の記の2 建長八歲丙辰二月九日の夜寅の時、釋蓮位、夢に聖德太子の勅命をかうぶる 皇太子の尊容を示現して釋親鸞法師にむかはしめましくて文を誦して親鸞聖人を敬禮しますます 4 その告命の文にのたまはく「敬禮大慈阿彌陀佛爲妙教流通來生者五濁惡時惡世界中決定即得無上覺也」文といへり 5 この文の意は「大慈阿彌陀佛を敬禮したてまつるなり、妙教流通のために來生せる者なり、五濁惡時惡世界中にして、決定して即ち無上覺を得しめたるなり」といへり 6 蓮位ことに皇太子を恭敬し尊重したてまつると覺えて夢さめてすなはちこの文を書きをはりぬ 私に云く、この夢想の記をひらくに、祖師聖人あるひは觀音の垂迹とあらはれ、あるひは本師彌陀の來現と示しますますこと明かなり 彌陀觀音一體異名、ともに相違あるべからず 9 しかれば彼の御相承、その述義を口決の末流、他に異なるべき條、傍若無人と謂ひつべし、知るべし。

一〇 體失・不體失の往生の事 〇 聖人親鸞のたまはく 3 先師聖人 源空の御時はかりなき法文評論のことありき 善信は「念佛往生の機は體失せずして往生を遂ぐ」といふ、小坂の善惠房 聖人は「體失してこそ往生は遂ぐ

れ」と云々 〇 5 この相論なり 6 〇、に同朋の中に勝劣を分別せんが爲にまた大師聖人 源空の御前に參じて白されて曰く「善信御房と善惠御房と法文評論のことはんべり」とてかみ件の趣を一々に述べ申さる、所に 7 大師聖人 源空の仰に曰はく、善信房の「體失せずして往生す」と立てらる、條はやがて「さぞ」と御證判あり、善惠房の「體失してこそ往生はとくれ」と立てらる、も亦やがて「さぞ」と仰あり 8 これによりて兩方是非辨へ難き間、その旨を衆中より重ねて尋ね申す所に、仰に言はく 9 「善惠房の體失して往生するよし述ぶるは諸行往生の機なればなり、善信房の體失せずして往生するよし申さる、は念佛往生の機なればなり 10 如來教法元無二なれども、正爲衆生機不同なれば、わが根機にまかせて領解する條、宿善の厚薄によるなり 11 念佛往生は佛の本願なり、諸行往生は本願にあらず 12 念佛往生には臨終の善惡を沙汰せず至心信樂の歸命の一心他力より定まるべき時即得往生不退轉の道理を善知識にあうて聞持する平生のきざみに治定するあひだ 13 この穢體亡失せずといへども業事成辨すれば體失せずして往生すといはる、歟 14 本願の文明かなり、かれを見るべし 15 諸行往生の機は臨終を期し來迎を待ち得ずしては胎生邊地までも生るべからず 16 この故に穢體亡失する時ならではその期するところなきによりてその旨を述ぶる歟 17 第十九の願に見えたり 18 勝劣の一段においては、念佛往生は本願なるについて徧く十方衆生にわたる、諸行往生は非本願なるによりて定散の機にかぎる 19 本願念佛の機の不體失往生と非本願諸行往生の機の體失往生と殿最懸隔にあらずや 20 何れも文釋ことばに先ちて歴然なり。

一〇 眞宗所立の報身如來、諸宗通途の三身を開出する事 〇 2 彌陀如來を報身如來と定むること、自他宗をいはす古來の義勢こと古りんたり 3 されば荆溪は「諸教所讚多在彌陀」とも述べ、檀那院の覺運和尚は「久遠實

成彌陀佛、永異諸經之所說」と釋せらる。4 しかのみならず、わが朝の先哲はしばらくさしおく。5 宗師 異朝の善導大師の御釋にのたまはく「上從海德初最如來、乃至今時釋迦諸佛、皆乘弘誓悲智雙行」と釋せらる。6 しかれば海德佛より本師釋尊にいたるまで番々出世の諸佛、彌陀の弘誓に乗じて自利利他したまへるむね顯然なり。7 覺運和尚の釋義「釋尊も久遠正覺の彌陀」とあらはさる。8 上の、いまの和尚の御釋にえあはすれば、最初海德以來の佛々も皆久遠正覺の彌陀の化身たる條、道理文證必然なり。9 一字一言加減すべからず、ひとつ經法の如くすべしと述べまします。10 光明寺のいまの御釋は専ら佛經に準する上は自宗の正依經たるべし。11 傍依の經にまたあまたの證說あり。12 楞伽經にのたまはく「十方諸刹土、衆生善薩中、所有法報身、化身及變化、皆從無量壽、極樂界中出」。文と説けり。13 また般舟經にのたまはく「三世諸佛、念彌陀三昧、成等正覺」とも説けり。14 諸佛自利利他の願行、彌陀をもて主として分身造化の利生方便を廻らすこと掲焉。15 これによりて久遠實成の彌陀をもて報身如來の本體と定めて、これより應述を垂る、諸佛通總の法報應等の三身はみな彌陀の化用たりといふことを知るべきものなり。16 しかれば報身といふ名言は久遠實成の彌陀に屬して常住法身の體たるべし。17 通總の三身は彼より開き出すところの淺近の機に赴くところの作用なり。18 されば聖道難行にたへざる機を、如來出世の本意にあらざれども易行易修なる所をとりどころとして、いまの淨土教の念佛三昧をば衆機にわたして勸むるぞとみな人おもへる歟。19 いまの黒谷の大勢至善薩化現の聖人より代々血脈相承の正義においてはしかんはあらず。20 海德佛よりこのかた釋尊までの説教、出世の本意、久遠實成の彌陀のたちとより法藏正覺の淨土教の興るをはじめとして衆生濟度の方軌と定めて、この淨土の機と、のほらざるほど暫く在世の權機に對して方便の教

として五時の教を説きたまへりと知るべし。21 たとへば、月待つほどの手すさみの風情なり。22 いはゆる三經の説時をいふに「大無量壽經」は法の眞實なるところを説きあらはして對機はみな權機なり。23 觀無量壽經は機の眞實なるところを顯はせり、これすなはち實機なり、いはゆる五障の女人韋提をもて對機として、遠く末世の女人惡人にひとしむるなり。24 小阿彌陀經はさきの機法の眞實をあらはす、二經を合説して「不可以少善根、福德、因緣、得生彼國」とら説ける。25 無上大利の名願を一日七日の執持名號に結び止めて、こゝを證誠する諸佛の實語を顯説せり。26 これによりて「世尊説法時將了」とら釋。光明寺にまします。27 一代の説教むしろを巻きし肝要、いまの彌陀の名願をもて付屬流通の本意とする條、文にありて見つべし。28 いまの三經をもて末世造惡の凡機に説き聞かせ、聖道の諸教をもてはその序分とすること光明寺の處々の御釋に歴然たり。29 こゝをもて諸佛出世の本意とし衆生得脫の本源とする條明かなり。30 如何に況んや諸宗出世の本懐とゆるす。法華において今の淨土教は同味の教なり。31 法華の説時八箇年中に王宮に五逆發現のあひだ此の時にあたりて靈鷲山の會座を没して王宮に降臨して他力を説かれし故なり。32 これらみな海德以來乃至釋迦一代の出世の元意、彌陀の一教をもて本とせらる、大都なり。

一 信の上の稱名の事。3 聖人 親聖の御弟子に高田の覺信房 太郎人道三郎と云ふ人ありき。重病を受けて御坊中にして獲麟に臨む時、聖人 親聖入御ありて危急の體を御覽せらる、所に、呼吸の息あらくして已に絶えなんとするに稱名怠らず隙なし。4 そのとき聖人たづね仰せられて言はく「その苦しげさに念佛強盛の條まづ神妙たり、但し所存不審いかん」と。覺信房答へ白されて曰く「よろこび已に近けり、存せんこと一瞬に迫る、

利那の間たりといふとも息の通はんほどは往生の大益を得たる佛恩を報謝せんばあるべからずと存するについで、かくのごとく報謝のために稱名つかまつるものなり」と云々、<sup>6</sup>このとき聖人親筆「年來常隨給仕のあひだの提擲そのしるしありけり」と御感のあまり隨喜の御落涙千行萬行なり、<sup>7</sup>然れば私にこれをもてこれを案するに眞宗の肝要安心の要須これにあるもの歟、自力の稱名を勵んで臨終の時はじめて蓮臺にあなうらを結ばんと期する輩、前世の業因知りがたければ、いかなる死の縁かあらん、火にやけ水におほれ刀剣にあたり乃至寢死までも皆これ過去の宿因にあらずといふことなし<sup>10</sup>もし此の如くの死の縁身に具へたらば更に逃るゝことあるべからず<sup>11</sup>もし怨敵のために害せられればその一利那に凡夫として思ふところ怨結のほか何ぞ他念あらん<sup>12</sup>また寢死においては本心息の絶ゆる際を知らざる上は臨終を期する先途すでに虚しくなりぬべし、いかにしてか念佛せん<sup>13</sup>またさきの殺害の機、怨念のほか他あるべからざる上は念佛するにいとまあるべからず、終焉を期する前途またこれもむなし<sup>14</sup>假令かくの如きらの死の縁にあはん機、日比の所在に違せば往生すべからずと皆おもへり<sup>15</sup>たとひ本願の正機たりといふともこれらの失、難治不可得なり<sup>16</sup>況んやもとより自力の稱名は臨終の所期おもひの如くならん定、邊地の往生なり<sup>17</sup>何に況んや過去の業縁逃れ難きによりて、これらの障難にあはん機、涯分の所存も達せんこと難きが中に難し<sup>18</sup>そのうへまた懈慢邊地の往生だにもかなふべからず、これみな本願に背くがゆるゑなり<sup>19</sup>、をもて御釋淨土文にのたまはく「憶念彌陀佛本願、自然即時入必定唯能常稱如來號、應報大悲弘誓恩」と見えたり<sup>20</sup>、たゞよく如來の號を稱して大悲弘誓の恩を報いたてまつるべし」と<sup>21</sup>平生に善知識の教をうけて「信心開發するきさみ正定聚の位に住す」とたのみなん機はふた、び臨終の時分

五八三

に往益をまつべきにあらず<sup>22</sup>その後の稱名は佛恩報謝の他力催促の大行たるべき條、文にありて顯然なり<sup>23</sup>これによりてかの御弟子最後のきさみ御相承の眼目相違なきについて御感涙を流さるゝものなり、知るべし。  
**【七】**一、凡夫として毎事勇猛の振舞みな虚假たる事<sup>24</sup>、愛別離苦にあうて父母妻子の別離を悲しむとき「佛法を持ち念佛する機いふ甲斐なく歎き悲しむこと然るべからず」とて彼を恥ぢしめ諫むること多分先達めきたるともがら皆此の如し<sup>25</sup>この條、聖道の諸宗を行學する機のおもひならはしにて、淨土眞宗の機教を知らざるものなり、まづ凡夫は事において拙く愚なり、その奸詐なる性の實なるをうづみて賢善なる由をもてなすはみな不實虚假なり、たとひ未來の生處を彌陀の報土と思ひ定め、ともに淨土の再會を疑なしと期すとも、後れ先つ一旦の悲、惑へる凡夫として何ぞこれなからん、<sup>26</sup>なかんづく嚙劫流轉の世々生々の芳契、今生をもて輪轉の結句とし、愛執愛著の假の宿、この人界の火宅、出離の舊里たるべきあひだ、依正二報ともにいかでか名殘惜しからざらん、<sup>27</sup>これを思はずんば凡衆の攝にあらざるべし、<sup>28</sup>けなけならんこそ「あやまて自力聖道の機たる歟、いまの淨土他力の機にあらざる歟」とも疑ひつべけれ、愚に拙けにして歎き悲しまんこと他力往生の機に相應たるべし、<sup>29</sup>うちまかせて凡夫の有様にかはりめあるべからず<sup>30</sup>往生の一大事をば如來にまかせたてまつり<sup>31</sup>今生の身のふるまひ心のむげやう口に言ふこと貪瞋癡の三毒を根として殺生等の十惡、穢身の有らんほどは斷ち難く伏し難きによりて、是を離るゝことあるべからざれば<sup>32</sup>なかく愚に拙けなる煩惱成就の凡夫にてたゞ假に飾る所なき姿にてはんべらんこそ淨土眞宗の本願の正機たるべけれと正しく仰せありき<sup>33</sup>されば常のひとは妻子眷屬の愛執ふかきをば臨終の際には近けじ見せじとひきさくる習なり、それといふは著相にひかれて惡道

一九

に墮せしめざらんがためなり<sup>14</sup>この條、自力聖道の常の心なり、他力の眞宗にはこの義あるべからず<sup>15</sup>その故はいかに境界を絶離すといふとも持つところの他力の佛法なくば何をもてか生死を出離せん<sup>16</sup>たとひ妄愛の迷心深重なりといふとも本よりかゝる機を旨と攝持せんといでたちて之がために設けられたる本願なるによりて、至極大罪の五逆謗法等の無間の業因を重しとしましませば、況て愛別離苦に堪へざる悲歎に障へらるべからず<sup>17</sup>淨土往生の信心成就したらんにつけても此度が輪廻生死のはてなれば、歎も悲もとも深かるべきについて、後枕にならびるて悲歎嗚咽し左右に羣集して戀慕涕泣すとも更にそれによるべからず<sup>18</sup>さながらんこそ凡夫けもなくて殆んど他力往生の機には不相應なるかやとも嫌はれつべけれ<sup>19</sup>さればみたらん境界をも憚るべからず、歎き悲しまんをも諫むべからずと云々。

【一八】別離等の苦にあうて悲歎せんやからをば佛法の藥を勸めてそのおもひを教誘すべき事○<sup>2</sup>人間の八苦の中に前にいふところの愛別離苦これ最も切なり<sup>3</sup>まづ生死界の住み果つべからざる理を述べて、次に安養界の常住なる有様を説きて、憂へ歎くばかりにて、憂へ歎かぬ淨土を願はずんば、未來も亦かゝる悲歎にあふべし、如かじ唯聞悲歎聲の六道に別れて入彼涅槃城の彌陀の淨土に詣でんには」とこしらへ趣けば、闇冥の悲歎やうやくに霽れて攝取の光益になどか歸せざらん<sup>4</sup>次にかゝるやからには悲しみに悲しみを添ふるやうにはゆめゆめ弔ふべからず<sup>7</sup>もし然らば弔ひたるにはあらでいよくわびしめたるにてあるべし<sup>8</sup>酒はこれ妄憂の名あり、これを勸めて笑ふほどに慰めて去るべし、さてこそ弔ひたるにてあれと仰せありき、知るべし。

【一九】如來の本願はもと凡夫のためにして聖人のためにあらざる事○<sup>2</sup>本願寺の聖人、黒谷の先徳より御相

承とて、如信上人仰せられて曰く<sup>3</sup>「世の人つねにおもへらく、悪人なほもて往生す、況んや善人をや」と<sup>4</sup>このこと遠くは彌陀の本願にそむき近くは釋尊出世の金言に違せり<sup>6</sup>その故は五劫思惟の劬勞、六度萬行の堪忍、しかしながら凡夫出要のためなり、全く聖人のためにあらず<sup>6</sup>しかれば凡夫、本願に乗じて報土に往生すべき正機なり<sup>7</sup>凡夫もし往生かたかるべくば、願慮設なるべし、力徒然なるべし<sup>8</sup>然るに願力あひ加して十方衆生のために大饒益を成す<sup>9</sup>これによりて正覺をとなへて今に十劫なり<sup>10</sup>これを證する恆沙諸佛の證誠豈無虛妄の説にあらずや<sup>11</sup>しかれば御釋にも「一切善惡凡夫得生者」とらのたまへり、これも惡凡夫を本として善凡夫を傍に兼ねたり<sup>12</sup>かるがゆゑに傍機たる善凡夫なほ往生せば専ら機正たる惡凡夫いかでか往生せざらん<sup>13</sup>しかれば「善人なほもて往生す、いかにいはんや惡人をや」といふべしと、仰言ありき。

【二〇】罪は五逆謗法生ると知りてしかも小罪も造るべからずといふ事○<sup>2</sup>同じき聖人の仰とて、先師信上人の仰に曰く<sup>3</sup>「世の人つねに思へらく、小罪なりとも罪を恐れおもひて止めばやと思はゞ意にまかせて止められ、善根は修し行ぜんと思はゞ蓄へられて、これをもて大益をも得、出離の方法ともなりぬべし」と<sup>4</sup>この條眞宗の肝要にそむき先哲の口授に違せり<sup>5</sup>まづ逆罪等を造ること全く諸宗の掟、佛法の本意にあらず、しかれども惡業の凡夫過去の業因にひかれてこれらの重罪を犯す、これ止め難く伏し難し<sup>6</sup>また「小罪なりとも犯すべからず」と言へば凡夫意に任せて罪をば止め得つべしと聞ゆ<sup>7</sup>然れども、もとより罪體の凡夫、大小を論ぜず三業みな罪にあらずといふことなし<sup>8</sup>しかるに「小罪も犯すべからず」と言へば「過ても犯さば往生すべからざるなり」と落居する歟<sup>9</sup>この條もとも思擇すべし、これも抑止門の意歟、抑止は釋尊の方便なり、眞宗の落居は彌陀